
魔法少女リリカルなのは～巡り会う鍵～

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜巡り会う鍵〜

【Nコード】

N3009W

【作者名】

こーごうせい

【あらすじ】

いつもの様に島でのんびり過ごすソラ
自分の存在に疑問を持つリク
そんな二人を見守るカイリ

そんな3人の間に亀裂が走る・・・

一方

海鳴市ではある少女が本来出会うはずのない特別な魔法 - 鍵 - に出
会う

小さな物語

はじめに

「KH×リリカルなのは」

島から闇の回廊を通過して異世界に飛ばされたソラ

そこは魔法などとは無縁の海鳴市

カイリからもらった石が元で原作に大きく食い込んでいきます……

・
初小説なので

至らないことばかりですがどうかよろしく願いします。

設定上？と？が織り交ざったりすることがありますがご了承ください。
い。

設定&著作権上

ドナグーと某ねずみは出てきません……たぶん

ミッーに怒られちゃいますから……ww

原作はリリカルなのはに沿って進めていきます

基本週1 3ぐらいで更新したいと思います

おしらせー

どもども

いつも？この小説を読んでくれる皆様ありがとうございます。二一
こうせいです。
えっとですね

ちょっと話の流れを確認するために前話を読んでいったんですよ。

これはひどい（笑）

ってことで書き直そうと思います〜
まあゆっくり書き直していきますよ。

あとですね、A・S編もやっていこうと思います！！いえい！！
まあ、主人公どーしよーとか考えてるんですけどね〜

まあ気長に待っててください。

あともう一つ。

リクの闇化に気をつけて（笑）もはや病んです。あとA・Sじゃ空
気なんだろうなあ……いや、知らんけどさ。

まあ今後ともよろしくお願いします！！

設定 + キャラ紹介

【最終更新日 9 / 3】追加：キープレード『ヴィンクルム』

登場人物

＼ KINGDOM HEARTS side ＼

ソラ

年齢 / 14歳

性別 / 男

それなりに悩み事はあるがくよくよしない陽気な性格。
やや単純だが正義感は一歩強い。

装備 / キープレード

ヴィンクルム

ソラが使う武器。

『ヴィンクルム』という名前で愛称『ヴィン』

性格的には基本マイペース。デバイスかと聞くと猛烈に反対する。

リク

年齢 / 15歳

性別 / 男

探究心旺盛で、自分が暮らすちっぽけな世界に疑問を感じている。

カイリ

年齢 / 14歳

性別 / 女

数年前ソラとリクのいる島にやってきた。

見た目は可憐だが強い意思を心のうちに秘めている。

ハートレス

ソラたちに襲い掛かるなぞの存在。さまざまタイプがある。

〈魔法少女リリカルなのは side〉

高町なのは

年齢 / 9歳

性別 / 女

自称「平凡な小学3年生」

明るく優しい性格で強い正義感を持つが、辛いこと、悲しいことを抱え込んでしまう癖がある。

デバイス / レイジングハート

ユーノ・スクライア

年齢 / 9歳

性別 / 男

異世界、ミッドチルダからなのは達の世界にやってきたのはと同一年の少年。

フェイトテストロッサ

年齢/????

性別/女

母プレシアの指示で、ジュエルシードを集めるために使い魔のアルフを伴ってなのは達の住む世界にやってきた。

デバイス/バルディッシュ

アルフ

年齢/????

性別/女・・・雌・・・?

生まれて間もなく死病に侵されて群れからも見放されたところをフイトに拾われ、彼女と契約することで一命を取り留めた。契約内容は「ずっとそばにいること」であり、実質どちらかが死を迎えるまで契約は有効となる。

〈基本設定〉

KINGDOM HERATSH side

基本的に変わりませんでした(過去)？の技は後々使いたかった…

(笑)

ただ魔法は？仕様なのはあしからず。

デイズニートは削除。
ついでにカイリもほぼ削除。

なのはside

気づけばクロノの美化。

なのは……など。

フェイトとアルフはほぼ空気。残念だ

設定＋キャラ紹介

【最終更新日9/3】

追加：キープレード『ヴィンクルム』

こんなかんじですね

ま、はじめのうちは日本語がおかしいかもしれませんが生暖かい目で見守ってあげてください（笑）

では、本編で

外の世界を夢見て（前書き）

さて、やっと本編ですね・・・

初めてなので、かーなーり、緊張。。。。

ディスティにーアイランドは1日目ー気にいきます（笑）

外の世界を夢見て

残された時間は少ない。僕はもう、戻れない。

けれど急がないで。．．．．．恐れなくて。

扉はまだ閉ざされている。

さあ、歩きだしてごらん。ここまで来られるかい．．．．．？
君の中に眠る力．．．力はカタチになり．．．カタチは力を与える。

そして、光がキミの元へと差し込む。

でも光に近づくほど、キミ自身の影は大きくなる。

けれど恐れなくて．．．．．忘れなくて．．．．．。

キミは世界で1番強い力を持っている。

だから忘れないで。

その扉を開くのは

キミなんだ。

- - - - -

ゆっくりとまぶたを開けると、まぶたに日差しが突き刺さる。
繰り返される波の音をバツクに
ソラは体を起こすと、大きく伸びをした。

いまの・・・なんだっけ？夢？・・・じゃないよなあ・・・
なにか怖い夢を見ていた気が・・・

そう考えながら再び体を倒そうとすると

「ソラ！」

「わわ！！！」

目の前にカイリが現れた。

「おどかすなよ、カイリ」

「そっちが勝手に驚いたんじゃない。そろそろサボるころだと思っ
たんだよねえ、ソラは」

そういいながらソラの顔を覗き込んだ。
やべっ！いかだ作ってる途中だったんだ！！

「ちがうって！あの真っ黒いやつらが俺を飲み込んで、息ができな
くなくて、- - - - -！！！」

言い訳をするソラを見たカイリはわりと全力でソラの頭をたたいた。

「まだ目が覚めない？」

再び顔を覗き込まれ、自信がなくなってくる。

「夢じゃなくて・・・夢・・・だったのかなあ・・・？知らない場所でさ、変な場所です」

「はいはい」

でもあの感覚は夢じゃなくてあの声だって、もっと、こづ・・・

「なあ、カイリが子供のころにいたところって、どんなところだった？」

「覚えてないよ、前にもいったでしょ？」

そう、カイリは小さなころにこの島に来た。
たぶん来たのは・・・異世界。

「思い出したとか思って」

「ぜんぜん」

ソラは質問を続ける

「帰りたいとか、思わない？」

「私はここで幸せだから」

「そっか」

「でもね」

カイリは続ける

「見てみたいって気はするよ？」

「俺も、見て見たいんだよなあ、この世界以外に世界があるなら死ぬまでに、絶対」

「じゃあ、一緒にいこうね！」

そんな感じで和気藹々としていると

「おいおい、俺は仲間はずれかよ？しかも、まじめに作ってるのは俺だけだ」

後ろからリクが来た。

そして片手に持ってた丸太を投げられた。

「カイリも一緒にサボってたろ？」

「ばれたか・・・」

カイリは笑いながら照れるように頭を掻いた。

「じゃあ、みんなで仕上げちゃおう？向こうまで競争！」

「え〜」

「なんだよ、それ」

リクが座り込みソラはだらける・・・が・・・

「よーい、どん！」

日はまだ高い。今日もたっぷり働くことになりそうだ。

「ソラは・・・えーと、きのこ、木の葉、布、ロープに飲み水、あと食料として魚と・・・」

今日は忙しい。きのこはじめじめしてるところに、魚は海、飲み水は滝の水でいいとして……
移動距離がすごい。島の端から端まで全範囲走って物を集めなきゃならない。

島を駆け回るソラ。そんなソラに元気な声がかげられた。

「オッス、ソラー!!」

ティードダ。

ティードダ、ワツカ、セルフィとはいつも遊んでいる。
一緒に島も来るし、それに

「俺と勝負っす!!」

こんな事情もあるので、ソラたちとも仲がいい。
ソラの実力からしてティードダはよきライバル、といったところだ。

でも売られたケンカは……買っしかない!
ってことで材料探索はちょっと中止してすこし暴れますか!!

とはいってもリクとカイリを待たせるわけにも行かない。やるならばさっさと終わらせたいというのも本音。なので

「くるなら三人まとめてかかって来い!!」

ちょっと挑発してみた。

「かーっ！余裕こいちゃって。痛い目あってもしらないっすよ？」
少し、時間がかかりそうだ。

結果から言つと勝てた。

最近ワツカに勝てるようになったって所だったんだけど・・・

「じょーだんキツいっすよー・・・」

予想以上にティーダはダメージを受けたようだ。主に心に。

3人に勝てる実力はついたかもしれない。だが

「リクには勝てないんだよなあ……」

そう、つぶやいた。

そしてスイッチを遊びから探索に切り替えると再び島を駆け回った。

ティーダ達との勝負の後、木の実や、魚など準備は着々と進んだ。

一応準備が終わった後、まだ家へ帰るには時間が余っていたのでリ

クと一回だけ勝負をした。
まさかこのような結果になるとは思わなかった。自分もおどろい
る。

なんと勝ってしまった。
たぶんはじめてだろう

「よっしゃ！！これで1勝！！」

思わず叫んでしまったのも無理はないと思う。

「海の果てまで行ったら、カイリいた世界があるんだよな？」

「それはわからない。でも、行って見なきゃわからないままだ」

集めるものを集めて、いかだのところに置いたあとみんなで離れ小
島に来ていた。

「イカダで、どこまでいけると思う？」

「さあな、だめだったら、ほかの方法考えるさ」

リクの考えることはいつも難しくくて、理解できないことも多い。
それゆえに、考えてることも知らなかった。

別の世界で、何をしたいのかも、聞いたことがない。

「ねえ？リクは別の世界行ったら何するの？ソラみたいに、見れば満足？」

丁度、カイリが知らないことを質問した。

気になることだったが聞けなかった、という、面子もあるので、興味がない降りをしなから耳だけはしっかり傾けておく。

「実はそんなに考えていない、」

意外だった。リクはもっと考えてると思っていた。

「俺は、どうしてここにいるのかが知りたい。どうしてここじゃなきゃだめだったのか、それを知りたいんだ」

やはりリクの考えは難しかった。

「わっかんねえ」

木に寝転がってソラを見上げる。もうすっかり夕方だ。

「リクっているんな事考えてるんだね」

「カイリのおかげさ。カイリがこの島にこなかったら何も考えてなかったと思う。ありがとう、カイリ」

「なんだか照れるなあ」

自分で木に寝転がったと言つのもあるが、二人だけが会話をしている、というのは何か釈然としなかった。

外の世界を夢見て(後書き)

あ、今日は2本なんでもう一個^^)bグッ

(超、改訂)

嵐の前日(前書き)

連投!!

ま、こんかいでKHのみは終了・・・かな？

嵐の前日

「じゃあ今日は、きのこ、木の実、あと飲み水ね！」

はあ、はあ……

なぜだろう？なんで走っているんだろう？

島に来て、いかだの準備をしようとしていた3人。

しかし船に名前がないことに気づいた3人は名前を決めていた。それがなぜこんなことになってしまったのか？

現在、ソラとリクはビーチレースの真っ最中だった。入り江の周りを1周して帰ってくるという単純なレース。ただしたが砂浜なので足を取られる。

23

賭けの内容は

レースにソラが勝ったら船長。

リクがかったら

カイリとパオプの実を食べあう。

という内容だった。

こう聞いたときの俺の顔はどんなだったんだろう。

リクが俺をおちよくってるんだろつ。

そう思っていたのだがリクの顔は真剣そのもの。
負けられない、と思ったのだがこのレースで勝てるのは2割ぐらい。
望み薄、というやつだ。

パオプの実にはこんな伝説がある

パオプの実を食べさせあつた二人は必ず結ばれる。
どんなに離れていても、いつか必ず。

所詮伝説、されど伝説
信じているわけでもないが心に引っかかる。
ソラを本気にさせるには十分だった。

- - - - - s i d e リク

最近ソラに劣等感を感じる

この前の勝負もそうだ
ソラだから勝てるって思ってたらやられてしまった

どうして俺だけ1つ上なんだろつ？

どうして俺は二人と違うんだろう？

そう考えてたら胸からじわじわなにかが来てソラにこういつていた

「俺が勝ったら、カイリとパオプの実を食べる」

「は？」

このときのソラの顔は面白かった。

本当はこんなつもりじゃなかった、いつも通り、ふざけて、イカダを完成させたかった。

どうせソラは負ける。

ソラの覚悟が見たかったのかもしれない。

わからない。だが、なにかむしゃくしゃしていた。

気づいたら俺はソラが一番苦しむような言葉を選んでいて。

でも不思議と罪悪感はなかった。

結果としてレースは俺が勝った。

ムスツとした顔でリクをにらむソラ

なぜあんなことを言ってしまったのか
自分でもわからない。

カイリは元からソラを気にかけている
どうせわかった。カイリのことではソラには勝てない。

これを再認識してしまい
自分のイラつきを隠すために、ソラをただ本気にさせるだけだぞ、
といわんばかりに

「約束どおり、イカダの名前はハイウィンドだからな」

こう、言っていた。

- - - side out

リクに負け、からかわれているのがわかりどっと疲れが出てきた。

リクは、何をさせたかったんだろう？

そう思いながら今は食料を探していた
明日は出発の日
ちゃんと準備しないといけない。

幸いこの島は食料がいくつもあるから詰め込めるものは詰め込んで
行こう。そう、思いながら食料を探す。

後探してないところといえば……ん？

そこは、小さなころの小さな秘密。

「なつかしいな……」

小さなころ、カイリに教えた秘密の場所

「あつた」

それは小さなころ、二人で描いた落書き。
それをそつと撫でる。

昔を懐かしみながらそれをなでる。
そして童心が戻ってきた。その場に座り落書きに少しだけ絵を描き
加えた。

自分の手から伸びる手。パオプの目をカイリに食べさせているよう
な絵だ。

自分で描いておいて馬鹿らしくなったソラは腰を上げた。

「誰だ！」

『この世界はつながった』

「えっ？」

茶色いフードをかぶった男がたたずんでいた。

『闇と繋がった世界……まもなく光を失う世界』

その言葉に背筋が凍る

「あんた、気味悪い事いうなよ……!!!!
それより、あんた、どっから来たんだ!？」

男はその問いかけに答える。

『お前達にわかるまい。お前は何も知らない』

「俺はな、これからいろいろ知っていくんだよ。準備だつてしてるんだからな!」

『扉の向こう……何も知らないものが何を見ても、そう、何も理解できない』

男は視線を - 扉 - に向けソラもそれを追うと……男はもう、消えていた……。

- - - - -

洞窟から戻ったソラは荷物をもってカイリの場所に向かった。

男の事は気になったが消えてしまったことから、きつと疲れが出た

んだ、と決め付けた。

カイリはいかだのマストに寄りかかり、なにかを作っていた。

「なにそれ？」

「これ？これはサラサ貝のアクセサリーつくってるの。」

昔の船乗りはみんなサラサ貝を身に付けてたから。旅の無事のおまもりなんだって。

もし旅の途中でだれかが迷子になっても、必ず同じ場所に戻るようつてね。」

「へえ……」

そんなことも知ってるんだ……と感心しつつ荷物を渡した

「お疲れ様！、そうだ、これあげる。なんか砂浜に落ちてたんだよね」

そういつて渡されたのは、石

ただの、石……かと思いきや少し青みがかったひし形の石だった

「どこで拾ったの？」

「え？この間砂浜でひろったんだけどすごく目を奪われてね？きれいなものだったから。」

それに、ソラががんばってたから、ちょっとしたプレゼントにどうかなあって」

カイリが自分のため……そう思うと少しうれしくなってきた

「ありがとう！」

「コレもお守りだ、と思って大事にポケットへ入れた。」

夕方

ソラとカイリは二人で島中央の小島にいた。

二人でいろいろと話していた。昔のこと、これからのこと、3人のこと。

不思議と話題は費えない。

するとカイリがこんなことを言ってきた。

「リクって、ちょっと変わったよね」

「どこが？」

ソラが聞き返すとカイリは考えるように

「ええと……」

と唸る。

助けぶなを出したいところだが陸の変化に特に気づくことのないソラには何もいえなかった。

するとさらにカイリは突拍子のないことを言う。

「ね、このまま二人だけでいっちゃおっか？」

「なんてね」

「カイリのほうが変わったんじゃないのか？」

「かもね」

もし本当にこのまま行っていたらリクは怒っていただろう。
最も行く気も毛頭無いが。

そしてカイリは「あ、そうだ」というように付け足した。

「ソラは変わらないでね」

「へ？」

「海の方へ、いけるといいね」

それだけ言うと本島へ向かう船のほうへ歩いていった。

どういうことだろう・・・？

意味がわからないままそのままたずむソラ

その場には、もうソラしかない

わだかまりを残しつつも明日は出発だ、と張り切る。

しかし、その出発の日は、もうこなかった。

いつものように見える夕日がなにか違って見えた。

嵐の前日（後書き）

まあ。こんなかんじですかね

今は思いつきりKHしか進んでませんけど（笑）
次の更新にはたぶんクロスするはずで
すんじゃない、次の更新で！！

（超 改訂）

嵐の晩【前編】（前書き）

一応戦闘描写入り。笑

違和感、矛盾点、誤字脱字などありましたら教えてくださいね

それでは

嵐の晩【前編】

．．．海の向こう、いけるといいね！．．．

．．．ソラは変わらないでね．．．

どういうことだよ、もう．．．

あれかな、俺がちよつとかっこよくなつたとか．．．!?

あーでもリクのほうがかっこいいしなあ．．．背も高いし。

カイリの言った意味がよくわからず天井から下げた、船に乗った空とカイリの人形をながめる

．．．もし途中で誰かが迷子になっても．．．

ふと窓のほうを見る。

あれ、雨？雷も鳴ってるし．．．

「雨．．．．．。．．．．．イカダが!!」

バツと跳ね起き、階段を駆け下りる。

母さんが何かを言っていたがそれどころじゃないって!!

．．．side リク

島に嵐が来ていたので急いでいかだの様子を見に来たイカダを陸の方へ押しやり、防水性の布をかぶせる。

これで大丈夫だな。
せつかく作ったんだ。嵐で流されたら洒落にならない。

ふと離れ小島に目をやる
そこには見たことのない茶色いフードをかぶった男がたたずんでいた。

なにやってんだよあのおっさん！ただでさえ波が高いつてのに！

「おい！そのひと、危ないぞ！」

叫んだが聞こえなかったようだ
しかし嵐ははげしくなる一方

クソツ！仕方ない！

離れ小島に行くことにした

- - - s i d e o u t

- - - s i d e カイリ

嵐が来てた。

家の人にばれないようにそっと抜け出して島に向かう。

リクのボートだ・・・イカダの方かな・・・

そう思い、イカダを目指そうとするが自分が行っても邪魔になるだけだ……

女の自分に強い力はない。行って意味がないこともないが、陸は許さないだろう。

自分の非力さをうらみながら島に上がり空を見上げる

何……あれ……!!

この世のものとは思えないような、赤黒いまがまがしい玉……
雨も非常に強い。

とにかく、ぬれない場所に……

近くには洞窟
迷わず、洞窟に向かった。

- - - s i d e o u t

- - - s i d e ? ? ?

まだ、まだたりない……。

私の？大切？な？娘？に回収させなきゃね……

- - - s i d e o u t

- - - s i d e ソラ

島に着いたソラはとりあえず一言

「なんだありや！？」

空に浮かぶ暗黒の球

禍々しい雰囲気を漂わせながらも、落ちてきたりすることはなさそうだ

そして発着場からで一言

「わっ、なんだこいつら……」

地面から現れる？影？「シャドウ」

こいつら、夢に出てきた……！？

たしか地面に入ったりできる変な奴！
ハートレス

叩いても叩いても消えない。

「ああ、もう！-！」

こいつらは……ほつとくしかないな
でも移動しないと！なんか集まってきた！

逃げるように高台に上ると

?!?!?!?!?!?!?

離れ小島から闇が・・・!?!?

- - - s i d e o u t

- - - s i d e ????

これほどたいした？器？を見つけたのはいつ以来だろうか・・・
こいつは使える、闇を？全く？恐れない・・・

私の野望は、これからのようだ・・・

- - - s i d e o u t

- - - s i d e ソラ

小島に行くときん中にはリクがいた。

「リク!!」

「カイリは一緒じゃないのか!?!」

?なにかリクの様子がおかしい

「扉が開いたんだ」

「えっ？」

リク・・・？

「扉が開いたんだよ。俺達、外の世界へいけるんだぜ？」

リク・・・だよな？

「何言つて・・・それよりカイリは「カイリも一緒さ」

「扉を開いたら戻れないかもしれない。父さんや母さんに会えないかもしれない。でも、恐れてたら何も始まらないんだ・・・！！！」

リク・・・！！

リクの足元から闇があふれ出す・・・！

（黒いのが・・・！！

リ・・・ク・・・！！

リクの手をつかむ瞬間、あたり一面が光につつまれ、一瞬意識が飛ぶ。

・・・キープレード・・・

．．．．．キーブレード．．．

．．．．．キーブレード．．．

『キーブレード』という言葉が頭に響いた。

その場にはリクはおらず、手には見たことのない鍵キーブレードの剣があった。

．．．．．

雨も強くなるし、黒いちっこいのも多くなっていく．．．
さっきまで叩いても消えなかった奴らハートレス変な奴はキーブレードで叩く
ことで消えていた。

効いてる．．．！これなら！

そう思ったが、目の前には黒い波。

ちくしょう！数が多い！これじゃ倒してもキリがない！雨も強くなってきたし……
とにかく雨と変な奴ハートレスがいない場所に……！

そつだ！洞窟！

洞窟に向かうソラ
そこには

「うわぁ……」
真っ黒になるほどいる変な奴ハートレス

でも
一向に中には入らない……いや入れない？
何かに拒まれるように、はねていつてるような……？
まあ……好都合、かな？

「どけどけどけどけ〜！！！」

とりあえずキーブレードを振り回して強行突破した。

-
-
-
-
-

ここには・・・変なやつもないかな。

あれ、扉が開いてる。

それに前にいるのは・・・カイリ？

「カイリ!!」

「ソ・・・ラ・・・」

扉から何かが飛び出し、カイリが吹き飛ばされる

「わわ!!」

カイリが・・・消えた？

そのままソラも外にはじき出された

- - - - - side out

- - - - - side リク

この先に、外の世界があるんだ・・・!

闇を書き分け進んでいく。

光だ!外に着いたんだ!

そう、思い、闇から抜けたとたん

体から力が抜け、意識がとんだ。

- - - - - side out

- - - - - side ソラ

んゝ．．．．．

確か、カイリを見つけて受け止めた後．．．吹き飛ばされて．．．

！？ここどこだ？島．．．じゃない？

地面は砂だ、しかし

何もなくなってる．．．上の球が吸い込んでるんだ。
どうしよう．．．俺も、吸われちゃうのかな．．．

しかし悩んでいる暇はなかった。

「は……？へあ……」
情けない声を上げ、上を見上げる。

目の前には黒い大きな塊。この島の変な奴ハートルレスの親玉、ダークサイド
きつとキープレードも通用するだろう。
しかし自分の身長何倍、いや何十倍もする相手などただの恐怖で
しかない。ソラは何もできずに、大きな手にたたき飛ばされた。

「あ……あぐ……」

うめき声を上げる。しかしそんな場合ではない。このままでは自分
もろともやられてしまう。

ちくしょう、やればいいんだろ!?

心に覚悟を決めるソラ

そのソラに向かって叩きつけるように手を振り下ろす変な奴ハートルレス「ダ
クサイド

それを飛んで避け、手にキープレードを突き刺す!!

「それ!!」

手を避け、突き刺し、たたき、横に切る!!

「グオオオオオ!!」

どうやら相手は相当のダメージを受けたようだ。
そして空の球に吸い込まれていく。

それを見て安心するように座り込むソラ。

しかしそんな安心もつかの間
残っていた台地を球が吸収し始めた。

「ん・・・くう・・・!!」

かろうじて残る島の断片に掴まるソラ
しかしそんな努力も水の泡、耐え切れなくなり、手が離れていく。

「うわあああああ!!!!」

そして無情にも球はソラを吸い込み

その世界すべてを飲み込んで、世界から消えた。

また、星が1つ消えた瞬間だった。

嵐の晩【前編】（後書き）

いかがで？

こんな感じが学生には限界です（笑

次から本格的にクロスします！

なのは魔法とすでに出会い、すでにジュエルシートを探すところから始まります

まあ、ご都合主義ですすみません。

うまくいけば今日中にかけるかもです

まあ、明日テストだから、わかりませんが。

それではまた。

嵐の晩【後編】（前書き）

置き換えですすみません。

まあこれでだいぶよくなつたと思います。はい

そして5000文字笑

いやあ、大変だつた・・・。

ソラ「そんなに思うならちゃんと思直せばいいのに」

返す言葉もございません

嵐の晩【後編】

- - - - -

「ん・・・んう・・・ここ、どこだよ・・・」

目を覚ましたソラ。そこには見慣れない町並み、見慣れない建物、なれない匂い

何もかも知らないものだった。

「こんなとこ見たことないや・・・これからどうしよう・・・」
見たことがない場所、もちろん知り合いがいるわけではない。

「よし、うじうじしてても仕方ないよな！もしかしたらリクとカイリも来てるかもしれないんだし！」

これがソラのいいところだろう。

考えるより、まず行動。これ、人生の基本

誰かの台詞だった気がするのは気のせいだ。

とにかくリクとカイリを探そう！

それがいいな！

宛てもなく元気よく走り出した。

- - - - -

1時間後

.....あれ？さっきどこ通った？

そして30分後

.....。

完全なる迷子になってしまった。

ソラはもう夕暮れ。

今日寝る場所もないし、もちろん金があるわけでもないのでホテルなどには泊まれない

どうしようかな・・・

まあ、島で寝泊りとかもあるから怖くはないんだけど.....

なるべくなら遠慮したいところ

どうしよう・・・リク、カイリ・・・

つい、暗い気持ちが芽生える

それに呼応するようにあたりの風景が変わる

「えっ？」

あたり全体が暗くなる・・・！！

地面からハートレスが現れた・・・！！

「いつら・・・！！島に出た・・・！！」

ハートレス達はいつせいにソラに襲い掛かった。

- - - - - side なのは& a m p ; ユーノ

数十分前

「ユーノ君！今の！」

「うん、魔力反応だ！近いよ！」

学校から帰り、家に着き、落ち着いたところに異変はやってきた。ほかの人には感じないだろうと思われる、違和感。つまり魔力の反応。

「どこら辺？」

「高台のほうだ！！急ごう！」

ユーノ君に言われて靴を履いて、レイジングハートを持って外へ出た。

場所はいつも魔法の練習をしている高台らしい。

- - - - -

高台につくとそこには黒い結界が張られていた。

魔力を持つ人にだけに発見でき、結界により周囲の人を寄せ付けない性質を持っているものだ。

「なかに誰かいるのかな？」

「わからない、でも複数の魔力反応！でも妙なんだ。一人ははつきりしてるけど他複数は全く同じ魔力なんだ。異例の事態だよ、気をつけて！」

「うん！」

どういうことだろう？

魔力とは一人一人が持つものでまったく同じ魔力を持つ人なんて存在しない。つまり千差万別のはず。もし同じ魔力を持つとしたら同じ人が複数人いることになってしまう。

しかし入ってみないことには何もわからない。
中に入る決意を固めた。

- - - side out

「はぁ・・・はぁ・・・クッ！」

すでに息も絶え絶え

倒した数がもう分からないほど切り倒していた。それゆえに疲労も

ピークに達していた。

そこに一匹のハートレスが飛び掛る！

「うわー！」

対処しきれず、思わずキーブレードを自分の体を守るように前に出した。

《・・・Reflect Guard!・・・》

「えっ？」

ハートレスの攻撃をはじめた！？
それに

「しゃべった!?!」

《おや、私の声が聞こえるとは。珍しいマスターですね》

キーブレードが返答をする
しかし

《話している時間はないようですね。マスター、目の前の敵を殲滅

いたしましょう。それと少し力が入りすぎてます、すこし力を抜いてください。叩いているだけでは倒せる量に比べて疲れがたまる一方です。》

状況判断がすごい・・・しかし、話している暇はないようだ。

とにかくキープレードが言ったように目の前のシャドウに切り込む。さつきより力を抜いて。

スパツ！

さつきより簡単に倒すことができた。

さつきまではどちらかというところ？叩く？に近い行為だったが？切る？状態に近づいたようだ。

「すごい！さつきよりやりやすい！」

《しかしまだまだですね、前のマスターよりは劣ります。前のマスターは鍛錬を欠かさない人でしてね・・・》

そこは褒めてほしかった・・・。

それにちよっとしゃべりすぎです・・・。

《いい調子です。そのまま横なぎに。あ、横にガード・・・しかしこのままでは埒が明きませんね。・・・あ、後ろから来てます》

効率は上がったけど緊張感がなくなる言い方だな・・・

《後ろから大きな魔力反応です。気をつけてください。》

!!!?

マリヨクが大きいつて事はそれほど強いつて事だよな？

そして覚悟をきめ、振り向くと

そこには、女の子が立っていた。

- - - - - side なのは

結界の中に入るとそこは異様な光景が広がっていた

「なに・・・これ・・・」

みたことがない生物がうごめいている

「ハートレス!?!?なんでこんなところに!」

「ユーノ君知ってるの!?!?」

ユーノ君は知っているようだ。

「あれは人の心の闇から生まれるんだ。油断していると心を食べられてしまう！」

「そんな・・・」

そんな危険な奴がこんなに大量に・・・！
うごめく影の中心に目を向ける。そこには自分より少し年上と思われる男の子が戦っていた。

「ユーノ君！真ん中！人がいる！」

「なんだって!？」

周りを一瞥そして

「まずい！あれは量が多すぎるよ、なのは援護しに行こう！」

男の子の方へ向かった。

-. -. -. -. side out

ええっと・・・なんでこんなところに女の子が・・・

「おーい！その女の子、危ないって！」

「いえ、助けにきたんです！援護します！」

ええ！？こんな小さい子が何言ってるんだよ

「危ないって！下がってないと怪我する・・・よ？」

女の子は背丈に似合わないような杖を持って

自分の数倍の大きさはあるであろう大きさの砲撃をしていた。

ええええええ……

しかしこれにより数は激減。
数えるほどになった。よし！これならいける！

そして一気にたたみにかかる。

「これで……！」

「ラスト！」

なのはが魔法弾を打ち、ソラがキーブレードでフィニッシュを決める。これで最後のハートレスが消えた。

《Mission complete!!お疲れ様です、マスター・
……おや?》

初めての長い戦闘、そして心労が重なったのか
「へへ……どんなもんだ……い。」
ソラは地面に倒れこんだ。

……side なのは

「ふええええ！！ちょ、ちょっと、どうしたの！？」

いきなり倒れるソラに困惑するなのは

「大丈夫、呼吸はしてるし脈も安定してる。きっと疲れが出たんだ。寝てるだけだよ」

ユ一ノ君が確認してくれたようだ。

「とにかく、家の人を呼ぼう。幸いここは家から近いし、時間も時間だから誰かいると思う」

たしかに夕暮れ時。呼べばきつときてくれるだろう。

「でも、この子のソレ（・・）どつするの？」

ソレ、とはキーブレードのことである。

キーブレードを握ったまま意識を失ってしまったためそのまま手に握られた状態になってしまっているのだ。

「これ、さすがにごまかしきれないよ？」

「うーん・・・・・・・・でもこれはとても危険なものなんだ。これを

もってることでさっきのハートレスが近づいてきてしまう。なのは家族を危険に晒さないためには理解と協力が必要になってくるんだ」

「でも私よく分からないから説明できないし、ユーノ君は話せる状況じゃないし・・・」

ユーノは現在フェレットの状態である。そんなフェレットが急に話し出すとなるとなのは魔法までばれてしまう。ユーノもフェレットの状態を解除することもできるが、まだユーノにはそこまで魔力が回復していない。

《心配ありません、それは私が説明いたしましょう。》

男の子の剣、が話し始めた。

「「!!!?!?」」

なのはもユーノもさすがにこれは驚きを隠せなかった。キープレードを知らないのははともかくユーノが驚いているのは他でもない

「キープレードが話すなんて聞いたことがない！持ち主を選ぶ事はあっても意思があるとはどの記述にもなかった！」

《それはマスターのおかげでしょう。私とて驚いています。私の声が聞こえたのはいままで1人だけ。しかもその方も本人にだけ、私の声が周囲にまで聞こえるようになったのはこれが初めてです》

《ともかく、私のことは私自身で説明いたしましょう。どうか、この子を保護していただけませんか？彼は少し特殊・・・いえ、かつてない心の持ち主です。それに今回の出来事・・・彼は必要不可欠な人です》

《このような「子供」が私を呼ぶとは思いませんでしたがこれも運命なのでしょう、前のマスターは鍛錬を欠かさない、それはもう立派な・・・二人ともなぜ固まって？》

わりと多く話すキーブレードに混乱する二人。

「・・・・・・・・」

想像以上のおしゃべり、らしい。しかしこのままに放置できる状態ではない。

「わ、分かりました。では説明は・・・えっとキーブレードさんをお願いします。えっと、なのは！とにかく、家の人に連絡して！」
「ふえ、あ、うん！」

混乱からいち早く回復したユーノが状況を整理し、なのはに指示を出す。

約五分後、兄の恭也がやってきて男の子を運んでいった。

- - - side out

- - -

- - - もう、だらしがないな。大丈夫？ - - -

「え、あ、うん」

ぼやける意識の中で返事をする。

「無事でよかった、カイリ」

「ふえ？私のはだよ」

「え？」

「え？」

- - - - -

目を覚ますとそこは見慣れない場所だった。

「お、起きたか。気分はどうだ？気持ち悪いとかないか？」
男の人が問いかけてくる。

「あ、うん」

まだ寝ぼけるように答える。

「意識は・・・はつきりしてるな。よし、俺は高町恭也だ。丘の上
に倒れてたから驚いたが・・・」

「えっと、ソラです」

簡単な自己紹介・・・といっても名前を言ったただけだが。その後恭也は立てかけてあったキーブレードを手に取り

「事情はこいつから聞いた。まさか鍵がしゃべるなんて今でも信じられないことだが、目の前でこう起きてしまつと、ね・・・まあ確認のためにも、ね」

苦笑しながら答える。その手にはキーブレードが握られている。

しかし、次の瞬間にはソラの手元に戻っていた。

「なるほど、話は本当のようだな。よし、とにかく俺は父さんと母さんに知らせてくる。なのは見ていてくれ」

「うん」

男の人とすれ違つように女の子がやってくる

「もう大丈夫？私のは、高町なのはです」

「あ、うん。俺はソラ」

「うん。驚いたよ、高台にいったらソラさんが戦ってるんだもん」

ああ、そっか、俺あいつらと戦って疲れて倒れちゃったんだっけ
そのあと女の子が現れて、すごい砲撃でハートレスをぶつとばしたんだ。

「あれ？きみ・・・じゃなかった、なのはがあの『すごい』で助けてくれたんだよな！ありがとう」

とにかくお礼はいわなちな、あのままだと俺も危なかったんだし。
しかしその言葉を聞いてなのはは間髪をいれずに

「おねがい、あの場所のことは秘密にしといて！..」

泣きそうな顔でそう、いうのであった。

「私、魔法使いになってる事、隠してるんです。いつか言わないといけないんだけど・・・」

どうやら事情があるようだ、しかし助けてもらったんだし

「うん、じゃあ、言わない」

「理由、聞かないんですか？」

「聞いてどうにかなるものじゃなさそうだし、なんか聞いてほしくなさそうだし」

「ありがとうございます！」

なのはの顔は明るくなっていた。

.....

その後ここに来たいきさつを説明してもらった

「ソラ！なのは！ここにきてくれ！」

恭也に呼ばれ、ふたりでその場を離れた。

.....side ????

次元断層にあるはずの時の庭園。そこは簡単には侵入できない場所のほずであった。しかしその女の前にいま一人の少年が立っている。

どうやら闇の中を進むうちにここにたどり着いたという。

簡単に言えば次元漂流者。しかし次元断層のこの場所には漂流する

こともないはずであった。しかし引つかかる言葉があった。

？闇の中？

聞いたことがある。研究をしていた時代の研究課題のひとつでもあった。

『闇の回廊』

それはどんな場所にも通じている不思議な回廊。狭間の世界を通り、世界を旅することができる。しかし本来闇の中を何の準備もなく出歩くのは自殺行為。なぜなら闇に心を食われ、自我を失ってしまうからである。しかしその常識を覆す存在が目の前にいる。闇の回廊の中で無事でいられる者。

研究者として心が躍ることもあった。

闇の回廊を準備もなく通り、また意識も混合せず、自我を保っていられるほどの強い心の持ち主。様子を見るに今彼には「心の支え」が欠如している状態。そんな状態の彼を手なずければ……

それはもう、決して揺るがぬ強い？駒？となるだろう。

彼女には目標がある。その目標を達成させるには丁度よく動いてく

れるだろう。

そうして彼女は少年に歩み寄った。

- - - - - side out

T o B e C o n t i n u e . . .

嵐の晩【後編】（後書き）

終了です！

次あたりからなのはストーリーに入れるかと。

でも台詞覚えてないんだよなあ（笑

なのは「もつと原作見直すの」

魔王光臨しないでください・・・orz

誤字脱字指摘、感想等大歓迎です！

相棒の名前（前書き）

ちよっと短いかな？

さて、こっから話が進んでいくといつといつです。

ソラ「この展開って無理あるよな」

原作上ですう・・・

相棒の名前

.....

「事情は聞いた。それで、君は何をしたいんだい？」

今はなのはの父、士郎と母、桃子の三人でだけだ。

事情をキーブレードから聞き、ソレを再びソラの口から確認した。キーブレードが話したのはあくまで事件の発端。ソラの事情は話してないのであった

「俺は・・・俺は、リクとカイリに会いたい・・・」

消えるような声で言うソラ、しかしその瞳には揺るがない決意が見える。

「そうか・・・。うん、そう言うと思っていたよ。そこでどうだろう、しばらくこの家にいないか？」

「えっ？でも・・・」

ソラの声をさえぎるよつに続ける

「私は路頭に迷う子供を見捨てたりはしないさ。それに……無茶をしてほしくないんだ。こう見えても昔にちよつと『無茶』をしていてね、自分と同じ事を人に……ましてや子供に繰り返してほしくないんだよ」

それに、と続けて

「私達は店のほうが忙しくてね。繁盛しているといつてもまだ手が離せない状態なんだ。帰れる時間も遅くなってしまふからね、一人になってしまふのはを見ていてくれると嬉しいんだけどね」

苦笑混じりに笑う。もはや提案ではなく、遠まわしの命令。ここまできては断りきれない。しかしその顔はもう他人の子供を見る目ではなく自分を息子のように見る目。

その提案は宛てのないソラにもうれしい話であった。その話を聞いたソラは

「ありがとうございます……!!」

なれない敬語を使い精一杯の御礼を言う。

他者の温かい心に触れてか、その目には凝らして見なければ分からない程ではあるが涙が見える。必死で我慢をしているのだろう。

いくら陽気な性格と言っても所詮は子供。そんな子供にとって孤独は苦痛以外なんでもない。

「さて……話もまとまったし。ご飯にしましょうー!」

なのはの母桃子の声で全員が動き出す。

そしてソラは

「お世話になります!」

満面の笑みで言葉を返した。

- - - - -

「うまかったあ・・・あんなおいしいの初めてかも!

「じゃはは、おおげさだよ

今はなのはとソラ、ユーノの2人と1匹の状態

桃子いわく

「ちょっと寝るところがないから悪いけど今日はなのはのじいじで寝てくれない!」

とのこと。

まあ、泊めてくれるだけで十分なんだけどね。

「でも、本当にありがとう。あのままだったら俺あの場所で野宿してるところだったよ……」

「そしたらお巡りさんに怒られちゃうよ」

それ以前に今思えばあのままいたらまたハートレスに襲われてたかも知れないよな……
うえ、考えるだけで寒くなってくるや……

「そつだよな、はは、ははは……」

苦笑混じりに答える。

「そついえば、ちゃんと自己紹介してなかったな！俺はソラ！」

「高町なのはです。そしてこっちがフェレットのユーノ君！」

なのはの手にはフェレットがいる。ユーノというらしい。

そしてその後思い出したように

「そういえば、なのははどうして魔法使うんだ？」

と、問いかけた。

- - - - -

- - - - - side なのは

「そういえば、なのははどうして魔法使うんだ？」

きてしまった。確かに魔法を使えるもの同士だ。しかし

自分の事情に巻き込むわけには行かない！・・・ソラさんは友達も探さなきゃいんだから

「えっとね、ソラさんと同じ、かな？ちょっと探し物してるの。ちょっと危ないもので、魔法で封印しなきゃいけないんだ」

間違っただことは言っていないよね？

「へえ・・・探し物かぁ・・・」

考え込むソラ。

……あ、まさか、

「ソレ、俺も手伝うよ!」

その瞳には揺るがない決意が……見えないこともない。

ほら来た!どうしよう……
と、とりあえずユーノ君に相談しよう

「ユーノ君どうする?」

「危険かもしれないけど……」

念話をさえぎるような声でソラが続けた。

「ほら、俺には、これがあるから……」

そついい手を前に出す。その手にはキーブレードが握られている。

「キーブレードもいいだろ?」

《ええ、問題ありません。》

「ほらー！」

ソラはやる気満々のようだ。

再びユーノに念話送る。

「どうしよう、ソラさんやる気だよ？正直に言っちゃおう？」

「うん・・・僕としては避けたいところかな・・・一般人、ましてや次元漂流者の人に・・・」

と、ここで念話がさえぎられた

《御二人は、さっきから何を話しているのですか？話せないようなことでも？》

「「！！？！？？」」

ユーノとなのはが息を呑んだ。

状況が読めないのはソラだけだ。

「え？・・・え？どゆこと？誰も話してなかったよ？」

《いえ、さつきから御二人は念話を使い話していましたんで。》

「念話って？」

《そうですね、簡単に言えば心の意思疎通ってところですかね》

「なるほど・・・」

《別に会話が聞けるまでは言ってますませんが、二人の間に魔力の授受がありましたので》

「はぁ・・・ん？二人って誰と誰？ここって俺となのはしかいないよな？」

《いえ、その・・・。「ユーノ君」ですね》

「あ、なるほど」

《おや、もっと驚くと思いましたが》

「もういろいろありすぎて慣れた」

《たくましくて何よりです》

「なあ、念話って、俺にもできるっ？」

《まあ心に思ったことを伝えようとするだけですから》

「よし、後でやってみよう……ん？」

「《二人ともなに固まっているのですか？（んの？）》」

……

「もう、なにがあっても驚きません」

二人がなんとか出した言葉がこの言葉だった。

……side out

……

それにしても念話って便利だな。

ちよっと扱いが難しいけど。しかもこれってうまくなれば長距離でも使えるらしいし

あ、念話のことで忘れてた

「でさ、結局何集めてたんだ？」

《私も気になりますね。魔法がかかわる集め物ならなおさら》

再びなのはに問いかけた。

しかしなのはは固まっただまま。回復にはまだまだかかりそうだとユーノが念話で話しかけてきた。

「うん、ごめん、思わぬことだったからちょっと固まってたよ。ここまで来たんだ、今までのいきさつを話すよ。家族の人に知られるとまずいから念話で済まないけど」

そして今までの出来事を話していった。

- - - - -

《つまりジュエルシードを探しているわけですか。しかもソレは封印しなければならぬほど強力、と。それが21個とは。》

「そうなんだ・・・もし、良ければだが協力してほしい。もともとなのは1人には荷が重いの思っていたんだ」

「わ、私は大丈夫だよ!？」

あ、復活してた。

「いままではうまく言っているけど、この間あった魔導師もいるし、仲間は多いほうがいい」

ユ一ノは心配そうだ。何かあったのかな？

「でも……ソラさんは、いいんですか？」

「当たり前だろ！？友達の頼みだ！」

「「でも……」」

二人ともまだ伏見がちだ。

あ、そうだ。ちょっと悪い気もするけど……

「あ、そんな顔してると家族に言っちゃうぞ！」

「「^{ふえ}ええ！ソレは困ります！！」」

ちよつとした脅し、これで断れないだろ

「んじゃ、俺も参加な！それになのはの父さんに頼まれてるんだから、一人だけ危険に晒すわけには行かないって！」

「あつう・・・」

なかば強制だけど仕方ない。

そうしないといつまでも続きそうだしな。

《では、私達も探すのを手伝う、ということぞ。よろしいのですね》

「おう！」

《それでは私も全力を尽くしましょう。》

「「ありがとう」

今度は笑顔。よし！

《ところで私はまだ名前をもらっていませんが、どうしますか？》

「「「えっ？」「」

三人で素っ頓狂な声を上げた。

キープレードって名前じゃなかったのか……

T o B e C o n t i n u e . . .

相棒の名前（後書き）

こんなもんですねはい、あ、うまくいけば夜にまた更新できますよ

なのは「今からネタ考えるんだけどね！」

メタ発言は避けてくださいな。

ところで名前どうしましょうかね？

アンケートとりたい・・・けどまあ、俺の独断で決めちゃいます（笑

それではまた今度！

誤字脱字感想等大歓迎です！

それは偶然の出会い（前書き）

まさかまた書きあがるとは思わなかった（笑

今回はほのぼの・・・を目指した！

眠いですwww

ソラ（？）「永遠の眠りを！」

おまえヴァニタスだろ？

それは偶然の出会い

.....

「ん〜……………そうだな……………」

キーブレードの名前って言ったてなあ……………
どんな名前つければいいのか見当もつかないよ……………
……………まあ、ここは適当に

「よし、レイジングハートってのはど」だめっ!」

なぜかなのはに却下された

「なんでさ? かつこよくない?」

「レイジングハートは私達のデバイスと同じ名前だもん!」

「デバイス?」

デバイス……………それは魔導師及び騎士が共通して持つ杖のことをデバイスと言う。

その役割は、魔法のプログラムを溜めこんでおくストレージだったり、魔法を制御するための演算をしてくれたり、直接的な武器となったりと色々ある。(by Wiki)

「なるほど……それがデバイスか」

納得したようにうなづくソラ。

「ふえ！？私何も言っていないよ!？」

「なのは、そこは無視をするのがお約束だよ」

.....

悩むこと30分。

「こいつの名前は『ヴィンクルム』、だな！」

「これ、前にリクが言ってたんだ。どっかの言葉でな」

《『Vinculum』.....『絆』という意味ですね.....
.....ありがとうございます》

「おっ！」

こうしてキープレードには『ヴィンクルム』という名前がついた

しかしそこでひとつの小さな疑問。

「でもどうして名前をつけるんだ？今までは『キープレード』だったんだろ？」

ソラが何気なく問いかける

「デバイスとは違うんですよね？」

苦笑しながらなのはもソレに乗る。さつき「デバイスなの？」と聞いたら全力で否定されたけど。

「結局のところどうなんだい？」

ユーノがもう一度質問をして

《デバイスが羨ましかつ…………ゲフンゲフン…………た
だの気分です》

キーブレード、もといヴェィンクルムが予想外の答えを返す。
をつけるなを

ソラが高町家に来てから5日目。
ソラはといごと、

「ソラ君、これ3番テーブル!」

「了解!」

なれた動きでケーキを運ぶソラ。そして笑顔で

「じゅっくりどござー!」と

立派な店員になっていた。

ソラは現在家におらず「翠屋」にいる。
理由は簡単。

暇だから。

その原因は2日目のことだった。

〈回想〉

なのは達は学校に土郎たちは翠屋に出かけた後、リクとカイリを探

しに出かけた。

はじめの30分は張り切って探していた。が、

ここ、どこだ………？

きれいに迷子になってしまっていた。

まずいなあ………見慣れない町を一人で出歩くんじゃない。
……これじゃ家にも帰れない

そう思い、思いついたのが「翠屋」

店なのだから街中の人も一人は知っているはず。そして何人かの人に道を聞いた後ソラは「翠屋」にたどり着いた。

カランカラン………

店に入るとそこには

「ソラ君!？」

桃子がいた

「どうしたの？友達探すんじゃない……あー、その顔見れば分かるわ。思えば初めての町ですものね」

苦笑されてしまった。どうやらばれてしまったらしい。そしてその後の一言がソラが「翠屋」にいる理由。

「そうねえ……ね、家にいてもやることないだろうし、暇なときでいいからお店手伝ってくれない!？」

〈回想終了〉

「よし、これで一区切りね……ソラ君お疲れ様！休憩入って」

「あ、はい」

休憩に入り一息つく。

「……何やってんだろう、俺。」

リクとカイリ探すはずだったんだけどなあ……。

一人感傷に浸る。

迷子になるのが悪い。まあ仕方ないことではあるが。

でも、楽しいからいつか！

こんなときでもポジティブにいられるのはいいこと……な
のだろうか？

休憩中、ソファに座るソラ。

しかしそんなソラに声がかかる。

「ごめん、ソラ君！ちょっと買い出し行ってきてくれない？」

桃子が休憩室に顔を覗かせていた。

「もっちゃん！で、買うものは？」

リストを渡されるソラ。すでにスーパーに行ったことはあるので迷

子になる心配はない。

「じゃあこれ、おねがいね？」

リストを渡され

「じゃ、行ってきますー！」
笑顔で出て行く。

もう立派な店員である。

- - - - -

いつものスーパーに来るソラ。ここへ来るのは3、4回目なので道も覚えた。

えーっと、買うものは………小麦粉にイチゴ、あとは生クリーム………

そこにはケーキに使うであろう材料が書いてあった。

さて、いっしょに行きますか！！

何度でも言おう、もう立派な店員である。

．．．．．
side
フイト

フェイトは今待ちのスーパーに来ていた。はじめに言って置くとフェイトはスーパーが苦手である。

もちろんやることは自分達の食料の調達だ。お金は十分にあるし、買うものも少ないので持って帰れなくなる心配などもない。しかしフェイトにはスーパーが苦手な理由があった。

高いところにある商品が取れない、正確に言うとアルフ用のドッグフードが取れないのである。

本来ならばドッグフードでなくともよいのだがアルフはドッグフードを好いている。普段迷惑をかけてしまっている分、こつこつとこるで恩返しをしよう、と思い少し奮発して高いものを買おうとした結果がこれだ。

店員にとってもらえばよいのだがもともと内気な性格のフェイトは人と話すことを好まない。

また人がいなければ魔法を使って取ることも考えたろう。しかしあいにく今は昼時、人が思ったより多い。

どうしよう……

アルフには悪いけど、安いもので我慢して……でも、いつもの恩返しはしたいし……

こうしてペット用の柵の前で悩むこと10分。
そんなフェイトに声がかかった。

「ん？どしたの？」

つんつん髪の男の子が声をかけてきた。「翠屋」と書かれた服を着ている。

「あ、えつと・・・」

視線を上に向けながらまごまごするフェイト。
ソレに見かねた男の子は笑顔で視線の先にあるドッグフードを手にとり

「これで、いいんだよね？」
と微笑みながら差し出してきた。

「あ、はい」

「そっか、よし！じゃあ、俺は行くね」

そういつて去っていく男の子

レジに向かう背中を見ながら

「ありがとうございます」

小さくこぼした。

今度、「翠屋」に试试看よう。

そう、決意した。フェイトだった。

side out

それは偶然の出会い（後書き）

ということまでフェイトさんついに登場。

いまだに口調がつかめませんけどまあ・・・平気じゃね？
ソラはすでにキャラ崩壊してるし（笑

次はあれですね、夜のジュエルシード探し、って感じですよ。

たぶん明日^^) bグッ

それでわ！

誤字脱字感想など大歓迎です！

ハートレス（前書き）

今回でアリサ、すずかと知り合わせます。

これがないと温泉偏入れないからね（笑

ソラ「にしても時間かかったな」

KH？やっててごめんなさい。

ハートレス

「ふー………意外に重かったな………」

その両手には3袋（パンパン）のビニール

「ただいま戻りました！」

「あ、お帰りなさい！ありがとうございます、休憩してていいよ」

「あ、はい！」

店に戻ると桃子が出迎える。買い物袋を桃子に預けて休憩室に向かう。

あ、もう14時か………なのはが帰ってくる時間だ。今日は探索に行くのかな？

ソラはなのはの探索のときには一緒についていくことを決めている。

理由はひとつ

ハートレス

ここ最近活発になってきているハートレスの動きだ。

なのはと出会ったときにでたハートレスはヴィン（ヴィンクルム）によると『シャドウ』という最下層のハートレス。あのとかなのはの魔法で一掃できたのが『シャドウ』しかし最近『シャドウ』に加えて『ソルジャー』や攻撃が効きにくい『ラージボディ』さらにはさまざま魔法を使う『ノクターンタイプ』などいろいろなタイプが出てきている。

『シャドウ』や『ソルジャー』、『ノクターン』にはキープレードが『ラージボディ』には魔法が

といったように相手によって相性があるようだ。

特に『ノクターンタイプ』に魔法は最悪。魔法を吸収されてしまう。

つまりなのはとソラ二人で行動するのがもつとも安全、というわけだ。

ふいー・・・休憩室も暇だな・・・、、、、店のほうに戻りま
すか！

そう意気込み店内に入ると丁度客が来たようだ。

「いらっしやいませ！」

そこにはなのはと二人の女の子が

「なのは！？（ソラさん！？）」

二人して声を上げた。

-. -. -. -. side なのは

ふええええええ！？なんでソラさんがお店にいるの！？

（ねえ、なのは、この人が『ソラ』？）

アリサちゃんが小声で話しかけてくる。

(う、うん。店にいるとは思わなかったけど)

(丁度いいわ。私かなのはにふさわしいか見極めるわ!)

(ちょ、ちょっとアリサちゃん!?)

そういつてずんずんソラに近づくとアリサちゃん

「なのはの友達かな?えっと、どこに座る?テラスにする?」

「そんなことはいいわ、あんたがソラよね!2、3質問があるから
ちょっときなさい」

「へ?」

そしてソラを引き摺るように店の外に出て行った。

どづじよう………帰りににあんな話しなきゃよかった………

帰りに余計なことをいった自分が恨めしくなってきた。

〈回想〉

今日の帰り道。

今日は翠屋によっていこうという話になっていていつもと違う道をアリサとすずかの三人で話しながら歩いていた。

「そういえばね？うちにソラさんって人がきたんだよ」

「ソラ？外国の人？？」

ソラさんのことを少しだけ話そうかな、そう思ったのが運のつきだったのかもしれない。魔法のことを話すことができない以上出会いのことは話せないし、自分との関係も詳しくは話せない。だから軽くぼかそうかな………と思っていた。しかしなのはは忘れていた。

アリサちゃんは時に非常に鋭い、ということを

「日本人じゃないかな。やさしいし、明るい人だよ」

「へえー………一回会ってみたいわね………」

「にははは………それは無理なんじゃないかな？ソラさん人探

ししてるから」

苦笑気味にごまかす。

「ふーん……………なんか怪しいわね……………」

「ふえええ!?!?」

「隠してるように聞こえるわ……………」『ソラ』に私達を会わせたくみたいに」

「そ、そんなことないよお!?!?でもソラさんも忙しいだろうし……………」

「別に今日って言ってないでしょ」

「あつう……………」

なんか思考全部読まれてるみたいだよ……………なんではれるんだろう?」

「なのはちゃん何かあるときは」にやはは『っていつからだよ
なるほど………そういえばなんかあることに』にやはは『って
言うかも……』

ん？

「なんで分かったの!？」

「うふふ
」

ちよっ!その笑みは何!?怖い、怖いよすずかちゃん!?

そんな感じで歩くこと10分。店について中に入ると

「いらっしやいませ！」

満面の笑顔で出迎えるソラさんがいたのだった。

〈回想終了〉

奥に進んでいくアリサちゃん。
大丈夫かなあ…………ソラさん…………

「大丈夫だよ、アリサちゃんやさしいもん」

でも……………ソラさんまだここに来て間もないし慣れてないだ
ろうし……………心配だよ。

「アリサちゃんはなのはちゃんが心配なんだよ。それより席座ろう
？入り口にいると邪魔になっちゃうから」

「ねえすずかちゃん、私の心と会話するのやめよっよ……」

「うっふ」

side out

現在

目の前の少女に

質問攻めにあっています。

- ・なのはとあった場所
- ・どこから来たかなどなど

もうそろそろ店に戻らなきゃなんだよなあ……………

「ふうん……………にわかにも信じられないわね、大体ハートレスなんて聞いたことないわ」

「俺もこの間身をもって体験したばかりだよ……………」

うなだれるソラ

「でも、ちょっと見てみたい気もするわね。その不思議生物^{ハートレス}」

.
冷たい空気が流れる

次の瞬間には

世界が灰色になっていた。

- - - - - s i d e アリサ

「ちょ、ちょっと何よこれ!？」

あたりが灰色になる。

「ハートレスを見てみたいわね」と、そう言った瞬間には辺りがみ
なれない状態になっていた。
そしてハートレスが現れる。

アリサの中に現れたのは好奇心や、興奮ではなく

そんな想いが通じたのか否か。
目の前には

鍵キブレードの剣を持った勇者が目の前のハートレスを吹き飛ばした。

「怪我はない!?!」

問いかけられたが緊張状態のアリサに声はでない。

あ、こ、答えなきゃ……あれ? 声ってどうやって出すんだっけ。
……!?!?

パニック状態のアリサ

そんなアリサにソラは

「怖かったよな。安心して、俺がこんな奴ら追い払うから」

心から安心できるような笑顔向けた。

5分もたたないうちにハートレスはすべて消えてあたりも元に戻る。周囲の人たちは何事もなかったように行動している。

あ、あれ・・・？夢？

夢ではないだろう。体中脂汗をかいていてびっしょりだった。

「大丈夫か？」

そんなソラの声が

アリサの緊張をほどいていった。

「じわわっ・・・怖かった・・・!!」

泣きはじめるアリサ。そんなアリサにソラは笑顔で頭を撫でる。いつものアリサを知っている人から見れば信じられないだろう。しかしそれほど恐怖をアリサは感じていた。

「もう、大丈夫だから」

アリサが泣き止むまで頭を撫でていた。

- - - - -

「落ち着いた？」

「うん・・・」

あれからアリサが泣き続けて落ち着くまで数分ソラはアリサにずっと付き添っていた。

「じゃ、そろそろ中に入ろっか？なのは達も待ってるよ？」

「うん」

頭から手をはなした

「あっ……」

名残惜しそうな声をだすアリサ。しかしその声にソラは気づかない

「行こっか？」

アリサの手をとって店に向かった。

そんなソラに向けアリサは誰にも聞こえないように

「あんならなのは任せられるわ」

とつぶやいた

「えっ？なんかいった？」

「な、なんでもない！！そ、それより店の中に入りましょ！」

そこにはいつもの調子を取り戻したアリサがいた。

To Be Continue . . .

ハートレス（後書き）

アリスのツンデレ口調分からん（笑）
そしてソラ、軽くフラグ立てた（笑）

ってかソラの口調こんな奴だったっけ!?

あ、ノクターンタイプってあれね「レッドノクターン」とか
まあイメージ持っていただければ幸いです

続きは・・・まあ出来次第ですね^^）bグッ

そつえば前書きとあとがきがつまらないから他の人の真似しよう
かな・・・？笑

誤字、脱字、感想など大歓迎!!!!

海鳴温泉 【前編】（前書き）

今回から前書きをちょっと変えていこうと思う

作者「ということですさっそく変えてみたけど」

ソラ「正直変えた意味ないね」

作者「ただ、味気がなかったから変えてみようと思ったんです。出来心だったんです。」

海鳴温泉 【前編】

「もうすぐつくよ〜」

「「「はい」」」

翠屋で起きたアリサを巻き込むハートレス発生の事件から2日。

ソラは現在、なのはとアリサ、それとすずか家の面々とともに温泉地に向かっていた。

あの事件の後、アリサとは必要以上に仲良くなり、すずかとも今では立派な友達になった。

一応事情説明として二人と二人の家族にはには事情を説明してある。ソラと一緒にいる以上危険なこともあるかもしれないからだ

温泉といえば、島にも温泉あり、島で遊んだ帰りに潮を落とす目的でよく入っていた。

『温泉』というのは名ばかりで島の子供達が勝手に使っていたものだったが。そこではリクや他のみんなと泳いだりもしていた。

そういえば泳ぐのはティードが一番だったなあ……………

そう、思いに耽るうちに

「さて、ついたよ。みんな準備はいい？」

温泉地に着いたようだ。

-. -. -. -. side なのは

今日はみんなと一緒に温泉来ています！

「なのは、旅行中ぐらいはゆっくりしなきゃだめなんだからね」

「大丈夫だよ。分かってる」

あの黒い女の子に会ってからひとつもジュエルシードが見つからないことに加えて、少しゆっくりおやすみするように、と、ユーノ君とソラさんのお勧めもあって

とりあえず、この二日間はなのはも年相応にお子様らしく

「んっ……」

めいっばい

遊んでしまおうと思います。

- - - - - side out

- - - - - side ユーノ

「ユーノ君、ソラさん、温泉って入ったことある？」

「こ、公衆浴場なら……」

「温泉はいいよ〜」

目を伏せながら答えるユーノ
理由は簡単。現在いるばしょは『婦人の間』。
男の、ましてや思春期真っ只中のユーノにとっては目のやり場に困る場所だ。

「俺はあるぞ？島にも大きなのがあったからな。まあ、使う人がいなくて泳いでたけどね」

「泳がないでくださいね……」

「分かってるって」

男湯のほうからソラが答えた。

「な、なのは、やっぱり僕はソラと一緒に男湯のほうへ……」

「えー？いいじゃない、一緒に入ろうよ？」

なのははこの事態が分かっていないようだ。

男の性とユーノの理性。

ユーノの心のなかで天使と悪魔が拮抗していた。じゃっかん悪魔のほうを押しているのは秘密。

しかし天使の切り札発動！！

それはソラに助けを求めること。

「そ、それに、ソラ一人じゃかわいそうだし」

「俺のことは気にするなっつて」

あっさりと天に見放された。

「それじゃ、ユーノ君、いこっか？」

そのまま地獄一（天国？）に引き込まれるユーノだった。

それから約20分

その後のソラの証言によると、疲れが取れるはずの温泉でユーノだけはげっそりとなって帰ってきたという。

- - - - - side out

「ふう………」

風呂から上がり、少し涼んでいるところ。

やっぱりユーノいたほうがよかったかなあ？

と少し後悔。

なんだかんだで風呂に出るのは男の方が早い。話し相手がない状態で時間を過ごすのはすこし退屈だった。

その数分後。

なのは達がやってきた。

「あ、ソラさん！」

「おう、気持ちよかったか？」

「はい！」

そこにはつやつやした三人の少女と

死にかけている一匹のフェレットが

「ユーノどしたの？」

心配して問いかけるソラ

「生き地獄をみました……」

なんとか言った一言がコレ。なぜかよほど疲れたらしくなのは肩でぐったりしていた。

事情を聞こうとしたがはっきりと『聞くな、思い出させないでくれ』と書かれている顔を見て。

聞かないでおこう

そう思った、ソラだった。

旅館の廊下を歩いていると一人の女性が近づいてきた

「ハア―イ？おチビちゃんたち」

全員の頭に？が浮かぶ

女の人はなのはに近寄って

「君かね？うちの子をアレしちゃってる子は？」

といった。

「なのは、知り合い？」

「ええつと・・・見覚えはないかな？」

え？ないの？つてことは知らない人？

「え、ええ？」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどねえ？」

なのはにグイッと顔を近づける女の人

なのはも怯えてるみたいだし、ここはひとつ。

「ええつと、なのは、あんたのこと知らないみたいなんだけど？ドチラサマ？」

女の方はユーノに近寄ってその体を撫でた。
すると

なのは目が変わり、顔をこわばらせた。

??

何かあったのかな？

「さーて、もうひとつぶろいってこよーっと」

そして女の方は去っていく。

その後アリサは女の人に対し悪口をいい、なのはとすずかがソレをなだめていた。
一見変わったようには見えなかったが

なんか一瞬おびえてた……よな？

ユーノに女の方が触れたときのなのはの顔が忘れられないソラだった。

- - - - - side アルフ

現在アルフは浴場にいる。そこである人物に念話を送っているようだ。

「あー、もしもしフェイト？こちらアルフ」

「うん」

「ちょっと見てきたよ？白い子」

「どうだった？」

「んー……まあどってことないねえ、フェイトの敵じゃないよ」

「そう……こつちもだいぶ進展。次のジュエルシード位置がだいぶ特定できてきた。今夜には捕獲できると思うよ」

「んー、ナイスだよフェイト、さすが私のご主人様！」

「ん、ありがとう」

「ああ、ちょっとまって。あの白い子とその使い間のほかに違う魔力があった。それもすこし大きい目の。注意しておいたほうがいいよ」

「うん、分かった。それじゃあ、夜にまた落ち合おう」

念話は終わったようだ。

そしてアルフは大きく伸びをすると

「ん〜くつろぎくつろぎ……………温泉って最高！」

温泉を満喫していた。

T o B e c o n t i n u e

海鳴温泉 【前編】（後書き）

とまあこんな感じですよ

まあ正直戦闘前の前戯、閑話休題的な感じで（笑

そして次回

久しぶりにあの男の登場です。

【番外編】ソラの魔法特訓教室！（前書き）

作者「これから魔法を絡めるために・・・！！と思っ
てやった結果がコレだよ」

ソラ「無理やり感ひどいし。あんな魔法使えないって」

作者「どうせもつ出す気ありませんから」

作者「あ、でもコレ挟んだから次回から魔法使える！やったね！！」

【番外編】ソラの魔法特訓教室！

これはソラ達が温泉に行く1日前のこと。

ソラ、なのは、ユーノの三人はいつものように会話をしながら翌日に控えた温泉旅行の準備をしていた。

「そういえばソラは魔法使わないのかい？キープレードだけでは大変なこともあるだろう？」

「うーん、いままでそんなことはなかったけどなあ」

「でもソラさんの魔法つてのも見てみたいかな？」

ソラは魔法を使えない。否、使ったことがなかった。

それはいままでのハートレスはそこまで強くない下級ハートレスだったのと魔法はなのは、物理はソラ、という役割分担ができていたからだ。

「うーん……でも俺にも使えるのかな？やっぱなのはみたい
にデバイスがないといけないんじゃない？」

なのははレイジングハートを通し、魔法を使用している。

レイジングハートの制御補佐がなければおそらく使えないだろう

「でもヴィンがやってくれるんじゃない？」

「なるほど……なあ、ヴィン俺にも魔法って使えるのかな」

キーブレードを手に出現させるソラ。

《前マスターは使っておりましたし、おそらく使えるかと。しかし相当な練習が必要ですよ？》

「使えるのか！？……なのは、俺、荷物整理終わったらすぐに練習行って来るよ！」

興奮を抑えきれないソラ

「あ、なら私も行きます！もちろんユーノ君も！」

魔法のことならば、となのはとユーノ

「よっし、なら一気にやるか！」

やる気に火がついた二人（+1匹）はものの10分で準備を済ませ、颯爽と練習に向かった。

高台についたソラたち

「とにかくはじめよう!」

《ならまず簡単な魔法から行きましょう。》

ヴィンの従うソラ

「ソラさんがんばって〜!」

「な、なるべく早くしてね?結界がづらくなってくる」

応援をする一人と一匹。

もっとも片方は泣き言にも近かったが

《いいですか?頭のなかに『炎』のイメージをしてください。どんな形でもいいです》

「ん〜……………まあ、こんな感じかな?」

《いいでしょう、ならそのイメージを忘れないように魔力で形にしてみてください》

「よし……………」

精神を統一するソラ。

いつになく真剣に、目を閉じ、耳を済ませる。

炎……燃えて……広がる……!!!!

そしてソラの頭でイメージと同じ形になる空気が完成する。

《ソレを一気に解放してください!!》

「炎よ!!!!」

出てきたのはソラの周りを回る小さな火の球（1個）だった。

「ちっさいね。」

《まあ、練習ですね》

まだまだ時間はかかりそうだ。

- - - - - side なのは

ソラさん、すごい集中してるな……

ソラが炎をイメージしているときののははユーノとソラの様子を見ていた。

「なんか私達のと違うみたいだね」

「うん、魔方陣も魔力光もないね」

ソラとなのはの魔法の大きな違いは魔方陣と魔力光。
なのはが魔法をつかうときには魔方陣が発生する。そしてあたりから自分特有の魔法光が発生する。

しかしソラにはソレがない。

「私達に手伝うことはない・・・かな？」

「だね。じゃ、なのも練習しようか」

「うん！」

ソラさんに追い抜かれないようにしなきゃ・・・！！

こっそり競争心を芽生えさせたのはだった

- - - - - side out

ん〜・・・難しいな。イメージはできるんだけど魔力を制御できないや

「なあ、魔力つてなんなんだ？」

《魔法を使うための糧、といったところでしょうか？》

「あ、そうじゃなくて、例えるなら」

《そうですね・・・さしずめ空気、といったところですかね》

「なるほど!」

何かに納得して再び精神を集中させる。

空気って事はすっげえ軽いつてことだよな。

コレを移動して、こっつ、集めて……!!

「炎よ!!」

再びイメージを解放つ

さっき3つだった炎。

それが今度は6つになっていた。

「おっしやあ!!」

思わず手を上げて喜ぶソラ。

《では次は氷をイメージしてください。先ほどの炎は実態がありませんから下手なりにもできますが今度はそうは行きませんよ》

軽くけなされた気がするがスルーしておこう。

さっきの要領でものを考える。

空気、魔力を集めて形にしていく。
そしてだいたい形になったところで

「凍れ!!」

イメージを解き放つ。

しかしそこには

氷になれきれない水がポトン、と墜ちただけだった

「あつれえ?なんでだ?」

ちゃんと氷にしたし、ソレを発射もしたよな・・・?

《氷は固体ですから形を固定するにはより一層魔力が必要です。それに発射するためにも魔力が必要ですから、魔力制御をする量が増えますね》

「ええ！？一回に二個も考えんの！？」

《それに大きすぎてもいけませんから………そうですね、頭ぐらいが丁度いいかと》

単純なソラには少々難しい問題。

氷のほうに魔力をこめすぎると大きくなるし重くなる。するとその分発射する魔力も必要になる。
バランスが何よりも大事なのだ。

「くっそー！今度こそ！」

しかし再び失敗。氷自体はできたが飛ばすほうの魔力が弱すぎてとても遅い弾道。

「次！」

今度は発射の魔力が多すぎて氷が発射の瞬間散り散りになった

「次い！！」

その後何回やっても同じ。

俺才能ないのかな……本格的に落ち込んできた……

「はあ、はあ……疲れた……ちょっと、休憩……」

《いえ、休んでる暇はありません！魔力は人にもよりますが使えば使うほど伸びますから！さ、コレをやったら今度は『雷』です！》

ヴィンも乗ってきたようだ。しかしソラはすでにギブアップ。

「もう勘弁してよ〜」

《はあ、仕方ありません。疲れているときにやっても効率が悪くなるだけです。ね。10分だけです……魔力反応！！》

そんなソラに追い討ちをかけるように現れるハートレス。

《ソルジャーですね……この分なら余裕でしょうけど……
……》

「さ、さすがにキツイかも……」

すでに息絶え絶えのソラ。このなかを走り回るのには少しキツイ。

《ですよ。なら、魔法使ってさっさと倒しちゃいましょう》

「ちょっと！魔法使うのは俺なんだよ！？さすがにキツイって！」

それにあの結果じゃああたらないだろ……

あ、ちょっとへこんだ。

《いえ、アレだけできれば上出来です。》

「へっ？」

今ヴィンは上出来といった。

しかし結果はあの様。出せて6個の炎、飛んで1mの氷。あんなものが使えるだろうか？

《私の制御なしでやっていたのですからアレが限界に決まっています

す。》

・・・・・・・・・・・・・・・・俺さっき本気で落ち込んだぞ？

「よし、ならいつちよやりますか!..!」

そしてハートレスに魔法を飛ばした。

.....side　なのは

「なのは!魔力反応だ!おそらくハートレス!ソラのほうだよ!」

「大変!急がないと!」

ソラさんの方に魔力反応があった。

ソラさんは魔法の練習で疲れてるだろうからいそがなきゃ!

そして飛行魔法を発動。自分の出せる最高速度でソラのほうへ向かった。

「ソラさーん！！大丈夫でしたか！？」

「おう！あんなの余裕余裕！！」

魔力反応がでた場所につくとそこにハートレスは既におらず、ソラさんが一人でいるだけだった。しかし魔力反応は弱いものであるが大量にあつた。それを一人で捌いたとなるとすこし恐れ入る。

「あの量を、ですか？」

「おう！魔法でサツと一発！」

《私が制御していたとはいえさすがです》

ん〜・・・私も抜かれちゃうかなあ・・・？

「すごいですね・・・私も抜かれないようにがんばらなくちやー！」

「でも、無茶は、するなよ？」

「もちろんですよー！」

競争心に大きな火がついた。

- - - - - s i d e o u t

「時間も時間だし帰ろうか？」

「そうですね、あんまり遅いとお姉ちゃん達心配するし……」

「
家を出たのが14時。そして今は17時。結界の中なので実感はな
いがもうそろそろ暗くなる時間だ。」

「んじゃ、ユーノ、結界といってくれ」

「え？僕はもう結界張ってないよ？ソラのもとについたときにはも
う解除してたから」

え？

じゃあこの結界は誰の？

《Attention!!!》

ヴィンとレイジングハートが同時に警告を出す。

そして空から大きな金属の塊落ちてきた。

そして塊が浮き上がり胴体、腕、足とパーツがくつついて行き

最後に頭が落ちてきてハートレス、ガードアーマーが完成した。

《上級ハートレス、ガードアーマー………気をつけてください！今まではレベルが違います！》

「なのは、いけるか？」

「ソラさんこそさっきの訓練で………」

「俺のことは心配すんなって。それより、来るぞ！ユーノは補助を頼む！」

「「はいつ！」「」

臨戦態勢に入り構えるソラたち。

そんなソラたちに腕を振り回しながら突進するガードアーマー

《Flash move!!》

レイジングハートの掛け声とともに空に移動するのは

ソレに対しソラは地面を転がることにより避ける

そして空中からなのはが砲撃を放った

「デイバイン……バスター!!」

桃色の閃光がガードアーマーに向かう

「よっしゃあ！直撃！」

しかし

「うそ！？アレ食らって無傷！？」

愕然とするのは。

ガードアーマーは手を振り回す力によって魔力による砲撃をかき消していた。つまり隙がない状態でなのはの砲撃を打っても意味がない。

しかし驚いている時間はない。

またガードアーマーが襲い掛かってくる

今度は足！？踏まれた場所へこんでるよ！？

くっそ、仕方ない！！

「グイン、いくぞ！」

《ええ、いつでも！》

ソラは突進してくるガードアーマーを避けるのではなくあえて懐に入り込む。

そしてガードアーマーの足の動きに合わせて

《Reflect Guard！》

ガードアーマーの攻撃をはじく！！

くっそ、強い！防ぐだけで腕がしびれる！！

しかしこの行動により足をすくわれたガードアーマーは倒れこみ各パーツがバラバラになりあちこちに散らばった。

目の前にある足に向けてキーブレードを叩き込むと

「お？こいつら全部じゃ強いけど単体じゃ弱いかも？」

いとも簡単に再起不能なほどベコベコになる。

こいつら胴体から離ればただのガラクタ？

この分なら案外楽かも

とりあえず残っているもう片方の足を吹き飛ばし、腕にかかろうとする

が

すでに起き上がった胴体が腕を振り回しにかかっていた

でも、弱点が分かってしまえば後は簡単。

全部を引き離して各個撃破だ。

「なのは、こいつら胴体から引き離せばただのガラクタと同じみだ。腕も足もうごかなくなった」

「ってことは胴体を破壊すれば・・・」

「この勝負、もらったり!!」

「でも・・・うかつに近づけませんよ？」

ガードアーマーは腕を振り回しこちらに襲い掛かろうとしている。

なのはの魔法もあの状態だと使えないからな・・・
ん？魔法・・・・・・・・!!いい事思いついた！

「な、腕は俺がなんとかするからユーノとなのはは胴体頼む!!」

どうせ馬鹿力フルパワーで1発だろう

「りよ、了解ですけどいまなにか変なこと考えませんでした!？」

「きーのーせーいー」

そしてソラはガードアーマーの腕に近づいていった。

「ちょ、ちょっとソラさんにするんですか!?!あたっちゃんいますよ!?!」

「まあまあ見てろって」

そしてキープレードを前に出してヴィンに言う

「とにかくでっかい氷塊よろしく!」

《氷塊……ですか?まあできないこともありませんけど、魔力全部使いますよ?》

「いーのいーの。見てろって」

《はぁ……》

ソラには何か秘策があるらしい。

「ソラさん!そっちに腕向かっています!」

まあ、想定内だな

《それでは、行きますよ！！………全魔力開放！！》

「《アイスバラージュ！！》」

そこには

ソラの2倍の高さ、二人でやっと囲めるであろう太さ氷塊………
もとい氷柱ができていた

氷柱はガードアーマーの腕をも突き破り天高く伸びていた

「どんなもんだい！………さすがに疲れたけど」

《いえ、驚きました。まさか上級魔法を使うとは………》

「ま、とりあえずあとどろはよろしくね〜」

そうして気を失うソラ。魔力を完全に使ってギブアップだ。

その後ユーノの回復魔術によって回復したソラはなののはによって20分近く説教されるはめになった。

家に帰り明日に備え寝る準備をするソラ

「結局俺にも魔法使えたな。それもすっごいの」

《1発使って気絶するようでは使えたといいません。これからも訓練は続けますよ》

「え〜……俺は実践で覚えていくからいいって!」

《そんなんで簡単に使えるようになるのはあなただけですよ……》

ヴィンにあきれられるソラ。

しかしそんなソラはこの後自分の首を閉めるはめになる。

「でもなのはみたいになって飛んでみたいよな」

このひとことによりソラが地獄のような特訓でキーブレードを使い空を飛べるようになったのはまた別のお話。

【番外編】ソラの魔法特訓教室！（後書き）

これはひどいwwってかずるいですねww

アイスバラージュってKHのBbsで終盤に取れる魔法なんですけどねww

ソラの魔法のセンスがすげえ！って分かってもらえたならそれでいいです。

今回は普通に戻りますね

海鳴温泉【後編】（前書き）

なのはV sフエイト！

そしてソラの前に現れる・・・

ソラ「先に内容言っな」

海鳴温泉【後編】

「どつ？子供達は寝た？」

「あ、はい。たぶんぐっすり」

「ごめんなさいねえ、みんなあなたにべったりで……」

「ぜんぜん！」

現在夜。

今起きているのは保護者達とソラ。子供達（なのは、すずか、アリス）はすでに御就寝。さすがに疲れたのだろう。

「それにしてもあの卓球はすごかったわねえ、思わず大声で叫んじやったわ」

苦笑混じり笑う桃子。

あのあとソラたちは卓球をしたりお土産を買ったりと1日中遊びまわった。

とくに卓球はトーナメント形式にして周りの観光客をも巻き込む小さな騒ぎとなった。

決勝戦はアリスVSソラ。互いにデュースが続いたがアリスが打ったスマッシュをソラがはじき返し、ソラが勝利を収めた。

その時には周りから歓声上がるほどだった。

ちなみにすずかは審判、なのはは1回戦敗退。

「あなたも疲れたでしょう？明日もあるんだし、今日は休んだら？」

「そうだな・・・うん、今日は寝ます！」

「はい！おやすみ」

「おやすみ！」

そうしてソラは部屋に入っていった。

ん～・・・あれ？島・・・でもないか

ソラは島の上に立っていた。

しかしココヤムの木はなく、滝の水も枯れていた

・・・この世界は繋がった。闇と繋がった世界・・・まもなく光を失う世界。・・・

!!!!これはあのときの!!

.....闇と繋がった世界.....まもなく光を失う世界。扉
の向こう.....何も知らないものが何を見ても、そう、何も理解
できない.....

ゾクリ、と背筋が凍る。

そしてその瞬間あたりは闇に飲み込まれる。

そしてその瞬間

「うわわ!!!!!!」

目が覚めた。

なんだ、夢か.....まだ.....空は暗いな。

そして周囲を見回すそこには互いに寄り添うように眠るアリサとす
ずか

あれ？なのはは？トイレか？

そう思った刹那、ヴェインから念話が届く

《魔力反応です。それも大きめな》

！！？！？！？

「どこだ！？」

《旅館のはずれの林ですね。どうやらそこになのは様もいるようです》

「急がなきゃ！！」

そうしてソラは音を立てないように外へ忍び出た。

- - - - - side なのは

「はあ、はあ……！！」

なのはは今黒色の魔導師と対立していた。
ジュエルシールドをかけての勝負。負けられるわけがない、しかし

この子、やっぱり強い!!

少しずつだが押されていた。

黒い魔導師はなのに向け砲撃を放つ

《Thunder Smasher!》

ソレに対しなのはも

《Divin Buster!》

砲撃で迎え撃つ。

大きな魔力同士がぶつかり衝撃が発生する。

「レイジングハート!お願い!!」

なのはは魔法の出力を上げ、相手の魔法を吹き飛ばした。
起動はまっすぐ魔導師一直線だ。

しかし

《Scythe Slash!》

そんなのはに魔法の鎌が突きつけられる

《Put out!!》

レイジングハートがジュエルシールドをひとつ出した。

「レイジングハート！何を！」

「主人思いのいい子なんだ」

そして地面に降り立つ魔導師そのまま立ち去ろうとするところに

「できるなら、私達の前にもう現れないで。もし次があつたらもう止められないかもしれない」

「まって！あなたの、あなたの名前は!？」

「フェイト、フェイ・トテストロツサ」

「私は!」

言いかけるなのは声を無視しすばやく去っていった。

- - - side out

少しさかのぼりなのはがフェイトと対峙している頃

ソラはハートレスの処理に追われていた

「ああ、もう!急いでるつてのに!」

《しかし放置するわけにも行きませんからね》

周囲にはシャドウやソルジャー、ラージボディといった一般的なものがたくさん出ていた。

「面倒だ!一気に片付ける。アレ、いける?」

《アレ、やるんですか?》

「今使わないでいつ使ったって、よし、行くぞ!」

《了解》

ソラは突進するような構えをとり、腰を落とした
そして

《Sonic Rave!!》

一瞬にしてソラの姿がその場所から消えた。

ハートレスたちはいつせいに吹き飛び、闇に溶ける。

高速で突進を繰り返す必殺技、ソニックレイヴ。

素人には目で追うことができないほどの速さで突進し、ライジボデ
イのようなガードすらも突き破る。

しかし強力な分ソレ相応の魔力を使うため連発することはできない

「これで、終わりか!？」

《いえ、次がラストでしょうね》

すでに行き絶え絶えのソラ

そんなソラに追い討ちをかけるよう現れたのは

かつて倒した敵、ガードアーマー

「弱点が分かっているからな、余裕余裕！……うん、たぶん」

《今はなのは様いせんけど、まあその分がんばりましょ》

そしてガードアーマーに遅いかかった。

「はぁ！！」

ガードアーマーの胴体にキープレードを叩き込む。

「やっぱり足とか先にやらないとだめなのか……」

《そのようですね、仕方ありません、足からつぶしましょう》

突進してくるガードアーマーの攻撃をリフレクトガードではじき、
転ばせる

そして襲い掛かるうとするが

《ソラ！！下がってください！！》

ヴィンにとめられる

「なんで！いまチャンスだろ！？」

《いえ、いきなり魔力量が上がりましたから……何か来ますよ》

しかしそこには崩れ落ちているガードアーマー。ふたたび体制を立て直すべく立ち上がるうとしているだけだ。

「ほら、なんもな……い？」

立ち上がったのはガードアーマーではなく

《オポジットアーマー。ガードアーマーの派生、でしょうか。ともあれガードアーマーとは比べ物にならないほど強いですよ》

そしてオポジットアーマーはソラに突進を仕掛けた。
いつものごとくりフレクトガードで受け止めるが

「うわ！！！！」

その状態で大きくふき飛ばされた。
攻撃もあがっているようだ。しかし受けることができないならかわすまで。

「隙を突くしかない！」

そしてオポジットアーマーの股の下を転がりぬけて

「はあ！！！」

腕を吹き飛ばす。

続いて踏まれそうになるところを転がり避けて

「炎よ！！！」

炎の力でダメージを与えていく。

《いいですよ！そのまま行ってしましましょうー！》

「何もしてないのに騒ぐなって！」

オポジットアーマーから距離をとり残った足に向けて

「凍れー！」

氷塊を打ち込む。

「よし！残りは胴体だけだ！」

胴体以外吹っ飛んだオポジットアーマー。

そんなオポジットアーマーは胴体の底面を砲身のようにしてソラに向けた。

《……！！集束魔法感知！！気をつけてください！今までになり攻撃です》

そして砲身に光が集まり

破裂した

「うわああ!!」

吹き飛ばされるソラ。

そんなソラに止めを刺すように再び砲身に光が集まる。

やばっ!!

衝撃に備えるソラ。

しかし砲撃はいつまでたっても自分に向かって来ず見えたのは地面に叩きつけられる瞬間のオポジットアーマーと

忘れることのない
自分が常に探し続けた相手

親友のリクがいた。

海鳴温泉【後編】（後書き）

こんな感じですよ。

本来ならばまーりんの家の前ですがそんなものありませんのでww

んじゃ、次の時にまた!!

すれ違つ想い、分かり合えない気持ち（前書き）

作者「今回ちょっと書き方変えてみました。主に地の文」

ソラ「いままでひどかった気もするけどね」

作者「まあ、読みにくかったら戻しますよ」

すれ違ふ想い、分かり合えない気持ち

「どうした？ソラ、もう終わりか？だらしないな」

「リク！？」

俺がずっと探してきた親友がここににいる。嘘じゃない、夢で見る幻じゃない。

本物だ、本物がいる！！

「そうだ、カイリは……？」

「一緒じゃないのか！？」

その様子からリクも一緒ではないようだ。その言葉に肩を落とす。リクと一緒にじゃなかったのか……

「でも心配するなよ、俺達で探せばすぐに見つかる。俺達は外に出られたんだぜ？もう、どこへだっていける。カイリを見つけるのなんて簡単だ。そうだろ？ソラ。全部俺に任せるよ、そうすれば……」

リクの言葉はリクの背後から来る音にさえぎられる。そこにはキーブレードを手にし、ハートレスを倒すソラの姿。

「誰に、任せるって?」

「ソラ、おまえ……………」

「俺だつてリクとカイリを探してたんだ。さすがに一人は無理だったからさ、なのは……………あー、俺が今いる家の人たちに手伝わってもらったりしながら。もちろんキープレード、ヴィンも一緒に!」

キープレードに選ばれたことを得意げに話すソラ。

「ん?キープレードってコレのことか?」

「え、あれ!?!いつのまに!?!返せって!」

キープレードを投げるリク。

つとと、でもいつの間にも俺から取ったんだ?そんな暇無かったはずなんだけども……………さすがは、リクってとこなのかな?

「あ、そうだ!リクもこっち来いよ!きつと入れてくれるさ!」

《勝手に決めるのはいけませんよ》

「いいじゃんか、せつかく会えたんだ!土郎さんや桃子さんだつて……………ん?」

《おや？》

しかしすでにその場にリクは見当たらず、しんとする森が広がるだけだった。

どこいったんだろう、折角会えたのに……でもまあ

「まあ、いつか！リク、元気だったし。リクに会えたんだ、カイリにもあえるよな！！」

《誰に言ってるんですか。》

それ、いうなよ……

《それより……なのは様どころに急がなくてはならないのでは？》

「あっ！！」

すっかり忘れてたよ……

……side ????

「ごらん、私が言ったとおりだっただろう。あの子はお前を捨てて

こっちの人間を望んだんだ。お前は必死だったがあの子はちゃっかり新しい友達を見つけていたんだよ。」

女がリクに甘い声でささやく。
そしてでも、と続けて

「私のそばにいなさい。私を捨てたりはしない。お前が望むものをすべて与えよう……。」

リクは何も言わず、ゆっくり女に近づいていった。

- - - - - side out

「あと、どれくらい!?!」

《前方の角を右方向です。そのつぎ、目的地周辺です。》

ずいぶん落ち着いてるな!?!ってかカーナビ思い出したよ!!
ん?カーナビって何だ?

角を曲がるとそこにはなのはが一人たたずんでいた

「なのは!!!大丈夫か!?!」

「あ、ソラさん……。うん、怪我は無いよ。」

ん？心なしいつもの明るさが無い？なにかあったのかな？

「なにか、あった？」

「ううん、何も無い。さ、旅館に戻ろう？みんなにはれると言いつてできなくなっちゃう」

言葉に覇気が無いままなのは。しかし今はその事情を聞く時ではなさそうだ。

いつか自分から言ってくれる日を待ってみよう。

でも

「外にいくなら一言かけなさい！」

「にやっ!?!」

なのはの額にチョップを入れておいた。そしてこっそり旅館に戻った。

旅行が終わって1日。

……なのは大丈夫かな……あのまま覇気が無かったから……
……アリサ怒りそう

翠屋で店番をしながらそう、思うソラだった。

-. -. -. side なのは

「いい加減にしなさいよ！」

アリサちゃんの怒号。

「この間から何話しても上の空でボーっとして!！」

「ごめんね、ありさちゃん……」

「ごめんじゃない!!あたし達と話してんのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ!!いくよすずか!!！」

ああ、またやってしまった。

あの黒い子、フェイトちゃんのことを考えているとついほかの思考が追いつかなくなってしまう。そんなのはにアリサはついに痺れを切らした。

アリサが怒鳴り散らし、教室から出て行ってしまった。

「あ、アリサちゃん……。なのはちゃん……」

「いいよ、すずかちゃん。今は、なのはが悪かったから」

「そんなこと無いと思うけど……とりあえずアリサちゃんも言いすぎだよ……ちょっと話してくるね」

そういつてすずかも後を追う。

「怒らせちゃったな……ごめんね、アリサちゃん」

今は確実に自分が悪い。

アリサちゃんが話しかけてくれているのに私はそれを無視してしまつた。怒るのも分かる。

二人が出て行って一人になったのは机に突っ伏し、自分のしてしまつたことを後悔した。

- - - - - side out

- - - - - side アリサ

なのはのやつ、明らかになんか悩んでるのに隠して！心配させたくないなら言ってくればいいのに！！

そんなに私は信用ならない？そんなに私は頼りにならない？私達はそんな小さなつながりだったの？

「アリサちゃん！アリサちゃん！」

すずかが追ってきたようだ。自分と呼ぶ声、そんな声に対し

「なによ?」

自分でも分かるぐらい不機嫌な声。

「なんで怒ってるかなんとなく分かるけど、だめだよ!あんまり怒っちゃ!」

「だって、むかつくわ!!悩んでるの見え見えじゃない!!迷ってるの、困ってるの見え見えじゃない!!なのに・・・何度聞いても私達には何も教えてくれない。悩んでも迷ってもないって嘘じゃん!」

すずかに怒鳴っても仕方が無い。これは完全な八つ当たりだ。

「どんなに仲がいい友達でも、言えないことはあるよ・・・!!なのはちゃんが秘密にしたいことだったら、私達は待ってあげられないんじゃないかな?」

「だからソレがむかつくの!少しは役に立ってあげたいのよ!どんなことだっていいんだから、何にもできないかもしれないけど、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない!」

私は、ただなのはが心配なだけ。

ただ、なのはは悩みなどを隠すことがある。そんな時、役に立てない、自分がかしい。

「やっぱり、アリスちゃんもなのはちゃんのが大好きなんだね」

「そんなの、当たり前じゃないの!?!」

本当のところ、コレが本音だった。

だって、あの子がいたから私は一人ぼっちじゃなくなったんだ。
なのはがいなければすずかとも友達になれなかった。

ねえ、なのは、全部を抱え込まないで、私を、私達を頼って。
私達にあなたを手伝わせてよ。

- - - - - side out

- - - - - seide なのは

あれからの授業は全く頭に入らなかった。

アリスとすずかがそばにいないだけで気分が重かった。

「じゃあ、なのはちゃん!ごめんね?今日はわたしたち習い事の日
だから」

「夜遅くまでなんだよね?いってらっしゃい!がんばってね!」

しかしアリサちゃんは言葉に反応せずに行ってしまった。
さすがにコレはキツイなあ……………

「あ、大丈夫だからね！なのはちゃん！」

「うん、ありがとう、すずかちゃん」

そう言ってくれるすずかちゃんに自分の精一杯の作り笑いで送る。
しつかり笑えてただろうか？

独りになる教室。なのはもすぐに帰りのしたくを済ませて学校から
立ち去った。

ひとりで帰るのって、なんだか久しぶりだな……………

いつもは二人がいてくれたから……………

今日は寄り道して帰ろう。みんなに今の顔、見せられないや

そう思い、なのははいつもの道から外れていった。そこは海沿いの
道。途中にあるベンチに腰掛けて思いに耽る。

そういえば、入学したてのころアリサちゃんと大喧嘩したっけ。す
ずかちゃんに意地悪してるところを見て、思わずほった叩いて

「痛い？でも大事なものをとられちゃった人の心はもつともつと痛
いんだよ」

って言って。それから大喧嘩になって、ソレをとめたのは事の発端

のおとなしかったはずかちゃんだった。
それから少しずつ話すようになって……友達から、親友に
なって

「私、二人のことすつごく大事なのに、私……」

私をもっと気をつけてれば、もっと二人に気をかけていれば、そう
自分を責める気持ちがおおきくなっていき、じわり、と涙が込み上
げる。

そんななのはに

「あれ？なのは？」

声がかげられた。

- - - side out

なんでこんなところになのはが？

店での仕事が終わり家路につくソラ。買い物帰りだし、いつもと違
った道に、と思って海沿いに来ただけど……。
なのは、泣いてる……？

「なにか、あった？」

そう、話しかけると、ゆっくり話し始めた。学校で起きたことすべて。

「そっか、喧嘩、しちゃったのか」

「違うよ、私がボーっとしちゃってたから。アリサちゃんに怒られたっただけ」

「親友、だろ？」

「うん。入学してからのね」

思わず自分とリクを重ねる。そういえば、喧嘩もたくさんしたなあ。……そのときはすごく寂しくて、いつつも木の下で泣いていたっけ。

『喧嘩するほど仲がいい』まったくもってその通りだと思う。喧嘩してても次の日にはふつうに話してたりして。親友ってそういうものなんだよな。

そして今、一番なのはにかける言葉

それはなのはを慰めることでも、怒ることでもない。

今俺がやることは道しるべを作ってあげることだと思っ。

「なあ、なのは。喧嘩した後ってすっごく寂しいよな。でもさ、それを乗り越えると次はもつと仲良くなってるんだよ。今なのはがやることってさ、もちろん、泣いたり、喚いたりするのもそうだけど、今できることを精一杯やることじゃないかな？」

で、全部終わらせて、笑顔で報告することなんじゃないかな？」

その声にはっとするなのは。

どうやら今やるべきことがみつかったようだ。

「うん、私がやること。ジュエルシードを早く集めて、アリサちゃんに仲直りする！」

うん、不安はあるっばいけど、もう迷うことは無いかな？

そんななのはにソラは袋からたい焼きを一個取り出し

「ほら、こっち、なのはの分」

半分がちぎって渡す。

「桃子さんには秘密だからな？」

そのたい焼きを受け取るなのはの顔はいつもより少し暗いが、さっきより明るさを取り戻した決意を決めた顔だった。

すれ違う想い、分かり合えない気持ち（後書き）

ちよつとずつ、話は動いておりますよ〜

だいたい6話ぐらいかな？後半分。。。つってもここでKH1終らせるからもうちつとながいかもですけどね

今回の話はわりとノリノリで描きました（笑

暴走 【前編】（前書き）

作者「今回は二つに分けます！」

ソラ「ただ半分終わってないだけZ Y」言つな！！！」

暴走 【前編】

- - - - - side アルフ

「ん」 こつちの世界の食べ物もなかなか悪くはないよね」

そんなことを言いながら食べているものはドッグフード。いつだったかフェイトが買ってきてくれたご飯^{ドッグフード}、コレおいしいねえ
まあ、この状態で食べると違和感あるかもしれないけど、おいしいものはおいしい！

「さつて、うちのお姫様は、と」

そういつて立ち上がるアルフ。おっと、忘れ物！
手に取ったのはドッグフードだった。

フェイトの部屋に入った。お盆に目をやるとほとんど手をつけられてない食事があった。また食べてない！フェイト、ここのところ何も食べてないじゃないか……

「だめだよ？食べなきゃ」

「少しだけど、食べたよ。大丈夫」

でも、食べないと動けなくなっちまうし……そろそろ無理やり食べさせるべきか？

「そろそろ行くつか。次のジュエルシードの大まかな特定は済んでるし、あんまり、母さんを待たせたくないし」

え？もう？フェイト、まだ傷が……！！

「そりゃまあ？フェイトは私のご主人様で、私はその使い魔だから行くつって言えばいくけどさぁ……」

「それ、食べ終わってからでいいから」

へ？あ！これじゃないよ！！べ、別に食べたいわけじゃないんだよっ！

あわててドッグフードを端に追いやる

「そ、そうじゃないよ。あたしはフェイトが心配なの。広域探索の魔法はただでさえ体力使うのに、フェイトってばろくに食べないし

休まない、その傷だって軽くはないんだよ!？」

しかし

「平気だよ？私強いから。」

そういつて準備をしだすフェイト。
フェイトの体には無数の傷がある。それもこれもあの女のせい。

「さ、いこう？母さんだって私を待ってるんだ」

フェイトはもう、とまらない。

- - - side out

あれから一回家に帰って、荷物を置いた後ソラ、なのは、ユーノは
ジュエルシードの探索に出ていた。
にしても、見つからないな。 しかももう暗くなってきた
し

「タイムアップかも」

「大丈夫だよ、僕が残ってもう少し探してくから」

「ユーノ君一人で平気？」

「うん、だから晩御飯とっておいてよ?」

ユーノ、一人で残るのか……ん……そうだな、

「俺も一回なのは送った後にそっち向かうよ!」

「ほんと?助かるよ」

じゃあ、後でね、と分かれる三人

それぞれの道を歩いていると

大きな魔力反応が起きた。

「」「?!?!?!?!?」「」

「ユーノ!今の!」

「魔力反応だ!!こんな街中で強制発動だなんて……!!広域結界!!間に合え!!」

そしてあたりが暗くなる。

「レイジングハート、お願い!!」

バリアジャケットに着替えるなのは。

「なのは、ソラ、発動したジュエルシードが見える？」

「あの光？」

「そうだ。アレが暴走する前に封印を!!」

「了解!!」

ジュエルシードが発動したようだ。暴走って………したら大変みたいだな………早く終わらせないと!!

「なのは、なのは先に向かって!俺は飛べないから!」

「うん!後でね!」

そして飛んでいくのは。

にしても、こんなところでやるなんて………迷惑な奴だなあ。

ん？なのはが封印に入ったかな？
あれ？でも反対側からも光が来てるな？どづいつことだろづつ？と、
とりあえず急がないと！！

ジュエルシードまではまだ遠い。

- - - - - side なのは

あの女の子も封印を・・・！！

二人の魔力光はひとつになり、ジュエルシードは封印された。

「なのは！早く確保を！！」

「そうはさせないよ！！！！」

女の人が頭上から攻撃してくる。

ユ一ノ君がシールド張ってくれてなんとかその場をしのいだ。

そしてその横にはフェイトちゃんが。

「この間は、自己紹介できなかったけど！！わたしなのは！高町なのは！！！！」

そんな言葉に返事をしてきたのは

《Scyth Form!》

彼女のデバイスの声。とつさに構えるなのは。
なのはは聞きたかった。

ねえ、あなたは どうして、そんなにさびしい目をしているの？

と。その目はかつての自分がしていた目と似ていた。
家には誰もおらず、朝も、夜も一人。お兄ちゃんも、お姉ちゃんも
お店に出てて、一人ぼっちだった自分。でも家族に心配はかけたく
ないから、と行って無理をしていた自分。彼女の目はそんなときの
自分目に似ていた。

その心の言葉の答えはなく帰って来たのは距離をとって一気に突進
してくるフェイトちゃんだった。

二人は激しくぶつかり合う。そんな二人の魔力はぶつかりあうたび
にあたりに散乱していく。

二人の激突の中、フェイトに向かって突進するのは。しかしフェ

イトの姿はすでにそこになく、完全に裏を取られてしまった。まずい！！このままあたると墜ちる！！！！

《Flash Move》

レイジングハートが機転を利かせてくれた。レイジングハートが自己判断で瞬間移動魔法を発動させ裏を取ったフェイトのさらに裏を取る。そして近距離から

《Divine Shooter!》

砲撃を打つ

しかし相手もソレに応じる

相殺された！？

フェイトはそのまま次の行動に入ろうとしている。しかしなのはの行動はもっと早かった。

「フェイトちゃん！」

名前を呼ばれ動揺するフェイト

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど、だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!!」

ぶつかりあったり、競い合うことになるのは仕方ないかもしれないけど、何も知らないままぶつかり合うのは私嫌だ!!」

これは果たしてフェイトだけに言っているのか、それともなのはに言っているのか、自分にも分からなかった。

今の自分とアリサの関係はまさにコレと一緒に。自分が言葉にしなかったことが原因で、喧嘩して、今もこじれている。言葉にして伝えなければ分からないことも分かり合えないこともあるのだ。だから、となのはは自分がジュエルシードを探すわけを伝える

「私は……」

それを聞いて自分のわけを話そうとするフェイト。しかしそんな言葉はアルフはさえぎった。

『何も答えなくていい!!やさしくしてくれる人たちのとこでぬくぬく育ってるようなガキンチョになんか何も教えなくていい!!』

そんな言葉にはっとするフェイト。

そしてジュエルシードを一瞥すると一直線に飛んでいった。

それを追いかけるのは。

ジュエルシードはもう目の前だった。

暴走 【前編】（後書き）

うーん……、むつかしい。

原作介入だからね、ちょっと事情が変わる（汗
ま、気長に待ってってくれるとうれしいな！？
早いうちに書き上げますから）笑

暴走 【後編】（前書き）

作者「もうそろそろ終わりですね……」

ソラ「まだまだ伏線あるんだけど？」

作者「まあ消化していきます」

あ、PV10000超えありがとうございます。
田んぼの英雄さん、応援ありがとうございます。

暴走 【後編】

あつれー？こつちじゃなかったかなあ？

ソラはジュエルシードの場所へ後でいくと行って走っていたのだが

「道、迷った？」

再び迷ってしまった

《なにやってるんですかソラ！非常事態なんですよ！？》

「わかってるって！なら道案内してくれよ！！」

《だから魔力の方向はいつているでしょう！？》

「こつちには道つてのがあるの！！」

魔力反応を頼りにヴィンとともに歩いてきたのだが魔力反応で分かるのはあくまで方向のみ。少しずつは進んでいるのだろうが如何せん、よく知らない町なので道のりまでは分からない。

これ、ついたときには終わってるんじゃないか………？とか思ったりもしてる。

そしてそんなソラの前に現れたのは

ハートレスの大群だった

「またあ！？もう勘弁してよ……」

さつきつから歩くことに出てくるハートレス達。しかもジュエルシードの方向に向かうにつれて増えていつている。こいつら俺の足止めかよ！？

《ハートレスを率いてる大物が出ると楽なんですけどねえ》

「ちよつと、とんでもない事言わないでよ！？それフラグだよね！？絶対フラグ！！」

不吉なことを言うヴィン。こんなときは大抵決まっている。大物ハートレス、それも巨大な奴が現れるのだ。つたく、ヴィンの奴、思いつき死亡フラグ建てて！！

まあ、分かってたよ？ハートレスが来ることぐらい。だからって、だからってさ

「なんでこんな強そうな奴？」

大地を震わせ進行する巨大なハートレス、ベヒーモス

「ワーオ、こいつは少し危なすぎますね……。ま、まあ来てしまったものは仕方ありません、さっさと倒しちゃってください」

「ワーオ、じゃないよ?!?!?」

こいつどこでそんな言葉覚えて来るんだよ……。前つてもっと敬語使っし、『マスター』とか言ってたんだけどなあ……。育て方間違った？まあ、育てた覚えはないんだけどさ

そんなことをしているうちにもベヒーモスは近づいてくる。しかも頭を振るごとに空からは落雷が。

あつぶなあ!! あんなの当たったら一発でやられちゃうよ……

「ヴィン、あいつの弱点は!?!」

《頭部にある角を折ればしばらくは動けなくなります。ついでにある角から魔力が出ていますのでアレを折れば雷も止まるはずですよ。まあすぐに治り生えますけど。》

ベヒーモスの頭部。そこには青く光り周囲に電気を放つ角が生えている。アレを折ればいいのか……。でもあそこまで届かないし、なのはみたいに遠距離攻撃はないからなあ……。ん？遠距離？

「なあヴィン、お前って遠くにあっても俺が念じれば戻って来るん

だよな？」

まあ、一応確認って大事だよな！

《まあ、戻ってきますけど……まさか!?》

あ、気づいたのかな？ま、いつか

「それじゃあ、いつて来い!!」

そういつてキーブレード……もといヴィンを思いっきり投げるソラ。

《ちよつとおオオオオ!!!》

くるくる回り角へ一直線に伸びる。おーおー、ヴィンの声が聞こえる。……あ、角に当たった。でも折れてないし、しかもヴィン弾かれてるや。意味なかったのか？

そうして手を前にやりヴィンを手に戻す。

《ちよつと馬鹿ですか!? 馬鹿なんですか!? 怖いじゃないですか！一言言ってくださいよ!! いくらなんでも無茶すぎですよ!? 戻ってこなかったら成す統べなくしてつぶれるんですよ!?》

「あー悪い悪い！言わなかったのは謝るって！でも、次はもういいよな？」

そうして再び振りかぶって……

《だからちょっと待ってくださってば!!》

「なんだよ、もう」

ソラの行動をさえぎるように声を出すヴィン。ちょっと待て、と止めてからすでに数分。ベヒーモスの落雷は激しさを増す一方。どうやらご自慢の角に一発入れられた（弾かされただけだが）のが悔しいらしい。頭をぶんぶん振っている。

「ちょっと!!早くしてよ!こっちがやられる!」

《もうすこし……完了!OKソラ、いつでも投げてくださ
い!!》

へ?さっきまではあんなに渋ってたのに今はすっかり……!
!まさか!!

「お前、そんなの趣味なのか……」

《何考えてるのかわかりませんが異常にムカつきますね!?それよ
り早くしてくださいよ》

「投げていいの?本当に?」

《ええ、思いつきり。》

その言葉を聞き、ヴィンを振りかぶるソラ。そんなソラにヴィンから

《さっきの考えはともいいものでした。弾かれてしまったのは威力がなかったから。ならばソレに威力をつけてやればいいんです》

そしてソラは思いつきりヴィンを投げた

《Strike Raid!!》

ソラが投げたキープレードは光を纏い角へ。そして先ほどのように弾かれずに角にヒットする。すると
えっ？

手にはすでにヴィンが。

《いちいち呼ばれてから戻るとタイムラグがでますから。私自身が戻れば問題ありません。》

なるほど……よくわかんないけど戻ってくるのが早いんだな？なら!!

「ヴィン、もう一回行くぞ！」

《ええ！！》

再びストライクレイドを発動。

角に当たり、ソラの手元へ。そしてソラは再び投げる。

そしてソラの手元にヴィンが戻ったとき、全身のバネを使い渾身の
一撃を投げる

《Judgment！！》

ソラの渾身の一撃はベヒーモスの角を砕き、ベヒーモスに多量のダ
メージを与えた。

すっげえ……！！と、感心してる場合じゃないや、すぐ
に起きちゃうんだっけ。

ソラはうな垂れるベヒーモスの頭に向かって全力全開の一撃を決め
た。

《mission complete！！さ、急ぎましょう。今
のベヒーモスが消えたおかげで大半のハートレスも消えたようです》

「……おっ」

そうしてソラはなのはのめとを指し走っていった。

フェイトがジュエルシードに向かって飛んでいくのを見て追いかけるのは。しかしなんだ？この胸騒ぎは？

そして二人はジュエルシードを封印すべく自分のデバイスを突きつける。

二人のデバイスはジュエルシードを挟むようにして重なった。大きな魔力同士がぶつかり、互いのデバイスに輝が入る

その直後ジュエルシードが魔力に反応して発動した。大きな魔力が爆発する

爆発が収まり周囲を見渡すとジュエルシードを挟むように反対にフェイトがいた。ジュエルシードはまだその場に浮かんだままだ。しかし互いのデバイスはすでに限界。封印することができない。

しかしフェイトはそのジュエルシードに近づき素手で封印を始める

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！！」

膝き、祈るように魔力をこめるフェイト。しかしソレは明らかかな自

殺行為。大きな魔力を自分の力だけで抑えるのは危険すぎる。

しかしやがて魔力の漏洩が収まるとそこにはすでに限界状態のフェイト。崩れ落ちそうになるところをアルフが支え、アルフによって運ばれていった。

フェイトの安否は誰も知らない。

- - - - - side なのは

レイジングハート……大丈夫かな……それにフェイトちゃんも。

「ユーノ君、レイジングハート大丈夫？」

「うん、破損は大きいけど大丈夫」

そっか、よかった。

「なあ、なのはと戦ってた奴って、そんなに強かったのか？」

あ、そっか、ソラさんはあったことないんだっけ。

「なのは、いや、それ以上の魔導師だね」

説明するユーノ。私以上……それは間違いない。

「そっか。その子はなんでジュエルシードを集めてんだらうな？」

「自分の欲のため、つってというのが一番有力かな？魔力の制御ができればあれは『願いが叶う石』だからね」

ジュエルシードは簡単に言ってしまうえば『願いがかなう石』。大抵はジュエルシードの魔力に押されていびつな形で願いが叶ってしまうがその魔力を制御する人がいればソレは魅力的だらう。

でも……フェイトちゃんはそんなこと望んでない気がする。だつてあの悲しい目。

自分のためというよりは人のため、他人のために無理無理をしているようにしか見えない。

「願いが叶う……か。ならリクとカイリも見つけられるかな？」

「だめだよソラ！アレは危険なものなんだ！」

「分かつてるつて！！」

どっちにしてもフェイトちゃんから話を聞くしかない……か……

今度は、お話、出来るといいな。

- - - side out

ふうー……なのには学校行ったし、ユーノはジュエルシー
ド探すらしいし。

「俺は一日店番かなあ？」

現在地：翠屋

現在桃子は裏でケーキを作っていて、土郎は………なんか恭
也とどっかいった。

ということでもカウンターにはソラしかない。

もう店番をやって長いソラ。簡単なケーキの作り方と、桃子直伝コ
ーヒーの入れ方はマスターしている。何人のお客さまにも出して
るし、自分で飲んでもまずくない。

しかし、そんなスキルも客がいてこそ光るもの。

朝から来る人はなかないので今はソラしかない。

だれか来ないかな………

そう、思いながらコーヒーを飲むソラ。ちなみにブラック。

ん！？誰か来た！

「いらっしやいませ……！」

「えっと、ケーキをテイクアウトで………あっ」

そこには金髪で髪の毛の長い少女が。
ん？俺会ったことあったっけ？

「えっと、この間はスーパーで……」

スーパー……？……あ！あの子の

「ああ！あの子の女の子かー！」

「はい、あのときはありがとうございました。」

深々と頭を下げる少女。

おっと、そういえばテイクアウトだっけ

「問題ないって！……あ、今日は何買いにきたの？」

「あ、えっと、母の土産に……ただ何買えばいいか分からなくって」

お母さんが、きつときれいな人なんだろうな

「そうだな……今人気なのは……ロールケーキかな？」

「あ、じゃあ、それで」

「ん。じゃあちょっと待ってて、今箱に入れるから」

実はこのロールケーキ、ソラが作ったものだったりする。味も見た目も桃子のお墨付きだ。

「なあ、そういえば君の名前は？俺はソラ！」

「あ、フェイト、フェイト」テスタロッサです」

「フェイトか、よろしくな！……はい、コレね」

箱をフェイトに渡し、代金をもらう。

「俺はだいたいここにいるからさ、いつでも来てくれな！」

「はい、また」

そういつてフェイトは出て行く。

あの子、なんか目がカイリに似て……そうでもないか？

そしてソラは店番を続ける。

-. -. -. side リク

現在地：時の庭園

辺りには鞭の音が広がる。

何回か鞭の音がなった後ドサツ、というなにかが倒れる音がして金髪の女、プレシア「テスタロッサが部屋に入る」

「ひどいもんだな、あんたの娘だろ？」

「あんな子は娘などではないわ」

嘲笑うプレシア。

現在、リクはプレシアの元にいる。島から飛ばされた後、リクはプレシアに拾われたのだった。

「ジュエルシードを集めさせて何をする気なんだ？」

「あのとときを取り戻す、それだけよ。……それよりあなたは探し物がみつかったかしら？」

「ああ。これで俺の願いは叶った。あとはあんたの願いだな」

プレシアとは契約をしていた。

俺が探し物を見つけるのを手伝う。そしてその代わりに俺はプレシアの手助けをする、というもの。

プレシアの手助けとはジュエルシードを見つけること。正確にはフェイト蛾やっていることの手助け。リク自身で封印するのが一番早い。がデバイスを持っていないリクにはできない。なのでフェイトに封印させる必要があった。

手助けといっても自分の存在がばれてしまつては意味がない。なので本来現れるはずのないハートレスを置いたり、封印されていないジュエルシードを見つけやすい場所に置いたりしてきた。もちろんそのことはフェイトも知らない。

「次も頼むわ……私の娘は出来が悪いから」

「ああ、俺は介入しないからな」

「ソレでいいわ。ただ管理局には気をつけて」

「ああ」

管理局とは簡単に言えば時空警察。当然非公式に動いている俺らは逮捕の対象だ。

しかし、コレもカイリのため。

カイリのためなら、俺は親友をも敵に回そう。

そう、決意して、海鳴市に飛んだ。

- - - - - side out

暴走 【後編】（後書き）

どうでしょう？こんな感じですよ。

リクがマジ悪ww

ってかこのままA・Sやろつか迷ってる………A・Sへの入りが難しいんだよね

時空管理局【前編】（前書き）

作者「短い……」

ソラ「今迄で一番ひどい出来でもある」

作者「テンションが乗らないんです」

時空管理局【前編】

PM5:47

「暇だな……なのはまだかなー？」

《もうすぐですよ、6時になりますし》

「にしても鍵忘れるなんてついてないな……」

《ソレはソラが悪いです》

鍵がなくて部屋に入れず、家の前に座るソラ。

「にしても暇だな……何か起きないかなー？」

《なるほど、そんなソラにいい情報です。》

「ん？」

《もうすぐジュエルシードが発動します》

「……そういうことは早く言おうよ？なのは、大丈夫かな？」

《さきほどユーノ様が向かったので問題はないと思います》

「ま、なのはだしな」

今回はハートレスが出ないことを祈ろう……切実に。

「で、場所は？」

《南東です》

……

「だから方角じゃ分からないって!!」

P M 5 : 2 4

くそ、ヴィンの奴方向しか言わないからまた遅くなっちゃったじゃんか！

海鳴市臨海公園に着くとすでに戦闘が始まっていた。

戦ってるのはなのはと……フェイト！？なんであの子が！？

なのはのライバルって……もしかしなくてもフェイトのことか！？

「ユーノ、どうなってるんだ！？」

「ソラ！……今、ジュエルシードをめぐる二人が戦ってる。僕達が入る余地はないよ」

「なんでフェイトが……俺、止めてくる！！」

「ソラ！？」

そういつて走りだすソラ。

フェイトがジュエルシードを狙ってる！？そんな人には見えなかった！！事情聞かないと！！

「ヴィン、行くぞ！！」

《了解！》

二人が互いの愛機を振り上げたときにソレを受け止めるように間に入り込む。

しかしソラの行動は結果を生む前に、誰かに吹き飛ばされた。

「うわあ！！」

吹き飛ばされるソラ。

な、なんだ！？いきなり人が現れたぞ！？

「ストップだ！！」

入り込んできた誰かはソラを吹き飛ばしたのはのデバイスと素手で取り、フェイトのデバイスを自らのデバイスで受け止めた。

そこには黒い少年が一人。

吹き飛ばされたソラは地面に落ちて行き、体勢を立て直した後に地面に降り立つ。

なんだ？あいつ！！いきなり人吹き飛ばしておいて！！

「ここでの戦闘行動は危険すぎる！時空管理局のクロノハラオウんだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか。まずは二人とも武器を引く

んだ」

そうして3人は地面に降りてくる。
しかしその三人に魔力弾が降り注いだ。

「フェイト！撤退するよ！」

アルフが魔弾を地面に発射する。その魔弾により土埃があがり周囲が見えなくなった。

その隙にフェイトは上空に上がり、ジュエルシールドに手を伸ばした。しかし土煙の中から白い魔弾が跳びフェイトに着弾。手がジュエルシールドに届く前にフェイトは落とされた。

あいつなにやってんだよ！こんな高さから墜ちたら……！！

ソラの頭に浮かんだのは『死』の文字。

そう考えたときにはソラの体はすでに動いていた。

「おっと」

地面でフェイトを受け止めるソラ。

「ソラ………さん？」

「大丈夫か？」

安否を確認。どうやら命に別状はないらしい。しかしその表情から

は疲労が見える。

「フェイト!!」

ソレを見てアルフが駆け寄りフェイトを抱きかかえる。

落とした張本人、クロノハラオウンはそんなフェイトに向け杖を向ける。しかし

「やめて！打たないで!!」

なのによって止められた。

その隙にフェイトたちは跳んで逃げていく。それにしてもあいつ、もう戦えない奴に対して武器を向けるなんて……!!

ソラは怒りを胸に抱えた。

-. -. -. side アースラ艦体

「戦闘行動は停止、一方は逃走！多重転移で逃げられました。追跡は無理ですね」

「まあ、戦闘行為は迅速に停止、ロストロギアの確保も終了、と。事情も聞きたいところです」

そういつと艦体のリーダーであろう人物はモニターを開き

「クロノ、お疲れ様」

「すみません、一方に逃げられました」

「ま、大丈夫よ。ちょっと事情を聞きたいからそつちの子達をアースラにつれてきてくれるかしら？」

「了解です、すぐに戻ります」

そついつて通信をきり、転送ポートを開いた。

- - - - side out

なんか訳分からないな、勝手に話が進んでる。

「そのままの状態でついて来てもらう。準備は良いか？」

「えっと、行くのは私達だけ？ソラさんも？」

「もちろんそつちの犯罪者も一緒だ」

.....犯罪者って俺！？

「待てよ！どうして俺が犯罪者なんだよ！？」

「重要参考人の逃亡の手助け及び公務執行妨害だ！！」

はあ！？そんな！！

「とにかく君たちにはついてきてもらおう」

そういうとソラ、なのは、ユーノ、クロノは光に包まれ、その場から姿を消した。

アースラ艦体内

……………どうして俺だけ？

どうも、ソラです

現在独房にてとらわれています。たぶんフェイトに対する行動がまずかったんだと思います。はい、反省してます。出ようと思ったけど鍵がしまっていました。

「ああ、つまらない。もう何分になる？」

《40分です。ちなみにさっき同じ質問をしてから3分12秒です》

すでに独房にいれられて40分。暇をもてあましていた。

「なんとかでれないかな？」

《なのは様に来てくれるのを待ちましよう、余計な行動は罪を重くしますから》

そうなんだよな……うかつに行動できないのがきついや……
……
そうして暇を持てあますソラ。

そんなソラに救いの手が伸びる。

《まあ、強引になら開けられます》

「ほんとか!？」

ソラは瞬間的に食いついた

《鍵なら開けられますから。しかしその後見つかると危険ですよ》

「いいって!ーやろつ!ーいますぐやろつ!ー」

そしてヴィンの指示通りに動く。
ヴィンを扉に向けるとヴィンに光が集まり

扉に向かって伸びる

ハカチャリッ

電子扉から鍵が外れる音がして扉が開く。
そして出ようと思ったソラの目の前に

「なぜ、出れている！？アースラのセキュリティは1級物だぞ！？」

クロノハラオウンがたっていた。

時空管理局【前編】（後書き）

半分ネタだわ・・・これひどいな
次こそ！！がんばる！！

ただ、今日は眠い。笑

時空管理局【後編】（前書き）

作者「戦闘描写割と楽しい!!」

ソラ「でも伝えにくい!」

作者「ソレこそ作者の力量が現れる。」

時空管理局【後編】

「なぜ、出ている！？アースラのセキュリティは1級物だぞ!？」

あ。

一瞬にしてばれた。逃走距離2歩。

「犯罪行為ということでもいいのか？」

「勘弁してください……………」

ここは素直に頭を下げるしかない。

こいつに頭下げるのは癪だけどな!!--いつか絶対勝負して勝ってやる……………!!

《さっすがソラさん。私にできないことを簡単にやる姿!そこに痺れる憧れるウウ!!--》

「ちょっと黙れよ!!--？」

はあ、とため息をつくクロノ

「とにかく来てくれ、艦長が待ってる」

おとなしくついていくことにした。

艦長がいるという部屋に入るとそこには和風を意識した部屋。

畳が敷いてあり、十分寛げそうなスペース。ついでにししおどしもあった。

「いらっしゃい。あなたがソラさん、でいいんですね」

「うん」

畳の上に座っていた女の人が声をかけてきた。

「言っちゃ悪いけどあの髪の色と顔立ちにこのセットはちょっとなあ．．．．．しかもアレ緑茶だよな？なんで砂糖．．．．．うんえ
見ているだけで甘い。」

「わたしはリンディ＝ハラオウン、このアースラ艦体の艦長、そしてそのクロノの母にも当たります」

「クロノとは大違いだな」

「なんだと!？」

いや、そこ反抗するのよ。俺母さんに似てても別にうれしくないよね?あれ?

「さて、本題に入りましょう」

顔が変わった。うん、こっからはまじめな話みたいだ。

「なのはさんたちにはすでにお話したのですが、ジュエルシードの一件はすべて管理局側で全権を取らせていただきます」

全権ってことはすべてってことだよな?

「ってことはこっちは身を引けてってこと?」

「本来ならばそうしてほしいところです。ジュエルシードはとても危険なロストロギア。しかし事が事でしたのでなのはさん達には『民間協力者』として協力していただくことになりました」

ってことはなのはは身を引かなかったのか。まあ、ユーノのこともあるのかな?

「あなたはどうしますか？聞く話によるとあなたは次元漂流者。私達であなたの星を探し、家に帰してあげることできます」

「なら、俺もその『ミンカンキョウリヨクシャ』で。なのはがやるなら俺もやるって」

なのはの手伝いをするって決めたからな！
それに、帰るときは3人一緒だ……

「なのはさんが言ったとおりでしたね……ソラさんはきつと手伝ってくれる、優しい人だから、と言っていましたから」

「あ、あはは……」

なのは、さすがにコレは恥ずかしいかも……
なんか、こっ、むずがゆいです……

「ではソラさんは『民間協力者』として協力をいただきます」

「おっ！」

《そこはぶつづに『はい』というべきですよ。いいかげん敬語を覚えてください》

「うっ……えっと、よろしくお願いします」

慣れないな……

あのあとリンディ……さんと話した後、なのは達家でと合流。

明日から捜査開始のこと。

まあ俺はなんか聞きたい事があるらしいからはじめは搜索から外れるんだけどね。

どっちにしても、うまくいったらリクとカイリに会えるかもしれない。

とくにリク……せつかく会ったのにどっかいつちゃったからな……また、会いたいな。

そつえばなのはは学校を事情で休みにしたらしい。もちろん桃子さんたちは知ってる。反対されると思ってたけど俺がついていくからいらしい。それでいいのかは謎。

アリサと喧嘩してるって聞いたけど……大丈夫なのかな？

なのは達は早速ジュエルシードの捕獲に行ったらしい。

映像見る限りすごい強そうだったんだけど……ユーノとなのははすごいや。

ユーノが足止めをしてなのはが砲撃。

なのはともかく、ユーノがあそこまでだとは思ってなかった。

さてさて

そのころ俺はというと

「さあ、君も構えるんだ」

なぜかトレーニングルームでクロノと対峙してる。

「なあ？何でこんなことになってるんだ？」

「君のその『キープレード』はミッドでも珍しい。むしろここ数年は出ていなかったんだ。そこでその力の危険性と実力を検証する、ということになってる」

キープレードってそこまですごかったんだな。

「安心しろ、ここで暴れても被害はない。それに手加減はしてやる。」

「なんだと！？本気ださせてやるからな！？」

「その意気だ。先に1撃入れたほうが勝ちだ。では、開始するぞ。エイミィ、たのむ」

『はいはい』

頭上から女の人の声が聞こえたと思っただけの背景が変わり砂地・
．．．．というより何も無い荒野に変わった。
すっげえな〜．．．．コレが偽者だもんな〜

「いいのか？そんなに呆けていて。もう始まっているぞ？」

声が聞こえた瞬間前方から白い魔力弾が飛んできた。

「うわー！！」

《Reflect Guard!!》

とっさにヴェインを出し魔力弾をはじき返した

飛んでいった魔力弾は前方の岩に当たった。
あれ偽者じゃないのか！？

「ここは立体ホログラム空間。偽者だが当たると痛いし傷にもなるぞ？」

そう、言いながら再び魔力弾を打ち込んでくるクロノ
はじき返しながら次の手を考える。魔力弾を跳ね返しクロノに当て
てみたがクロノハシールドで簡単に防いでしまった。

「さあ、そっちの番だ。お手並み拝見」

あ、あいつなめてんな……

「言われなくたって!! ヴィン行くぞ!!」

《ええ!》

クロノのそばに走りこむソラ。

そしてクロノに向かってキーブレードを振り下ろす。しかしその攻撃は簡単に防がれる。そして空いた手で魔力弾を打ってきた。

「うわ!」

とっさに転がって避けたがもう少しで当たるところだった。

「いまのを避けるのか」

まぐれだけどね。ま、あきらめるわけにも行かない、今度こそ!!

再び走りだすソラ。

そして再びクロノにキーブレードを振り下ろす。

「攻撃が単調だな」

受け止めようと杖でキープレードを受け止めようとするクロノ。
しかしコレこそがソラの狙い。

《Sonic Rave!》

瞬間ソラの姿が消え、クロノの背後に現れる。
そしてそのまま

「いつけええええ!!」

突進をした。

しかしクロノは空を飛ぶことでソレを避ける
あいつ後ろに目でもついてんの!?

「今のは驚いたな」

「ずるいぞ!降りて来い!!」

「断る!」

返事とともに落ちてくる魔力弾
さきほどの攻撃のようにはじき返してもいいがソラはそれをあえて
地面に着弾させた。

あたりが煙に覆われる。

そしてソラはその中からキープレードを放つ

《Strike Raid!!》

とっさのことに反応できなかったクロノは避けることなくソレをシールドで防ぐ。

次弾に備え杖を構えたが飛んできたのは真後ろ。

「くっ!!」

再びシールドを使って防ぐ。

飛んできた方向に魔力弾を打つが反応はない。そして再び真後ろから飛んでくるキープレードをはじいた。

このままでは埒が明かないと地面に降り立つクロノ。

「やっと降りてきたな？」

「いまのは危なかったよ。どうやったんだ？」

「走りながら投げた。」

単純明快な答え。しかし実際そうなのだから仕方がない。次はどうくる？

「さあ、次で終わりにしよう。もう十分だ」

それは

その言葉はソラを挑発させるには十分な言葉だった。

「ヴェイン！俺らもいくぞ！！あれ、やってみよう！！」

《了解！！ついにですね！！》

両者とも次で決めることを宣言。

地面の煙が晴れて両者ともぴたりと止まったままだ。

「ステインガレー！！」

先に動いたのはクロノ。

今までの砲撃を打ってくるが今回は数が尋常ではない。いわゆる弾幕。

「うわああ！！」

多すぎる弾幕に左右されるソラ。ひとつを跳ね返し、ひとつを避け、少しずつクロノに近づいている。

キーブレードを巧みに操り弾幕を切り裂きながら突き進む。
そしてクロノとの距離が近くなったとき

《Last Alcarram!》

ソラによる超連撃が始まった。

はじめのうちは避けていたクロノだがあまりにすばやい攻撃は避け
きれずシールドを張った。

しかしそんなシールドも連撃の前ではほぼ無意味。何太刀か入れら
れた後碎け散り、ソラが眼前に現れる。

そしてソラはキーブレードを振りあげた。

その状態を見る限りは誰が見てもソラの勝利だと言いつ張るだろう。
しかし

キーブレードを振り上げたソラの頭に魔力弾がヒットする。

ソラはその場に尻餅をついた。

『はい！クロノくんの勝ち』

「はっ？」

エイミイの声。あまりのことに声を上げるソラ。弾幕が出ている場所はすでに抜け、ソラの攻撃を阻害するものはなかったはずだ。

「なんで攻撃が来たんだ？あるとき周りに何もなかっただろ？」

周囲には何もなかった……よ、うん。

「それは僕がステインガレイを打った中にステインガースナイプ……つまり誘導弾を入れてたのさ」

「……なるほど」

ソラの完全な敗北。

「くっそお！悔しいな〜!!」

でも、楽しかったな。不謹慎だけどリクとやってるときを思い出した。

「いや、君もすごかったよ。とても初心者とは思えない動きだった。いつかは本気で手合わせしたい」

『あつれー！クロノ君がそんな事言うなんてめずらしい!』

「うっ、うるさい…！」

『手加減してるとはいえクロノ君と渡り合える人なんていないもんね〜』

照れているようだ。そしてクロノはソラに手を伸ばす。

ソラはクロノの手をとり起き上がった。

「つぎは勝つからな…！」

こうしてソラとクロノの模擬戦は幕を閉じた。

時空管理局【後編】（後書き）

うっしゃ！おわり！！

次は海上編だー！！

海上決戦(前書き)

なんかできびみよー・・・・・・・・もうちっどがんばりたかったなあ・・・

あ、無印もっそろそろ終わります

海上決戦

クロノとの模擬戦を終えてデッキに戻るソラ。すでになのはとユーノは戻ってきていたがなにやら深刻な顔でリンディと話をしている。

「なんかあったの？」

「あ、ソラさん！実は……………」

なのはの話によると、どうやらジュエルシード反応があった惑星で問題が発生したらしい。

ジュエルシードはあるのだがその場所は遺跡らしく、鍵でも掛けているのかその扉は全く持って動かない。なのはの砲撃で壁を打ち抜くこともできるのだが如何せん遺跡が古いため崩れ落ちてしまっただけは探すのが困難になってしまう。そこで

「で、ソラさんの『キープレード』のキープレードなら扉も開くのではないかと」

「なるほど……………うん！ーいーよ。任せて」

「ではお願いしましょう。30分後に出発ということをお願いしますね。行くのはなのはさん、ソラさん、ユーノさんの3人です」

「了解!!」「」

と、いうことで任務が決まった。

俺の初任務だ、気合入れていこう。失敗したら意味ないしね。

「そういえば、ソラさんさっきクロノ君と模擬戦してましたよね」

「あれ?見てたの?」

ソラはアースラの艦体内を3人で歩いていた。出発までは十分に時間あるし、とりあえず部屋に行こう、ということになったのだ。

「モニターですけどね。ソラさんって強いんですね。エイミーさんに聞いたんですけど、クロノ君をあの状態にまで押したのはソラさんだけみたいですよ?」

「え、そうなの!?!?.....あいつ余裕そうだったんだけどな.....」

今度は本気で、とかいってたし

「エイミーさんによるとですね、クロノ君の眉間に皺がよっていたから、だそうです」

「よくみてるんだな.....」

ちよつと異常な気も……

「あゝあゝ、私もクロノ君とやってみたかったなあ……全力全開、試してみたかったんだけど……」

この娘あぶない！！発想が危ない！！
なのはの全力使ったら艦体吹き飛ばよ！？たぶん！！

「なんか今失礼なこと考えませんでした？」

「んなことないって」

思考がばれた！？

とまあこんな感じで任務前はゆっくり過ごした。それはもう全く緊張感がない感じで。

「でっけえええ……」

問題の遺跡の前。そこには自分の何十倍もの高さがある扉。これって本当にあくのかな？

「よし！じゃ、ヴィン、行くぞ？」

《ええ、どうぞ》

そしてヴィンを扉に向けた。

ヴィンから光が飛び出て扉の鍵穴らしき部分に当たり『かちゅりと音がする。

すると勝手に扉が動き出した。

地面に響く重低音。

「この中、だよな？」

「ですよね」

見た感じ一直線だけど、一悶着ありそうだな……

「ユーノ、魔力反応は？」

「この先、だね。でもなにが起こるかわからない。慎重に行こう」

そして3人は遺跡に向かった。

- - - - side リク

・・・プレシアがいったとおりだ。ソラは一人じゃない。
ソラはこの遺跡に3人で入ってきた。つまりオトモダチと一緒に
わけだ。

やっぱり俺達にはもう興味が無いんだな。

俺はあいつが遊んでる間にカイリも見つけた。もう、あいつに劣る
ことなんか無い。

どんなことにだってもう負けない。例えソレがカイリの事でも、俺
のほうが先にいる。

負けない勝負だと分かってもこのまま勝つのはつまらない。私
も少し出向くでしょう。

- - - - side out

あのあと階段を上ったり下ったり曲がったり戻ったり・・・
そしたら少し広い広間に出た。

「なあユーノ、何も無くないか？・・・あれ？ユーノ？」

後ろを振り返るがそこにあるのは何も無い空間だけ。

「はぐれた？」

《《みたいですね、仕方ありません、二人を探すほうを先決しましよ
う》》

「だな」

仕方ないのでジュエルシードはあきらめて二人を探すことにした。
第一俺が見つけても封印できないしな。
そう思い、ソラはもと来た道を帰ろうとした。がそこに声を掛けら
れる

「お前が探してるのはその二人なのか？」

！！

「リク！？」

「キーブレードの勇者になったら遊びは終わりか？」

「なにいつて「俺はカイリを見つけた。お前はその間何をしていた
？」何をもって………二人を！！」

リク、どうしちゃったんだよ？

「お前はもう、俺達のことなんか興味ないんだろ？必死に石を集めて得意げになってるだけだ」

「そんなことないって！！俺だつて二人を！！！」

「どうだかな。俺はこれからカイリのところに行く。お前はここで遊んでればいいさ。がんばれ、キープレードの勇者様」

そういつてリクは消えてしまった。

そこに残されたのはソラ。そしてリクと入れ違うように現れるハートレス。

《ソラ、ハートレスです。構えなさい……ソラ！！》

ヴィンの声にはっとするソラ。

そうだ、俺はジュエルシードを集めなきゃ。なのはの手伝いをするって決めたんだ。

そして一気にハートレスを片付けた。

-. -. -. -. side リク

遺跡から闇の回廊を通りプレシアのもとに帰ってくるリク。

闇の回廊を使ったために力を使いすぎて苦しんでいる。

「闇の回廊を多用しないように言っておいたはずよ」

「うるさい！俺は、俺のやり方でやる！」

「まあ勝手になさい。心を闇に食われるんじゃないよ」

そういつてプレシアは去った。
俺は、俺は自分のやりたいようにやるだけだ。

- - - - - s i d e o u t

ハートレスを片付けたソラは来た道をそのまま折り返した。その後
ジュエルシードを発見したのはユーノに合流。後にアースラに
帰還した。

「ソラ、そうしたんだい？いつもの元気がないみたいだ」

ユーノが心配して聞いてくる。

ああ、みんなには心配掛けちゃいけないからな。

「いや、ちょっと疲れただけだよ」

「ならよかった。無理はしちゃだめだよ？」

「わかってるって！」

リクのごとは、しばらく置いておこうかな。

リクとあって1日。ソラたちはジュエルシードの探索に当たっていた
のだが結果はどれも空振り。ここまできて地上にないとなると

「なあユーノ、ここまで来てないとなるとき、あとはやっぱり」

「海中、だろうね」

海かぁ………いつもよりハードになるかな

そんなことを話していると………
噂をすれば影

アラート
緊急警報がなった。

海上に6つのジュエルシールド反応、それも全部半分暴走状態。

「なのは!?!」

「うん!?!」

急いでデッキに向かった。

デッキでモニターを見るとそこではフェイトが戦っていた。

「あの、私急いで現場に!!」

「そのひつようはない、ほうっておけばあの子は自滅する」

クロノ!? お前!!

「今のうちに捕獲の準備を!!」

局員は準備を始めたが……

「なのは、行きなよ!このままじゃフェイトが危ない!」

「でも……」

「行って!!」

ユーノ!!

「足止めは俺らがするから!心配すんなって!」

「ユーノ!頼む!!」

「了解!!あの子の結界内へ!転送!!」

うまくやったみたいだな……

「ユーノ、お前もいけつて。なのは一人じゃ危ない」

「でも……」

リクのこととかあるけど、俺に今できることは二人を支えることだから!!

「俺は飛べないからさ!!こっちは任せていけつて!!」

「すまない、助かった!!」

そうして自身を転送するユーノ
残ったのはソラのみ。

「えーっと……罰は、軽くお願いな!!」

口元をゆがませクロノたちに笑いかけた。

海上決戦（後書き）

リク黒い！！ソラ悪い子！！いやい子のつもりですけど。

あと話ぐらいでおわりです

失う力【前編】（前書き）

お待たせしました。

なんとかMYPCを買えたのでこれからはもっとハイペースになります！！

失う力【前編】

「なんてことを……！！公務執行妨害だぞ！？」

「待ちなさいクロノ！たしかに命令違反ですが状況が状況です。犯罪者といっても死人にするわけにはいきません」

「母さ……艦長！！しかし！！……わかりました」

「そしたら、クロノ執務官、事態の收拾にあなたも向かってください」

「……了解です」

クロノも転送ポートで現地に向かう。モニターではフェイト、アルフ、なのは、ユーノが暴走したジュエルシードの封印に努めていた。ユーノとアルフがバインドで動きを止め、なのはとフェイトが封印をする。二人の愛機デバイスから魔力が発射されジュエルシードを封印した。

もう、大丈夫だな。まだ着いてないけどクロノも行ったし、すぐに收拾はつくと思う。

モニターを見て安堵するソラにリンディから声がかかった

「ソラさん、貴方がやったことは命令違反。状況が状況とはいえ命

令違反には罰を課さなければなりません。時には心を鬼にしなければならぬこともあるんです。残酷に見えるかも知れないけど、これが現実」

当たり前のことだった。任務はこなさなければならぬ。いくら知り合い、友人のためといえど仕事に私情を挟んではいけない。

「私たちはあなたたちを預かっている身ですから、危険なことはさせたくありません。これからは絶対に……」

言葉を続けようとしたところに緊急警報が鳴る。

「な、何!?!」

「次元干渉!?! 別次元から本艦および戦闘区域に向け次元攻撃きます!?!……あと6秒!?!」

6秒!?! なのはたち、無事だといいますが……

そう、心配しつつ衝撃に備える。そしてすぐにその攻撃は訪れた

「うわわ!?!」

艦体が大きく揺れた。モニターが回復したところにはすでに戦闘は終

わりフェイトを抱えたアルフは逃走を図ろうとしていた。捕捉しようとしたが、さっきの攻撃でシステムはダウン。復旧したころにはアフエイトたちはすでに消えていた。モニターに移っているのはなのは、ユーノ、クロノのみ。

結局回収できたジュエルシードはクロノが確保した3つのみにとどまった。

目の前にいるのは反省してうなだれるのはとユーノ。俺も参加しないといけないんだけどさっき聞いたから俺はリンディさんの横。とは言っても迫力がすごい。

「……本来は厳罰に処すところですが、結果としていくつか得る事があります。よって今回は不問とします。しかし次はありませんよ」

「はい」

「すみませんでした」

顔を少し明るくするも反省する二人。

「問題はこれからね……」

そしてそのまま会議が始まった。

わかったこと。まず一つは今回の事件の主犯はプレシアⅡテストロツサということ。プレシアⅡテストロツサはフェイトの母に当たる人物で、この人物がフェイトを動かしているらしい。しかしプレシアⅡテストロツサの一人娘はすでに事故で亡くなっているらしい。このことについてはまだ謎が多いので詳しいことは分からなかった。もう一つ。これはソラの心を大きくえぐることとなる。プレシアⅡテストロツサに協力している、と思われる人物がいるということ。その人物はばれないようなところでジュエルシードの手引きをしていたらしい。

そしてその人物がモニターに写されたとき、ソラは我が目を疑った。

「リク……!？」

「何者が知っているのですか？」

思わず名前をつぶやいたソラを見逃すことなく、リンディが詰め寄った。

「あいつは、俺の親友で、一緒に島から飛ばされたんだ……。この間の遺跡で会ったけどどこにいるかは教えてくれなかった」

「なるほど、彼も次元漂流者。流れ着いた先がプレシアⅡテストロツサの元だったということですか……。今後の方針はプレシアⅡテストロツサを中心に調査、少年は見つけ次第保護します。ソラさんは……。少し休んだほうがよさそうね。それとなのはさん、あなたは一

度帰宅しなさい。学校も長く休むわけには行かないし、なによりご家族にあまり心配を掛けさせるわけには行きません」

リンディは今後を発表したがソラの耳には入っていなかった。

何のためかは分からないがプレシアはテストロツサは悪事を働いている。そのことは明確だ。それにリクが加担していた。リクの所在が分かり、喜ぶところのだが立場が違うため自分はリクと対峙しなければならなくなってしまった。リクと、親友と戦うのは極力避けたい。そのためにはどうすればいいか、そう考えるだけでソラの頭はいつぱいいつぱいだった。それに見かねたリンディはなのはとユーノ、それにソラに向けて一時帰宅命令を出した。

ソラに考えさせる時間を与えるのもそうだが、どちらにせよフェイトとプレシアは魔力を放出しているので大きな動きはないだろう、という考えもあったので丁度よかったともいえる。

命令を言い渡しリンディたち局員はその場を去り、部屋はソラ、なのは、ユーノの三人になった。しかしそこにはなんともいえない重い空気が漂っていた。

- - - - - side リク

広間に鞭の音が響き、時折悲鳴が聞こえる。

プレシアがフェイトに向け鞭を打ちつける音だ。リクはそれを端か

ら見ていた。

他人の事情に首を突っ込む気はないがさすがに年下の子を傷められる姿はみていて居た堪れない。嫌気が差してくる。

「いい加減にしたらどうだ？あんたの体ももう長くはないんだろ？そう動かすと死期が近くなるぜ」

すでに事切れているフェイトを部屋に放置し、リクがいる部屋にやってきたプレシア。

「なんだ、見ていたの。そうね、もう、残された時間は少ない。それでも私にはやることがあるのよ」

「ふん、それが鞭で調教することか？狂ってるな」

「なんともいいなさい……もうすぐあの子の使い間が来るでしょうからそいつを追い払っておいて。生死は問わないわ」

そういつてプレシアは部屋の奥に入っていった。

後始末も丸投げか……

プレシアに対し心中で悪態をつきながら使い魔、アルフを待つリク。すると1分も経たないうちに部屋の扉が吹き飛んだ。

「手荒い入場だな」

「プレシアはどこに行った！」

目は怒りに満ちており、今にも襲い掛からんような希薄だ。しかしそのようなことで怯むリクではない。

「プレシアは体を休めている。お前の相手は俺がやろう」

そうしてソウルイーターを構えた。

「あんた誰だ？ここにはプレシアしかいないはずだろ！？」

「そうか、お前たちにちゃんと会うのはこれが初めてか。俺はプレシアに言われてお前たちを手伝っていたんだがな」

「どついうことだ！！」

「気づかないのか？なぜお前たちがいるそばでジュエルシードは発動した？そんなの簡単だ。俺がおいたからだ」

「そんなわけ……！！！」

「お前たちはこれからジュエルシードを探し続ける。それが俺とプレシアの契約だ」

「そんな事いうならお前が集めたらいいだろ！あの子は、フェイトはもう限界なんだよ！ジュエルシードを必死に探して、必死に集めたのにプレシアはフェイトを痛めつけるだけだ！そんなやつのために、これ以上フェイトを無茶させない！！傷つくフェイトなんかもう見たくない！！！」

「なら、お前はここで消える」

そうしてリクはアルフに飛び掛った。アルフはそれを受け止めリクにカウンターを仕掛ける。しかしその瞬間にリクの体から闇が吹き出てきてアルフを吹き飛ばした

「な……今のは!？」

「驚いたな。ここまですごいものなのか」

「ふざ、けんな!！」

再びリクに飛び掛るアルフ。リクはそれをよけることなく正面からそれを手で受け止め、もう片方の手でソウルイーターを一閃した。崩れ落ちるアルフ。

「お前はもう用済みだ。あとはあの人形だけでも十分探せる、闇に堕ちろ」

リクはアルフに向け手をかざす。手には闇が集まっていき、遠慮することなくアルフに向けてそれを発射した。

- - - side out

- - - side アルフ

目の前の男に体を斬られ、倒れ伏しているアルフ。
そんな自分に男は追い討ちをかけるように近づき、手をかざした。

ああ、自分はやられるんだな

そう、思ったときには視界は黒くなっていた。
薄れていく意識の中でなんとか転移魔法を発動させる

(ごめん、フェイト少しだけ待ってて……)

アルフが意識を飛ばししばらくして転移魔法が発動した。

- - - side out

「はぁ……」

休憩室でため息を着くソラ。家に帰った後リンディが真っ赤なうそ
というごまかしを家族にして、いつもの日常にもどった。
なのははすでに学校に行っていて、ソラも店のほうに顔を出した。
久しぶりに店に入ると常連の人に声をかけてもらったりなどという
いいこともあったのだが、どうもソラの顔色は優れなかった。
リクのことか頭に引っかけり、いつもの笑顔も2割暗い。

リクはなぜ向こう側にいるのか？プレシアの元にいることからすでに管理局のことは知っているだろう。ならば自分のやっていることが法に触れるレベルだということも分かっているはずだ。

「はあ………」

ため息を付くソラ。

とはいっても悩んでも仕方がない。管理局の方から連絡があるまで動くことはできないのだ。

「はあ………」

再びため息を付くソラ。

そんなソラになのはから念話が届いた。

「ソラさん！ちょっときてくださいー！」

「どしたの？」

「フェイトちゃんの使い魔……アルフさんがいたんです。すごい怪我して！ー！」

どうやらただ事ではないようだ。

幸い今は休憩時間。あまり時間は取れないが士郎に言えば30分ぐらいなら伸ばしてくれるだろう

「今行く!」

そうしてソラはなのはのもとに向かった。

失う力【前編】（後書き）

物語……進ませぬ。

やっぱりキーブレードを取られるシーンははずせないっすよね。って
か名台詞いえないしww

つきあたりで……いえるはず……！

失う力 【中編】（前書き）

長くなってしまったよww
なんかわるいところあったら感想とかで言ってくださいね

失う力 【中編】

念話をしながらなんとかなのはのもとについたソラ。

いる場所はアリサの家だ。アリサの家にいるところからアリサとは仲直りできたようだった。

なのはが休んでいたときにノートを取ってくれていたのはアリサだったとか。なんだかんだでアリサなのはが心配だったようだ。

さて、話を戻すと、アリサの家の少し大きな折には犬体型のアルフがいた。どうも弱っているようであったりしていた。

なのははアリサと一緒にいなければならぬ状況だったのでアルフのほうはソラとユーノが対応していた。

事情を聞くとフェイトに乱暴をするプレシアに怒りを覚えたアルフはプレシアの元へフェイトの開放を要求しに言ったらしい。しかしそこにプレシアはおらず、いたのは銀髪の少年。プレシアの元に行くことを阻止し、アルフをも殺す勢いで襲い掛かったという。

「……………と、いうわけさ。あいつは危険だ。人じゃない何かを持ってる」

「……………なるほど。少年の目的は不明だけど、危険ってことは分かった」

アルフにユーノが答える。ソラはそんな様子を見ながら思考を張り巡らせていた。

おそらく、その少年とはリクのことだろう。銀髪なんて目立つ人はそういないし、なによりプレシアにつながっているというのが動かぬ証拠となった。

このときの会話は管理局にもリアルタイムで送られている。『発見しだい保護』となっていたリクの対応は変わり、『嚴重注意、反応によつては攻撃の許可』となった。またプレシアも『捕縛』となった。そのことを聞いてソラはひとつの決意をした。

「リンディさん、リクのところには俺を向かわせてください」

「…本気なのね？今度は、わがままはできませんよ？」

「分かってる。でも、友達の、親友の道を正すのも友達の役目だと思っ」

「…分かりました。ならばリクさんのことはあなたに任せましょっ」

.....

なのははフェイトとの最終決戦をするらしい。
決戦は明日。海鳴臨海公園だ。

戦闘が始まった。

なのはとフェイトは互いのジュエルシードをかけての全力の勝負をするらしい。

客観的に見ると明らかにフェイトのほうが優勢だった。

「なのは！がんばれ！！」

ユーノはなのはに応援を送っていた。

一方ソラもなのはに応援を心で送りつつ、リクが現れるのを待っていた。

アルフの話を書く限り、リクもジュエルシードを求めているということ。

つまり、もしなのはがフェイトに勝つのであれば必ずリクも現れるということだ。

.....side なのは

やっぱり、フェイトちゃん強い！！

フェイトが打つ魔力弾にアクセルシューターで対応しつつ追撃を打つ。

しかしそれすらも防がれてしまう。不意打ちで放った一撃も止められてしまい、むしろ一撃入れられてしまった。

「はあ……はあ……」

息を整えるなのは。

互いに牽制をしていたがついにフェイトが動いた。

なのはの周りにフェイトの魔方陣が多々出現。それに驚いたなのははフェイトがはなったバインドに対応できずに四肢をとらわれてしまった。

「なのは！今すぐサポートを！！！」

ユーノ君がそう、叫んでくれた。でも、コレは私とフェイトちゃん
の最初で最後の全力勝負。だれにも邪魔してほしくない。

「だめ！！！！アルフさんもユーノ君も手を出さないで！！！」

「でも、フェイトのそれはほんとにやばいんだよ！！！」

「平気！！！！」

なのははそう叫んだが、実際はそうでもない。今にも泣きそうだし、
叫びたい。

周囲の空気がピリピリしているし、フェイトも全力の一撃を入れる
ために詠唱をしている。

勝てるタイミングは、この後！これは絶対フェイトちゃんは全力だから隙はその後に出来る！！

フェイトの詠唱が終わったとき、周囲の魔力弾が一気に襲ってきた。10や20の話ではない。なのはは衝撃に備えた。

- - - side フェイト

直撃……！！

肩で息をしながら目先を見た。煙幕が晴れた後、見えるのは打ちのめされぼろぼろになったなのははのほすだつた。

「打ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

！！？

自分が打ったのはすべてあたたつた筈。1発の威力だけでも普通の魔導師ならばすでに事切れているはずだ。それを100ほど打ったのに……

それをすべて防ぎきつた！？
しかもカウンター！？

すでに魔力を杖の先に集めているのはから砲撃が発射された。すでに魔力に限界が来ていたフェイトはなんとかそれを防ぐ。が、すでにバリアジャケットもぼろぼろ。飛んでいるのもやっとだ

「受けてみて！デイバインバスターのバリエーション！」

杖から今までに見たことがない大きさの魔方陣。周囲にある魔力を吸収し、かつてないほどの光を生んだ。

それを見てフェイトは打たせまいと動こうとするが

「バインド!？」

いつのまに!？

四肢はバインドで縛られていた。

「コレが私の全力全開!!!スターライトオオ!!!ブレイカアアア!!!」

目の前に桜色の光が溢れ、私の意識は完全に途絶えた。

-. -. -. -. side ソラ

事切れたフェイトを救出した他なのはフェイトとともに飛行していた。その周りにはシュエルシード。

「クロノ」

「ああ、もうすぐくるだろう。構えておけよ」

これはあくまで予想だがもうすぐプレシア側からジュエルシードを奪還しに誰か来るだろう。

フェイトの様子はあちら側も見ているだろうし、すべて集まっているジュエルシードとるに絶好のチャンスだ。

すると案の定誰かがきた。

空をうねらせながら落ちる稲妻。それはフェイトに直撃し、周囲にあったジュエルシードをすべて持っていった。

アースラ内では指示が飛んでいた。プレシアの位置をつかみ、突撃しようとしている。ソラの意志を汲んでくれて少し突撃は遅らせてもらっているが。

そして公園には

「リク……」

「ソラか」

黒い服を着たリクが。
しばらくにらみ合いが続いた後

「なんで、こんなことするんだ？なんでフェイトを傷つけるんだ？」
ソラが口を開いた

「……お前には関係ない」

「リクがやってることは間違ってるって！！他人を傷つけるなんていいことじゃない！！！」

「それが、カイリのためでもか？」

「それは……カイリだって、そんな方法で助けられてもうれしくな
いって」

「ならどうすればいい！？できることはコレだけなんだぞ！！！」

「みんなで考えれば何か分かるって！！俺がいるところ……アースラ
にはすごい人がたくさんいるから！！何か分かるかもしれないだろ
！！！」

「……確証はない」

「それならプレシアだってないだろ!!」

「ジュエルシードは、願いをかなえる石だ。それで十分だろ？少し少ないが今回でジュエルシードは揃った。これで計画が実行できる。だからソラ、もう俺に付きまとうな」

そういい、リクは雲の切れ間に去っていった。

「リンディさん、失敗です」

「仕方ないわ。悪いけど、突撃させてもらっわ」

そうして念話を切り、アースラへ転送された。

- - - - - side リク

くそ！場所がばれたか…管理局にの人間が入ってきた。場所がばれたならじきにソラもくるだろう。

「プレシア、場所がばれた。どうする」

「あなたは、……ゴフツ……局員を蹴散らしなさい」

すでにプレシアは限界のようだ。

「分かった。お前は休んでろ」

そういつて時の庭園の入り口に向かった

失う力 【中編】（後書き）

文化祭で遅れましたが何とか投下。
感想待ってますww

失う力【後編】（前書き）

遅れました！！試験前でしてなかなかかけません（汗）
ついに物語も核心に！！

感想、あつたら待ってます

失う力【後編】

アースラに戻ったソラ達はプレシアの出城、時の庭園に突入した局員の様子を見ていた。

入り口にはリクが立ちふさがっていて局員達と戦闘をしていた。

明らかにやりすぎだった。

時の庭園に入っていく局員達を剣で切り伏せ、吹き飛ばし、倒れた局員に剣を突き立てる。

殺してはいないだろうが……

「ひどい……」

口元を押さえてつぶやくエイミィ。

リクの間を突いて侵入を試みる局員達もいたがリクから吹き出した闇によって吹き飛ばされる。誰一人奥に進入することはできなかった。

そしてエイミィから衝撃の事実を聞かされる。

「……………突撃部隊、全滅です……」

「そんな……!!」

圧倒的な力に押された管理局。第二部隊は準備できているが、先ほどの映像を見てしまっているので士気は低迷。強制送還された局員達を見て泣き出すものもいる。そんなところに一つの声が上がった。

「俺が、俺が行く。俺だけ送って」

先ほどからリクの姿を静観していたソラだった。その顔は怒っているようにも見え、悲しんでいるようにも見えた。

「しかし……一人では……」

「いいから!」

声を荒げるソラ。

「……分かりました。20分です。20分経ったらクロノを送ります」

そうしてソラは時の庭園に送り込まれた。

- - - - - s i d e リク

雑魚が……!!

管理局員を蹴散らしながら舌打ちを打つ。

こう、人数が多いと闇の力を使わざる得なくなってくる。

アルフと戦ったときに初めて闇の力を使い、以後少しずつ使っていたが体に違和感を覚えていた。自分で動かしている気にならなかった。誰かに操られているような感じだ。

余計なことを考えているうちに同員達が入ろうとしていた。

「クソツ!!」

やむを得ず闇の力を解放する。

服は白を基調としたものから黒い服に変わり、体から闇がにじみ出していた。

闇を操り同員達に闇をぶつけた。

その瞬間に体に違和感が現れた。意識が浮くような、何かに引っぱられるような感覚。いつもより強くなっている。

負け、るか!!!

意地で意識を取り戻し、残っていた同員を片付けた。

すぐに消えたところから相手側は様子を見ているのだろう。となると、次来るのはソラか……

「プレシアの言ったことを試してみるか……」

不適に笑い、入り口から奥の部屋に入ってしまった。

-. -. -. -. side out

「つとと…」

時の庭園入り口に降り立ったソラ。

そこにはすでにリクはおらず、冷たい空気が漂っていた。

「とにかく、中に行って見るか………」

そういつて中に進んでいった。

「ヴィン、準備大丈夫か？」

《もちろんです。いつでもいけます》

その声に覇気はない。

ソラは建物の中に進みながらいろいろなことを考えていた。

・どうしてリクと一緒にいられないんだろう・

・どうしてリクと戦ってるんだろう・

・どうしてリクと戦わなければならぬんだろう・

・どうして俺はリクのためになれないんだろう・

自分を責める言葉が心の中で渦巻いていた。

思えば始まりは島から外に出ようって事だった。それがいまではコシだ。仲良くみんな楽しんでたかった。みんなが無事に帰りたかった。なのに今は帰るところか周りにだれもいない。俺は何が言いなかったんだろう。何をすればよかったんだろう？

そのようなことを考えてるうちに少し大きめなフロアにたどり着いた。

その中心には待ち構えるように立つリクがいた。

「リク……」

「ソラか。遅かったな。待ってたんだ、お前を。局員達じゃ物足りなくてな」

互いをにらみ合う時間が続いた。

気まずい空気が流れる。そんな静寂を破ったのはリクだった。

「なあ、ソラ。俺達はいつでも何かを取り合ってた。お前は俺のものを、俺は俺のものを」

「リク ……?」

いやな雰囲気だ。

体をじわりとつめたい汗が流れ落ちる。これから何かが起きる。いわゆる既視感、といったものだ。

「でも、もう終わりにしようぜ？勇者は2人も要らないんだ」

勇者？どういうことだ？

「何が言いたいんだ、リク」

リクはこっちを向くと口角を少し上げてこういった。

「なあ、ソラ。俺より劣ってるお前が何で特別なんだ？何でお前が選ばれた？」

「何言ってる…！？」

「お前は何で笑ってられる？」

リクの言葉を理解できないソラ。

「だから、証明するんだ。お前が特別なんかじゃないってことを。

答えは…キープレードが答えてくれる…！」

リクがそういつて手を前に出すとソラが持っていたキープレードが大きく揺れだした。

「ヴィン！？」

しかし帰ってきたのはヴィンとは違う無機質な機械音

《マスター承認。マスター：リク》

「えっ!!?」

揺れが大きくなりソラの手にあったキープレードがリクの手に移った。

「プレシアの言ったとおりか…… ……お前がコレを持つ資格はない。心が強い真の者、世界を変えることができる本当の勇者だけがキープレードを使いこなせる」

「それが、お前だって言うのか!?俺がやってきたことは……俺は今までそのキープレードで……ヴィンと一緒に戦って……!」

そんなソラの言葉をリクは鼻で笑うようにして

「俺に会うまでの暇つぶしだったのさ。ソラ、お前の出番はもうない。このおもちゃで勇者ごっこがお似合いだ」

皮肉をいい、あっさりソラを切り捨てた。リクは笑いながら部屋の奥に入ってしまった。

ソラは『なんで、気づかなかった!』と後悔をしていた。

こっちの世界ではじめてリクとあったとき、自分は何をした?

自分にはなのはや、ユーノ、士郎や桃子だった。それに自分が特別だとキープレードまで得意げに扱って。リクの言ったとおり、

リクとカイリを探しているようで探していなかったのかもしれない。心のどこかで『いつか見つければいいや』と思っていた部分があったかもしれない。

しかし、リクはどうだろう？知らない場所で、放り出されて、彷徨って、全力でソラとカイリを探して。拳句の果てにやっとなり合いに会えたたと思えば、今の生活に満足したように笑っていて。もし自分がリクだったらきつと耐えられなかっただろう。

ソラは呆然と地面に手をついて、自分の行動を後悔していた。

失う力【後編】（後書き）

短い次が決まっている
ってことですね！が、試験が先（泣

つながる心【前編】（前書き）

うん、短いです。

今回の主役はリク。笑

ああ、もうすぐ終わるなあ…

つながる心【前編】

- - - - - side クロノ

「映像の確認を」

隣で母さ…艦長が指揮をとっている。

ソラが時の庭園に入ってから10分。戦闘が起こると思っていたがなにやら2人で話し込んでいるようだった。

「何をしているのでしょうか？ソラがリクと呼ぶ少年はソラに反発すると思っていましたか……」

「そうねえ…まあここはソラさんを信じましょう」

僕のリクと呼ばれる少年の印象は、好戦的、だ。局員達の戦闘データを見る限りはかなりの手練。もしかしたら僕一人ではかなわないかもしれない。なるべくなら戦いたくない。しかしそんな願いは天には届かなかった。

その映像を見たとき僕は我が目を疑った。

「キーブレードを……奪つ……た？」

ありえない!!

本局からの情報、さらにフェレットもどきの情報、から『キーブレードは使い手を選ぶ』ということが分かっている。そのはずなのにリクと呼ばれる少年はその事実を無視するかのように、キーブレードを扱う。それも自身のものでなく、他人のものを、だ。

まさか、この少年もキーブレードを使えるというのか！？
とにかくまずい！！

「母さ…艦長！！」

「急いでソラさんの送還を！！」

しかしその命令は遂行されなかった。

「送還…不可能！？周囲に異常な魔力反応！！送還できません！！
こちらからの転送も入り口までしか……」

エイミイの声が艦内響いた。ソラの救出はできないという。

「そんな……！！クロノ、急いでソラさんのところに！！今彼は
少年に抗う術を持っていません！！」

「はい！」

今の状態のソラはとても無力だ。何の力もないただの少年。そんな彼がリクに敵うだろうか？否、敵わないだろう。

そしてクロノはソラを救出すべく時の庭園に跳んだ。

- - - side out

.....

ソラは自分の無力さを嘆いた。
親友一人を闇から救うことができなかった。それどころかもっとそこに落としてしまったみたいだ。

俺、何しにここに来たんだっけ？

「ソラ！！無事か！！」

「あ、クロノ」

名前を呼ばれて振り返ると、そこにはクロノがいた。きっと映像を見ていて駆けつけてくれたのだろう。

「クロノ、じゃない！！無事なんだな！？なら1度ここを出るぞ！
！君をここにおいておくわけには行かない」

「え？でも、リクが……」

「リクって…お前あいつに何されたか忘れたのか！？もう少しで危ないところだったんだぞ？……彼の説得は失敗だ。彼は危険だ。君がなんと言おうと彼は逮捕させてもらっ」

説得……ああ、そうだ、俺、リクを説得しに、助けに来たんだ。

「ごめん、クロノ。俺、大切な人に、リクに、もう一回会わなきゃ。リクを救わなきゃいけないんだ」

「何言ってるんだ！！そんなこと許されるわけ…」

クロノは『ないだろ！！』と続けようとした。しかしあまりにも真剣な目をするソラにクロノは何かを感じてしまった。

クロノとしても、リクを捕まえるのは心が痛む。自分と同年代のものに手を下すのはとてもやりにくい。

しかしそれは立场上許されることではなく、今はすぐにでもその場を離れるべきだと分かっていた。

頭では分かっていた、何をすべきか。しかし、クロノの心はそうさせてくれなかった。ソラのことをどこかで信じた。ソラなら今度こそリクを救えるのではないかと。

「分かった。先に進もう。ただ、こっからは僕も同行だ。いくら話しにいくだけだといってもここを一人で、ましてや何の力もなく歩

くのは危険すぎる」

そうして二人はリクが進んでいった先に進んでいった。

- - - side リク

ソラからキープレードを奪ったリクは廊下を歩いていった。

ソラにしかない「特別」を自分が持つことができうれしかった。

これで自分が遅れをとることなんてなにもない、これでソラに負けることなんてない。

そう、考えるだけで飛び上がるほどうれしかった。

プレシアの言ったとおりだった。心が強いものが手にすることができるキープレード。いつだって負けてる気がしていたソラの心より自分のほうが強いと証明できた。

しかし、ソラからキープレードを奪ったリクはすこし妙な気分だった。

たしかにうれしい。飛び上がるほどにうれしい。

しかし、それと同時に罪悪感に襲われていた。実は自分ほとんどもないことをしてしまったのではないかと。

今思えばいつも自分の中にはソラがいた気がした。

しかし、たった今、自分はそのつながりを断ち切ってしまったのではないか？

ソラという存在を切り捨ててしまったのではないか？

たしかに、ソラに苛立っていた。何の苦勞もなく、笑いながら日々をすごして、久しぶりに会ったと思えば、自分のことはそこまで気にかけていなかったかのような素振り。

しかし今考えれば自分はその態度に助けられていたのではないのだろうか？

この世界に入って、一人になったときにはじめて呼んだ名前は『ソラ』

ソラにあった後、『ソラを越えてやる』と考え始めた。そのおかげで今の自分がある。

ソラがいなければ今頃自分は崩壊していたのかもしれない。

自分が自分でいられたのは『ソラ』のおかげなのではないか？

歩くと歩くほど、『ソラ』という人間の大きさに気づいていく。

しかしそんなはずはない、と自分に言い聞かせてリクはその場を離れた。

その行動が自分を苦しめる、ということには気づいていない。

-. -. side out .

つながる心【前編】（後書き）

短くてすみません…

まあ試験前つてのもあってコレも2、30分作品なんでクオリティの低さはあしからず。

つてかフエイトの過去どうしよう…

感想待って増すたい。悪いところの指摘を特に！！

つながる心【後編】(前書き)

名台詞!!--すっきじ!--!!

つながる心【後編】

ソラとクロノは二人で目に続く道を進んでいた。互いに言葉を発することははない。だが、気まずいということもない。むしろこの沈黙と、響く足音だけというのがちょうどいい。ソラには考える時間ができて、クロノにも精神的余裕ができる。

特にソラにはいろいろなことがありすぎた。島の崩壊から始まり、なのは達との出会い、リクとの再開や、対立。見失ってしまった自分の『道』。それを考える時間ができた。考えることが尽きるようなことはなかったが、そのなかでソラは一つの『道』を見つけていた。

どんなことがあっても、みんなで帰る。

いろいろなことを考えた末に見つかった考え。どんなに仲がこじれようと、帰る場所は一緒。結局考えは原点に戻った。

その『道』を達成するには、リクと会わなければいけない。

その『道』に向けてソラは走る。

- - - - side なのは

「ソラさん、大丈夫かな……?」

現在アースラ艦内

私のスターライトブレイカーを諸に食らってしまい、意識を失ったフェイトちゃんを艦内の一室に寝かせてから一時的にブリッジに戻っている。

私は戦闘をしていて知らなかったけど、ソラさんは単身時の庭園に行ってプレシア「テストロツサの協力人、『リク』さんを追っているらしい。さらに問題が起きたのでクロノ君も行ったとか。合流した二人はそのまま『リク』さんの捜索をしているそうだ。

「大丈夫、ソラを信じよう」

ユーノくんもそう言ってくれる。

「……………うん！そうだよね！！信じなきゃ！」

距離が離れてても、想いは届くはずだから。

私はソラさんの無事を信じて、再びフェイトちゃんのもとに戻った。

- - - - side out

道を進み、現れたのは大きな扉。

ここへ来るまでの間幾度かハートレスや傀儡兵とも遭遇したがリクと遭遇してはいない。いるとすればこの先だ。

「ソラ、準備は良いか？」

「おう」

「君は今無力なんだ。僕のそばから離れるなよ？」

「わかってるって」

そして二人は互いに頷きあい目の前の扉を押した。

ゴゴゴゴゴ、と地響きが響き渡る。開いた視界の先には誰もいない部屋。

「どこか？」

「誰もいない……！！クロノ！上！！」

「なに！？」

部屋の内部に入ると突然上からハートレスの大群が降って来た。

「畏だ！！ソラ！逃げろ！！このままでは二人ともやられてしまう

！！！！」

「でもクロノが!!」

「いいから行け!すぐにおいつく!!」

ソラは一度だけクロノを振り返ると、目の前にある通路へ走った。

- - - - side クロノ

くそ!数が多い。

「はあ!!」

目の前にいるハートレスに向け魔力弾を放つ。
倒しても倒してもその数は減ることを知らず、むしろ増えているようにも見える。

周りの敵を一掃して一度周りを見渡す。
何匹かがソラの向かった通路に向かっている。

「行か...せるか!!」

すでに展開している魔力弾の数をさらに増やしハートレスを殲滅にかかると決める。

「はぁ……はぁ……」

くそ……

倒した先からさらに増えるハートレス。

……ソラ、すまないが追いつくのは後になりそうだ。

奥歯をかみ締め、敵をにらみつけた。

- - - side out

置いてきてしまったクロノを背に走るソラ。
続いていた道もここで終わりのようだ。

そしてそこで待ち構えていたのも

「リク」

親友の姿。

「なぜ帰らなかった」

「俺は、リクを助けに来たんだ」

「助ける？お前が？」

まるでソラを挑発すかのような顔
しかしその顔も一瞬で変わり今度は本気の顔だ。

「闇の力で消されたいのか？」

「俺の体は、消されるかもしれない。でも、心は消えない。俺の心は、仲間と、みんなとつながってるんだ！」

リクはその言葉を鼻で笑い

「それなら、俺がためしてやる！」

ソラに手をかざし、闇の力を放った。

ソラは身構えた。今手にキープレードはない。つまり防ぐ術がない。しかしソラは恐れてはいなかった。別に根拠があるわけではないが大丈夫な気がしていた。

《Protection!!》

ソラの目の前に丸い魔方陣が展開された。

別にソラが使ったわけではない。クロノもない。ましてやリクが使うわけもない。

ならば誰が使ったのか？残っているのは、そう

「ヴェイン……」

現在はリクが使っているキープレード、ヴェインクルムだ。

「こいつ……マスターにはむかうのか……！」

リクが声を荒げる。

しかしキープレードは黙ったまま。リクの手に静かにたたずんでいる。

ソラは小さな声で「ありがとう」「とつぶやき戦うときのようによろこびを落とした。

「武器も持たず戦う気か？さっきには驚いたがキープレードは俺のものだぞ？」

「俺の武器はキープレードじゃない。本当の武器は　　心なんだ」

「心？そんなもろいもの、なんの役に立つ！」

リクはソラの言葉を鼻で笑う。
しかしソラは続ける。

「ああ、もろいかもな！ ……でも、俺の心はなのはと、ユーノと、クロノと矛盾してるかもしれないけどヴィンとだってつながってる！！みんなとつながってるんだ。大切な人と、大切なともだち、誰かが俺のことを思っていてくれたら、たった一人でも俺のことを忘れないでいてくれたら 俺の心は消えない！！！」

そしてソラはリクの目を見て、言い放つ。

「つながる心が、俺の力だ！！！」

ソラの言葉に呼応するようにリクのキープレードが反応する。
ソラのキープレードがリクに移ったときのように、リクのキープレードがソラの手に移る。

《お久しぶりですね、ソラ》

「さっきは助かったよ」

《はて？なんのことですかね？》

再会を喜ぶソラとヴィン。

そんな二人を見てリクは一瞬戸惑ったが再びソラの方を向き、自身の剣、ソウルイーターを構え、

無言でソラに襲い掛かった。

つながる心【後編】（後書き）

いやあ勉強の合間を縫うんじゃないやなくて、コレの合間を縫うように勉強してる（笑）
クロノとの友情大事。

布陣（前書き）

うん…微妙

だれかアドバイスクれませんか？こうしたほうがいいのか。

メッセ待ってますね

あと前話の最後だけ変更しました。すみません

布陣

「はっ！！」

「くっ！！」

金属同士がぶつかる音が何度も響く。ソラとリクが互いに打ち合っていた。第三者から見ればソラが優勢だ。

「なあ、ヴィン、体って、こんなに、軽かったっけ！？」

打ち合いの途中にヴィンに話しかける。その声は若干楽しそうでもあり、とても戦闘中とはいえないものだった。

《さあ、それはどうでしょうね？》

この最中に打ち合いは続く。

「コレで終わりだっ！！」

ソラがリクの剣をはじいた。
ソウルイーターは空へ舞い上がり、リクから離れた地面に突き刺さった。

勝負に負けたリクの服装は黒いものからいつもの服装に戻り、肩で息をしている。一回だけソラをにらむと、走って去ってしまった。

「あ、リク!!」

そんな声もリクには届かずすでに視界から消えてしまった。

《これからどうしましょうか?》

「ん〜、一旦アースラに戻って……」

《どうやって戻るんですか? 転移魔法とかは使えませんし》

「それはクロノに頼んで……って、あ!! クロノ!!」

リクのことですっかりクロノのことを忘れていたソラ。
急いで踵を返すとクロノの元へ急行した。

「クロノ大丈夫……って、うわぁ……」

「うわぁって……！出会い頭にひどいな君は……！！」

クロノの元に急いだソラはクロノの姿を見た瞬間思わずつぶやいた。いや、つぶやかざる得なかった。クロノは黒いバリアジャケットにいくつもの穴を開け、上半身を肌蹴させている。

「何が……いや、ナニがあつたの？」

「聞くな。聞かないでくれ」

もっと追求してみたかったソラではあつたがあまりにもクロノの形相が必死だったので留めておいた。

「ってそういえば、君は力を取り戻したんだな!？」

「もっちろん……！……まぁ、リクのは失敗しちゃったけどな」

「そうか……まぁ、とにかく無事で何よりだ」

「おう……！……でさ、これからどうする？」

「一旦アースラに戻りたいんだが、生憎ここは通信ができないらしい。一度入り口まで戻ろう」

「了解！」

そして二人は入り口に戻るべく歩き出した。
上半身半裸で。

-. -. -. -. side リク

「くそ！なんでだ！俺のほうが強い！あんなやつに負けるはずはないんだ！！」

悔しさのあまり部屋で一人叫ぶ。

誰もいなかった部屋。しかしそこに突如気配が現れた。それに気づいたリクは気配の方向に振り向いた。そこには黒いコートの男。

「真に強い心の持ち主が、キープレードを手に入れるのだ」

「心？俺の心があいつより弱いつて言うのか？」

「あの瞬間では。だが人は強くなれる。闇を恐れることなく、扉への奥へ進んだお前には 勇気がある。さらに深い闇へ突き進むほど お前の心は強くなれる」

「どつすればいい？」

「闇に心を開くのだ。それだけでいい。お前の心そのものが、すべてを飲み込む闇になるのだ」

そんな声にリクは耳を傾け、闇の力を解放した。
リクは自分を蝕むような感覚を体に覚えたが、気にせず続けた。
リクからは闇のオーラが立ち上った。

「ククク、クロノ君！？どうしてそんな格好なの！？」

「クロノ執務官……」

「クロノ君……」

女性陣から上がる声。

緊張感のない空間だなあ……。

思わずそう思ったソラだった。

- - - - -

回復魔法を受けバリアジャケットも元に戻り傷も治ったクロノ。
体の傷は治ったが精神的な傷はまだ治りきっていないようだ。顔色
が暗い。

そんなことはさておき、一度状況を整理した。

これからの方針は

第一にプレシアテストアロッサの捕縛
次にリクの捕縛

となった。これは最終決定であり、ソラも納得していることであつた。

ソラとしては避けたいことだったが、こう、何度も失敗となるとわがままも続けることはできない。

「では、今後の方針はこれで行きます。しかし、リクさんという少年は並の局員ではかありません。よって精鋭メンバーを選出したいと思います。」

全員の顔がこわばる。緊張と覚悟の顔だ。

「まず、クロノ執務官」

「はい」

「次に、なのはさんとユーノさん。お願いします。しかし無理はないてください」

「はい!」「」

次々とメンバーが選出されていく。

ソラは少し緊張していた。自分が選出されるのか、というのもあったが、それ以上にリクがほかの誰かに捕縛されてしまうことを恐れていた。納得したとは言っても、友達なのである。捕縛される姿は見たくない。

「あと私も現場に向かいます」

「艦長もですか!？」

「それほど事態です」

艦長自ら……とぞわめきが起こった。普通トップが出払うことなんてありえないからだ。

「最後に、ソラさん。お願いします。リクさんとは貴方が」

「!!!?!?!?俺が!?!」

「あなたが相手ならリクさんの心変わりも望めます。希望は最後まで。ほかの方達はプレシアテストアタロツサを中心に捜査を」

「「「「「了解!?!」「」「」「」

メンバー選出が終わり、布陣も済んだ。

「では、作戦は30分後に。それとエイミーさんはなんとか向こうの映像と転送ポートの設置を」

「了解!!」

「それまで各自は準備を。これで解散にします」

決戦は目の前に迫っている。

布陣（後書き）

うん

ちょっとここでアンケートさせてください。
正直にどうぞ！

1 この小説は少しでも面白い Yes / No

2 A・S は飛ばしてもいい Yes / no

3 他、意見など

よろしく願います。

2 に関してですが、KH的に見ると358に被るのですが……最後の7Daysだけにしようか迷ってます。あと、6年間をどう埋めようか、など（笑）

まあ答えていただければ幸いです

プレシア＝テストロッサ（前書き）

ほぼ点プレです。ごめんなさい。

正直自己流解釈80%です。ごめんなさい。

つてかおもしろくねえ……

プレシア＝テストロッサ

突入まであと21分

- - - - - side フェイト

……ああ、これは夢か。

気づくまで時間を要した。
懐かしい夢。

景色がきれいな丘にピクニック。
自分と母、プレシアが楽しそうに笑っている。これは、いついつた
んだっけ？

「ねえ？とてもきれいな？アリシア？」

アリシア？私の名前はフェイトだよ？

「さあ、いらっしやい？」

そういわれて私は母さんのほつに歩み寄る。

かぶせて貰った花の冠。母さんが作ってくれてうれしかったのを覚えてる。

「ほら、かわいいわ、アリシア？」

私は、フェイトだよ？

- - - - -

目が覚めるとそこは部屋の中。

おそらくあの女の子に負けて運ばれたんだろう。

近くに扉がある。

外に出られるようだ。アルフはツドに伏して寝ている。ずっと自分の事を見ていてくれたのだろう。今はゆっくり寝かせてあげることにした。

- - - - - side out

- - - - - side アルフ

突入まであと20分

ん……いつの間にか寝ていたようだね……

「フェイト？……フェイト!？」

フェイトが寝ていたはずのベッドには誰もいない。しかしまだ体温が残っていることから時間は経っていないようだ。

「フェイトを探さないと」

アルフもフェイトを追うように外へ出て行った。
部屋には誰もいない。

- - - - -

突入まであと23分

フェイトが目を覚ます、少し前のこと。

ソラたちは突入を言い渡され、各々最後の準備に取り掛かっていた。もっとも準備といってもたいしたことはない。できるのはイメージトレーニングや互いに緊張を解きあうといったところだ。

そして突入まで役20分、解散を言われ10分ほど経ったころ、エイミーほうからいい知らせがあった。

『時の庭園内の映像をキャッチ！！音声ともに取れたよ！！』

これから突入する場所の映像だ。見ておくだけでも十分有利になる。全員はモニターのほうに目を向けた。

(カイリ……!?)

そこに写るのは一つの部屋にある二つの影、それと画面の端にはカイリの姿。

中心にはなにやらポットがある。二人の周りにも同じようなポットがある。

『遅かったわね、もうそろそろこちらに突入するところですか?』

プレシアがこちらに語りかけた。さすがは大魔導師。映像をつないだ魔力だけでこちらに気づいたらしい。しかし視線はポットのほうを向いている。

「プレシア女史。あなたを次元犯罪の容疑を逮捕したいのですが、投降は……ありませんね」

『当然でしょう? 私には目的がある』

「目的?」

『ええ……おや、フェイトはそっちにいるんじゃないの?』

「フェイトさんは怪我で休んでいますよ。あなたの攻撃で受けた怪我で、ね」

『あれしきの攻撃だけで動けなくなるなんて……やっぱり失敗作ねえ……』

いま、この女はなんとやったろうか？フェイト、という人間に対し失敗作？

「失敗作……フェイトさんのことを言っているのですか？」

『そうよ。あの娘は私の娘のレプリカ……人形なのよ……！』

「人形？ふざけないでください……！」

あたりも騒然としている。当然だ。このような会話、正気の沙汰ではない。

しかし、その場を凍らせる鶴の一声。

「母さん？いまの、どういふこと？」

いつのまにか目が覚めていたらしいフェイトの声だった。

.....

.....side フェイト

いまだにだるい体を動かし、先へと進んでいく。前方を見ると光が出ている場所があった。おそらくこの艦体の最前、ブリッジにあたる場所だろう。とにかくそこへ向かうことにした。そこには戦った女の子、高町なのはと、いつか世話になったソラの魔力反応があった。

ブリッジに近づくとつれだんだん音が聞こえるようになってきた。

『当……でしょ……う？わ……しには……ある』

……母さんの声？

誰かと通信をしているようだ

『え……や、フェイ……に……ん……じやな……の？』

今、フェイトといただろうか？自分のことを話しているのかもしれない。そう思い、急ぎつつも慎重に、誰にもばれないように部屋に近づいた。

ここならはつきり聞こえる。

『あれしきの攻撃だけで動けなくなるなんて……やっぱり失敗作ねえ……』

失敗作？

「失敗作……フェイトさんのことを言っているのですか？」

これは……たしか艦長の声だ。

『そうよ。あの娘は私の娘のレプリカ……人形なのよ!!!』

私の娘、とは自分のことだ。間違いはない。自分は母さんの娘なのだから。では、あの娘とは誰のこと？失敗作って、誰のこと？人形って？

後ろで聞いているのに絶えられなくなってしまった私は、思わず声を出した。

「母さん？いまの、どういふこと？」

自分でも分かる。震えていて、弱弱しい声だった。

- - - side out

「フェイト……!?!」

「フェイトちゃん……」

ソラとなのはがともに声をかけた。しかしフェイトにその声が届いているのかいないのか。フェイトはふらふらと千鳥足に近い状態でモニターがよく見える位置へ移動した。

「母さん、どういう、こと?」

途切れ途切れ、震えた声。声を出すのもやっと、というような声。そんな声に気づいたプレシア視線をこちらに向けた。

『もう、ダメね。時間がないわ。たった九個のジュエルシードロス
トロギアではアルハザードにたどり着けるかどうかはわからないけど……でも、もういいわ。終わりにする。アリシアこの子を亡くしてから暗鬱の時間を……身代わりの人形を娘扱いするのも……』

プレシアの口から残酷な言葉が流れ出る。

フェイトの顔はどんどん曇ってゆく。今にも逃げ出したがっているフェイトをつなぎ止めるかのようにプレシアはフェイトの名を呼んだ。

『聞いていて。貴女のことよ。フェイト』

フェイトの体がビクンと跳ね上がった。

『折角、アリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない私のお人形』

プレシアの言葉に全員が息を呑んだ。まるでフェイトを自分が作り上げたかのように言う。そんなプレシアの言葉をエイミーが補足する。

「最初の事故の時、プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成……そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時、彼女の研究でつけられた開発コードなの」

壮絶な事実。人造生命……死者蘇生……すべての言葉がフェイトに突き刺さる。

『よく調べたわね。そうよその通り……だけど、ダメね。ちっとも上手いかなかった。作り物の命は所詮作り物。失った者の代わりにはならないわ』

プレシアの言葉は容赦なく投げかけられる。そのすべてがフェイト

の心を深くえぐっていた。

「やめて……やめて……！」

なのはの叫び声があたりに響く。

『アリシアはいつでも私に優しくかった』

それでもプレシアは続ける。

「プレシア！やめろ……！」

ソラも叫ぶ。しかしプレシアはとまらない。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、慰みに使うためのお人形。だから貴女はもういらぬわ。どこへなりと消えなさい……！』

「プレシア……！」

「お願い！もうやめて……！」

なのはに關してはもはや懇願に近いものとなっている。

『ふふふふ、はははははははははははは！！』

右手を頭に当ててプレシアは狂ったような高笑いをした。まるでフエイトの存在をばかにするようだ。

フエイトの瞳に涙が浮かび上がっている。今までフエイトは声を発しなかった。いや、発せなかった。

そんな状態のフエイトに対し、プレシアは

『いい事を教えてあげるわ。フエイト。貴女を造りだしてからずっとね、私は貴女が大嫌いだったのよ！』

止めを刺した。

フエイトはその場に崩れ落ちた。

- - - side アルフ

「フエイト！...どこにいるんだい！...」

フェイトの事を探すアルフ。普段なら精神がリンクしているためすぐに見つかるのだが時の庭園で墜とされて以来、繋いでいないのでなかなか見つからない。

「あそこか!!」

目の先には光が出ている場所。アルフはそこへ駆けつけた。そこから声も聞こえる。近づくほどその声ははっきりしていく。自分が聞きたくない、忌々しい、あの女の声だ。

『……りだしてからずっとね、私は貴女が大嫌いだったのよ!』

あいつ!!散々フェイトを使っておいて……!!

怒りに満ちた目で部屋に入るアルフ。そんなアルフが最初に見たものは……

その場に崩れ落ちるフェイトの姿だった。

- - - - - side out

『さあ、時間がもったいないわ。はじめましょう』

プレシアはそういつと目の前にジュエルシードを展開させる。すると周囲の空気が揺れ始めた。

「なにを……………まさか!!」

何かに気づいたクロノは叫ぶ。

『そうよ!この力で旅立つのよ……………忘れられた都…アルハザードへ!!この力で取り戻すのよ……………すべてを!!』

そしてすべてのジュエルシードを一気に発動させた。そばにいたはずのリクの姿はない。

アースラ艦内でも警報が鳴り響く。

艦内ではリンディが局員に指示を回し、事態に備える。そして

「精鋭メンバーに伝達!!今から、急遽時の庭園へ向かいます!!」

10分早い出勤命令が出された。

画面では、狂ったように笑い続けるプレシアが写されていた。

プレシア＝テストアロッサ（後書き）

どーしょ、カイリどつやって出現させようっ..

計画（前書き）

ちよとだけ過去の話。とはいってもほんの少し。
時間としてはクロノとソラがアースラに帰っている途中。
リクが闇に堕ちたすぐ後って所。

計画

時の庭園にいる二人の会話。一人はプレシア

「ジュエルシードでどうするつもりだ？」

「アルハザードへ向かうわ。9個ロストロギアだけで足りるかは分からないけども」

「アルハザードへの扉は、どう開くつもりだ？」

「あなたが探してきた、その少女。不思議な力があることが分かったわ。彼女の力を借りるのよ」

「力、か。もつたいない使い方だな」

「何が言いたいの？」

「さあ？それは関係ないことだ」

「……………まあいいわ。とにかくその少女は扉を開くのに大いに役に

立ってくれる。本来は彼女と同じ素質のものが7人必要らしいのだけれど、そのためのジュエルシードよ。」

「ジュエルシードで代用するのか。まったく持ってすばらしい」

「だから9個で足りるかが不安なのだけれど……まあ、いいわ。もうすぐよ。もうすぐ私の夢がかなう。もう一度、失った時間を……ああ、アリシア、もう少し、もう少しよ」

「管理局は、どうするつもりだ？」

「そのためのあなたよ。さっきの通信で、何人が来るわ。あなたはそいつらを蹴散らしておきなさい」

「……………いいだろう。だが、その後は好きにさせてもらうぞ」

「ええ。勝手になさい」

二人の会話はここで終わる。

この会話によって何が起るのか、誰も知らない。

真の暗闇はここから始まる。

計画（後書き）

正直こっからが一番書きたい。たぶんペース上がります（笑

そしてごめんなさい。一つ教えて。

プレシアのイメージを動物にたとえてください。なるべく悪そうな動物で。

例 へび

もちろんドラゴンとかもありです。
メッセにて受け付けます！

End of The World . (1) (前書き)

ついにクライマックスですな。

久しぶりにしてこの短さ。申し訳ない。

感想など待ってますね。

うわぁ……やっぱりハートレスだらけだ。

一度は入れたから今回も入れるだろう、と思っていたがそうもいかないようだ。ハートレスはもちろん傀儡兵も多く、とても一人で太刀打ちできる量ではなかった。

さらに傀儡兵は物理、魔法ともに効きにくい。つまり持久戦のとなってしまう。もちろんその防御を圧倒する攻撃があればいいのだが

「クロノ！なのは！気をつけるよ！こいつら普通の攻撃は……」

ソラは二人に注意を呼びかける。しかし後ろを振り返ると、

「ディバイン！！バスター！！」

魔法でいとも容易く兵士を吹き飛ばしているのはと

「甘いな」

《Break impact!!》

的確に急所……間接部分を打ち抜いているクロノ。

コレ、俺いらんないんじゃないか？
そう思うほどの頼もしさだった。

まだ道のりは長い。

走っている最中、床が抜けている部分があった。そこから除かせる黒い空間は『キヨスウクウカン』というらしい。落ちたら魔法は使えないから重力のそこまで真つ逆さま。あがつてこれなくなるらしい。もつとも誰かが行って帰ってきたことがある訳でもないので、真相は謎らしい。
どつちにしろ怖いよなあ……

そう、思いながら先へ進むソラたちだった。

「これが、プリンセスの力か？」

「ええ。ただこの子の力は不完全のようだけど」

会話する二人　プレシアとリクの二人の間のベッドには死んだように眠っているカイリ。

「どうするつもりだ？不完全では、扉は開かないんじゃないのか？」

「そのためのジュエルシードよ。本来の予定ではジュエルシードだけだったのだから」

二人の計画は着々と進んでいる。

「そろそろ計画の真髓を教えてください。ここまで協力したんだ。内容ぐらい知っていてもいいだろう？」

「そうね……。あなたになら、言ってもよさそうね」

そういい、プレイシアはリクに計画を話し始めた。とはいっても計画はとてもシンプルなものだった。

カイリ……プリンセスの力というのは微弱ながら『世界の扉』を開く力がある。その力をジュエルシードで引き出して倍増、増幅。本来7人そろって発動する力を倍増させる計画らしい。

「すばらしいな。成功すれば……？」

「ええ、アルハザードは愚か、どんな場所へでもいけるでしょうね。もっとも私はアルハザードにしか興味はない」

「扉を開くと、世界には闇が溢れる。それでもいいのか？」

「構わないわ。闇など、私の魔力でどうとでもなる。現に、この庭

園のハートレスたちは私に従っている。問題ないわ」

「……………そうか」

話を聞いていたリクはやや深刻そうな顔をしていた。しかし、プレシアが後ろを向いたとき、にじみ出る笑みを抑えられない、そのような顔で笑っていた。

先に進んでいくと表れたのは大きな部屋とハートレス。ハートレスの先には一つの階段。進むべき道はあれだけだ。

「先に行け！ここは僕が食い止める！」

「何言ってるんだよ！クロノだけじゃられちゃうぞ！？」

「僕をなめてもらっては困る！」

会話のうちにもクロノは飛行型のハートレス、ワイバーンを倒す。……………ここはクロノを信じよう。

「なのは、行こう。オレ達は早くプレシアを止めないと！」

「でもクロノ君が……!!」

「大丈夫だ!」

ソラはなのはの手をひく。

「クロノ君、お願いね!」

「ああ、任せろ……。よし、いまだ!」

クロノは魔法でハートレスを蹴散らして一本の道を作る。
二人はその間を一気に走りぬけた。

先に進むとそこは少し暗い場所そこにいたのは

「ん?なぜあなた達がここに……リクは何をやっているのかしら」

プレシア「テストロッサ

「お前……フェイトに何したか分かってるのか!??」

「さあ?私は、私がしたいようにしただけ。私のものを私が思うように使って何が悪い」

プレシアはさも当然のことのこのように言う。

「フェイトちゃんが、どんなにあなたのことを想ってきたか……それなのにあなたは!!」

「あなた達には関係ないでしょう？それにフェイトは私のことを想っていても私はこれっぽっちも想っていない。私に必要なのはアリスアだけ……取り戻すの。こんなはずじゃなかった世界の全てを！」

プレシアにはこれ以上いっても無駄らしい。どんなことをしても過去は取り戻せない。

ソラとなのはの堪忍袋の緒は切れた。

「ふざけるな!!」「ふざけないで!!」

二人は怒りに任せプレシアに襲い掛かった。

プレシアは回りに魔法陣を形成して紫電を放つ。

ソラはそのままつつこみ、なのはは飛行しつつソレをよける。

「デイバインバスター!!」

なのはが砲撃を放ち、

「ラストアルカナム！」

怯んだ隙にソラの連撃。

事前にあわせているようなコンビネーションでプレシアを翻弄する。

「くっ!!！」

プレシアはそれを喰らいつつも紫電を走らせた。

「うわぁ!!！」

近くにいたソラは吹き飛ばされる。

しかし紫電を走らせるといふその行為の隙に

「デイベインシューター!!！」

なのはが追撃。

「ぐ……」

プレシアはソレを諸に食らって崩れ落ちてしまふ。

「こんなはずでは………「じほっ!」」

プレシアは血の塊を吐く。すでに体は限界のようだ。そんなところに歩み寄る一つの影

「助けてほしいか？」

「リク!？」

来たのはリク。しかし様子が何かおかしい。その手には

「キープレード?」

黒いキープレード。しかしソラのとほ形が異なり、さらにいろいろなところが欠けていて不完全な形に見える。

「そう。キープレードだ。お前のキープレードとは異なり、これは人の心の扉を開く」

そしてリクはプレシアに近づいていく。

「リク?何をするつもりなの?ねえ!答えなさい!」

プレシアもリクの様子に違和感を、もはや恐怖を覚えている。
そばにいないのだがひしひしと嫌な感じが伝わってくる。なのはは
ソレを受けてか、ガタガタ震えている。
そしてリクは恐怖の目でリクを見つめるプレシアの胸に

「リクのように……」

キーブレードを突きたてたのだった。

End of The World . (1) (後書き)

リクさん邪道!!

End of The World . (2) (前書き)

思ったよりもさっくり書けました

ってかコレは本編にない動きなので台詞をあわせなくて良いつて
いうww

ちわ、えいびんえいびん……

目を醒ますとそこは知らない場所だった。

覚えてる記憶を辿ってみる。そこで思い出したのは自分の母、いや、正確に言えば私の母体の母、プレシアに言われた言葉。

そうか、私は母さんの言葉で……

眠っている間、夢を見た気がする。懐かしい夢だ。

自分と同じ姿形、声をした人と母、プレシアが戯れる暖かい夢。

でも、今はそれも偽りだと知っている。

これは自分の記憶ではない。アリシアの記憶だ。

母さんが求めていたのは私ではなくアリシアだった。

そのことをさらに突きつけられ、気持ちが沈む。

もっともこの気持ちも偽物なのだが。

私は、なんのために生きてきたのかな？これからは何を生きる意味にしたらいんだろう？？

母さんのため？

違う。もう母さんとはなんの関係も無い。すがってはいけない。

ならば自分のため？
でもこれも違う。私はやりたいことがわからない。
なら、なんのため？

そう思い、色々と考える。

だが特に何も浮かんでこなかった。

ふと周りを見渡す。

辺りにはモニターが設置してある。先程からアルフがいないと思っ
ていたが、どうやら前線に行ってるらしい。モニターを見る限りい
つぞやの執務官についている。

そこでふと探す。

あの白い魔導士とソラという少年。何度撃墜しても自分の事を呼ん
でくれた女の子。そしてこっちに来てから初めてまともに話した人
二人とも自分にとって思い入れのある人物だ。

今回の戦闘に参加していない可能性もあったが、彼女らの性格から
してそれは無いだろう。

モニターのどこかにいるはずだ。

そう考え、目を凝らし探す。

「ここじゃない……ここでも………見つけた!!」

一番端の上から二番目だ。

見つけたモニターに映っていたのは、

「……なにこれ……！」

巨大な竜と、それと戦う二人。

竜はどちらかと言うと暴走に近かった。辺りに紫電を撒き散らし、長い尾を振り回す。

「危ない……！」

思わず叫ぶ。

しかしそれが伝わることはない。二人は尻尾に吹き飛ばされ、壁に激突する。

戦力が違いすぎる……！助けないと……！！

次の瞬間にはフェイトはベッドを抜け出し、机には置いてあるバルディッシュを掴み、走り出していた。

「くっそ………」

「う……うあ………」

ソラとなのはは二人でうめき声を上げた。

これは少し前のこと。

「……！！！？」

リクがプレシアの胸に自身のキープレードをつきたてた。その光景自体が信じられないものであったし、見たくないものだった。ましてや親友が行う『殺人行為』など誰もが見たくないはずだ。ところがプレシアは別に死ぬようなことはなかった。

キープレードを突き立てられたプレシアは一度崩れ落ちた。しかしその体からは夥しい量の闇が吹き出る。

「ふふ……ふふふ……この力、この闇……こんなものがあるなんて……！！」

プレシアの体はすでに闇に覆われ、何も見えない。実際無事かも怪しいところなのだが、声が聞こえている限りは無事なのだろう。しかし、その闇が晴れたときに見えたのはプレシアの体などではなく、自分達の何倍もの体を持ち、その姿だけで圧倒的な力の差を感じさせる

竜の姿

「っはは……こりゃすごいや……」

あまりの光景に笑いが出る。しかしそんなことをしている場合ではない。プレシアは一度雄たけびを上げると自身の尻尾を大きく振り

回した。とはいっても巨大な体を俊敏に動かせるわけでもない。ゆ
っくり見ればよければレベルだ。

だからソラはそれを避けようと後ろへ下がる。

しかしなのははそうではなかった。なのはは一步も動かない。いや、
動けていない。恐怖ゆえか、体が硬直しているのか、足を張ったま
まその場から動かないのだ。

しかしそんなことをしている間にも尻尾は迫っていく。このままで
はなのはに当たってしまう。いくらバリアジャケット着ていようと
自分の身長ほどもある巨大な尻尾に飛ばされればひとたまりもない。

「くそ!!!」

ソラは移動した安全圏から駆け出すと、なのはと尻尾の間に体をつ
っこむ。

そして二人は迫り来る尻尾によって壁際まで吹き飛ばされた。

-
-

くっそ、なんて力だ!もう体中が痛い……!!

なのはよりも早く起きることができたソラは自身の体を確認する。

体中痛い、骨折や捻挫など、移動が困難になったりすることはな
いようだ。

大丈夫、まだ戦える!!

「なのは、大丈夫か？」

「は、はい……ソラさんこそ大丈夫ですか？私のせいで………」

「なのはのせいじゃないよ。あんなの見たら誰でも足がすくむよ……さて、どうやって倒そうか？」

このまま何もしないでやられるのも嫌だ。

「ヴェイン！アイツの弱点とか分かるか？」

《まあ、大体は。足や背中などは魔力でできた装甲が分厚く展開されています。おそらく攻撃が通用するのは顔面、または腹でしょうね。ですが懐に入ったときにはつぶされてしまう可能性がありますから、遠距離で攻撃するのが得策かと》

「なら、顔を遠距離で……なのは、戦える？」

「もちろん！」

「じゃ、行くうか！」

ソラとなのははプレシア＝ドラゴンに向かい近づく。ソラは下から、なのはは上からだ。先方は前と一緒。

「アクセセルシューター……！」

「ストライク！」

《Raid!》

各自で頭を狙う。

なのはは誘導弾で。ソラは投擲技で。

「グオオオオオ……」

もはやプレシアではない声が響き渡る。しかしダメージ自体は通っているらしい。

「よし！このまま……」

ソラは言葉を続けようとしたが……

《Attention！！危険です！早くそこから……》

「え？」

ヴィンも警告を出したがそれは間に合わずソラとなのはの頭上から紫電が落ちる。

「うわああああ！！！」

「きゃああああ！！！」

二人は対応できず、諸食らってしまっつ。
むらに……

「くっ……………」

「あう……………」

電撃のせいかわ、体がしびれてしまい、動くことができない。
そこに止めを刺すかのように尻尾が迫る。

ゾクリ、と背筋が凍る。

まずい…!!

衝撃を恐れ、目を瞑る。
襲ってくる浮遊感。

ん？浮遊感？

恐る恐る目を開けるとそこには

「フェイト…!!」

「フェイトちゃん…!!」

金の閃光

フェイト「テストロッサがいた。」

End of The World . (2) (後書き)

どもも!どうでした?こーこうせいです

思ったよりもノリノリで書いた一話です(笑
結局プレシアさんはドラゴンにww

感想待ってますね

End of The World・(3) (前書き)

どもも、こーこうせいです！

更新遅れました！けどこの残念クオリティ。

最初からプロット立てながらやるべきでした。最初からやりなおしたい(笑)

まあ、そんな簡易じです。でわ、どぞ

End of The World . (3)

恐る恐る目を開けるとそこにはフェイト「テストロッサが。

なぜここにいるのか聞きたいところでもあったが、残念ながらそのような時間はない。自分の目の前の獲物を見失い、混乱していたプレシア「ドラゴンも異変に気づき、こちらを見つけ、再び襲い掛からんとこちらを睨む。それを見てフェイトはいう。

「魔力の装甲が固い。だからといって顔や腹を狙うのは危険だから誰かが囷にならないといけない」

ソラとなのははそれをしっかり聞きとる。先ほど受けたダメージも幾分マシになった。もう、動くこともできる。

「その囷は私がやる。だから二人で……」

そう、フェイトがいったところでソラがさえぎる。

「いや、それは俺がやるよ。なのは達の方が上から狙いやすいだろ
うし」

そしてソラは続ける。

「そ、れ、に。折角仲直りしたんだから二人でやったほうが良いって！」

その言葉に、なのはとフェイトは顔を見合わせる。

困ったような、なんともいえない顔のフェイトに対して、なのはは笑顔。

「うん、そうだね」

「……………」

フェイトが返事を返すことがなかったが、それでも何時もの敵視する目とは違う目なのはを見た。

二人は特にコンタクトを取るわけでもなかったが、息ぴったりに、同時に動き出した。

「よし。俺もやるか！」

そしてそれを見たソラも動き出す。

……………

そこからの戦闘は半分一方的といっても仕様がなかった。ソラが主に足を攻撃しつつ、プレシア＝ドラゴンの注意を惹きつけ、そのあいだになのはたちが砲撃を放つ。上を向けば下から、下を向けば上から。最適な陣営だろう。

なのはたちが頭に重い攻撃を入れると、プレシア＝ドラゴンは気絶してしまつたようで、頭をうな垂れる。とはいってもまだ溢れかえる魔力は健在。ヴィンクルムによると回復まで8秒弱。尋常じゃないスピードの回復だ。

しかしたつた8秒、されど8秒。
この隙は大きい。

「もらった!!」

《Last Arcanum!!》

ガッン!と重い一撃をプレシア＝ドラゴンに叩き込んでいく。

「デイバイン……」

「サンダー……」

「バスター!!」

「レイジ!!」

そして空からの砲撃がプレシアすべてを飲み込む。

三人がほぼ同時にプレシア「ドラゴン」から距離をとる。前方は舞い上がった砂や埃のせいでは何も見えず、プレシア「ドラゴン」の体はすっかり見えない。

「ふう……二人とも、怪我はないか？」

「はい！」

「……………」

相変わらずフェイトは無口だが、少しだけ首を縦に振ることでこれに答えた。とくに攻撃をしてくるような様子もなく、粉塵が晴れるまで時間がかかりそうだったので、ソラはフェイトに問いかける。

「なあ、フェイト。言いくいけどあれがプレシアだって……お前の母さんだってことには……………」

「気づいてた。あの紫電は母さんのものだし、なにより魔力が母さんのものだから……………」

「そっか……………ならいいんだ」

「ちゃんと自分で終わらせて、はじめる。本当の私を」

ソラは少し驚いた顔をしてから頷いた。
まさか母親に依存していて、裏切られた人がここまで早く復活する
とは思っていなかったからだ。

粉塵がはれた先に見えたのは、人の形に戻ったプレシアだった。肩
で息をして、口元から血を流している。目だけは此方を睨んでいる
が、弱い。

「はあ……はあ……ぐっ……やる、わね。でも、もうおそいわ。もうす
ぐジュエルシードが完全発動する。すぐに次元震が起きる……」

言葉を紡ぐのもやっとなプレシア。その言葉の通り、辺りは震動し
始め、大気を揺らす。
そんなところに聞こえたのはアースラの艦長、リンディの声。どう
やらあたり全体に通信が繋がっているらしい。

『プレシア＝テストロツサ』

「っ……！」

『終わりですよ。次元震は、私が抑えています』

辺りの振動が止まる。しん、とした空気が流れた。

『忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するのかもしれない曖昧なただの伝説です』

「違うわ。アルハザードへの道は、時限の狭間にある。時間と空間が砕かれたとき、その狭間に滑落していく輝き……!!道は、確かにそこにある!!」

『随分と分の悪い賭けだわ。あなたはそこへ行つて、一体何をするの?失った時間と、犯した過ちを取り戻すの?』

「そうよ……取り戻す。私とアリシアの……過去と未来を!取り戻すの……こんなはずじゃなかった世界のすべてを!!」

プレシアは高らかに叫ぶ。

そして次に響いたのはリンディでも、プレシアでもない人、フェイトの声だった。

「もう、やめよう。母さん」

そばにいた、なのはやソラ、プレシアまでもが驚き、顔を向ける。その場にいる全員が耳を傾けた。

「世界は、こんなはずじゃない事ばかりかもしれない。後悔することばかりかもしれない。でも、世界は取り返せないんだよ。時間は、戻せないんだよ。」

…私も、母さんがいつか笑ってくれるように、前みたいに……記憶の中みたいに私に笑いかけてくれる母さんに戻ってくれるようにがんばろうとした。でも……！母さんは変えられなかった。変えてしまった母さんを取り戻せなかったんだ。

母さんの笑顔も……未来も……！！こんなはずじゃない現実から、逃げるか、立ち向かうかは自由だと思う。だから……！私は立ち向かうと思う……！

……あなたに言いたいことがあります。私は、アリシアⅡテストロツサじゃありません。貴方が作った、ただの人形なのかもしれない。だけど、私は、フェイトⅡテストロツサは、あなたに生み出してもらって育ててもらった、あなたの娘です……！

プレシアはその言葉を黙って聞いていた。しかし、その言葉が終わると、高らかに笑い始めた。

「だから、なに？いまさらあなたを娘と思えとでもいうの？」

「あなたが、ソレを望むなら……。ソレを望むなら、私は世界中の誰

からも、どんな出来事からも、あなたを守る」

「っ！！！？」

プレシアが動揺する。フェイトが届ける全力の言葉がプレシアに突き刺さった。

「わたしが、あなたの娘だからじゃない。あなたが、私の母さんだから！」

.....

.....side プレシア

目の前にいる自分の一人形

なぜそんなことをいうの？あなたに対しあそこまでやったのに。なぜ、私から離れない？

私にはもう、あなたとの接し方が分からない。今更元に戻ることに無理なのよ。

分かっている。もう、アリシアを取り戻すことができないことぐらい。アルハザードへいけないってことぐらい。

でも、ここまでしまった私に残る道は 死 だけ。

そんな事を言われてしまったのは、あなたに依存してしまう。私は、何を間違った？

- - - side out .

「…ふっ。くだらないわ」

「えっ…!?!」

フェイトの目に涙が浮かぶ。そばにいたソラたちも驚き、そして心に怒りを覚えた。

フェイトの言葉を切り捨てたプレシアは自分の持つ杖を握り、地面にたたきつけた。大きな魔方陣が展開され、辺りが大きく震動する。プレシアが発動準備中のジュエルシードを強制発動させたのだ。

「ふふ、この程度では力は足りないけど…!!」

プレシアが光に包まれる。ソレはだんだん強くなり、今にもはじけそうな大きさまで膨れ上がる。

「フェイト！戻れ！そこは危ない！」

ソラはフェイトに呼びかける。しかし、フェイトはそれに答えることはしない。

「母さん…！」

「フェイトちゃん！」

プレシアに駆け寄ろうとするフェイトをなのが制する。光に包まれたプレシアは此方のほうを向き何かを言った。そして光は大きくなり、

「母さん…！」

プレシアもろとも、大きくはじけた。プレシアの言葉が誰かに聞こえることはなかった。

……フェイト、あなたは大丈夫そうね。今更かもしれないけど、
ごめんなさい。アリシア、あなたを一人にしまってごめんなさ
い。

……side プレシア

……ココは、どこだ？

自分は何をしている？
体が痛い。

さっきまでフェイトたちのところについて、そして…。

自分が、自分というものが薄れていく。何をしているのか、分から
ない。このまま消えてしまうのか、はたまた、生き残ってどこかへ
飛ばされるのか

そう、考えていたとき、聞きなれた声が聞こえた

あきらめるのですか？プレシア。あなたは、大魔導士、
なんでしょう？

うそ？

信じられない。なぜ、貴方がココに？

ずっと語りかけていたんですけど、やっと届きましたか。
もしかしたら、あなたの闇その物が抜けたからかも知れませんね。

どういふこと？

今、あなたの闇は、あなたの中にいませんから。

？

あなたは認めていませんでしたけど、フェイトだって、
立派なあなたの娘なんですよ？本当なら、もっと前に止めたかった
のだけれど……今更かもしれませんね。

私は、間違っていたの？アリシアのために、やってきたことも、すべて？

間違いとは、言えません。そんなことは私には分かりません。でも……非、人道的ではありませんね。

……

貴方がココへこれたのは、あなたの闇がないから。あなたはフェイトに救われた。最後の言葉なんて……本当にあなたですか？

……あれは……

私にもよく分からない。

で、しょうね。あなた自身が一番混乱してるはず。あなたの心は、フェイトの心によって変わった。フェイトは変えられなかった、って言うてましたけど、凄く変わってますよね。気づいてますか？

さあ、自分じゃ分からないわ。

まあ、そんなものですよ。

ところで、ココはどこなのかしら？どこを見ても、何も無いんだ
けれど

狭間の世界。闇への世界。……アルハザード

……「ココ」が……

あまり驚かないんですね

そうね。私も、驚いているわ
あんなにもなって行きたかった場所なのに……

これから、どうするんですか？

そうね……どうしましょう？
すこし、眠いわね

なら、寝るのがいいと思いますよ。あなたの体は、ぼろ
ぼろですから。

なら、そうするわ

……最後に聞かせて。

なんですか？

アリシアは、フェイトはどうなってる？

アリシアは……今も眠っています。生命活動は死んでいきますけど、心は眠っています。フェイトは……あなた自身の心が感じるのでは？

……そうね。

わかったわ。ありがとう。

いえいえ。私はあなたの……ですから

そうね。そうだったわね。

わたしは少し眠るわ。あなたはどうするの？

わたしはやる必要がありますので。だからゆっくり休んでください。

そう……

ならそうおかせてもらおうわ。

はい。おやすみなさい。またいつか、会えますから

そう……
それは、うね……しい……わ……

……side
out

End of The World・(3) (後書き)

……はあ、ひどい。デキがひどいです(笑
凄くやり直したい感が…

あ、一応補完!

プレシアたちが戦ってるのはアリシアがいる部屋ではありません。
その前辺りの大広間。

アリシアの部屋には……うん。

そんな感じですよ。

矛盾点、などありましたらよろしくです!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009w/>

魔法少女リリカルなのは～巡り会う鍵～

2011年12月11日02時45分発行